

体が出土しており、本来は存在したと思われる封土上に正置された供献土器の可能性も考えられる。なお、木棺および墓坑の内寸から頭位は北西方向であったと推測され、その場合の方位は真北から約58°西に振った位置となる。

埋葬施設④は、北西周溝の外肩部に位置する土器棺である(図257)。第5-1層を除去し、周溝外周を検出する際に土器が露頭したものである。墓坑は平面的な形状を検出できなかったものの、断面では掘形の存在が認められることから、土器棺とほぼ同じ規模で掘削されたものと考えられる。土器棺の南東部分が著しく乱れるが、検出時からすでにこの状態であったことから、周溝が埋積する過程において外側斜面が崩落し、埋められていた土器棺も破壊されたと思われる。土器棺は、下膨れ気味の体部を持つ平底壺と大型の有段鉢片で構成される(図257-1・2、図版371・372)。出土状況から、壺は

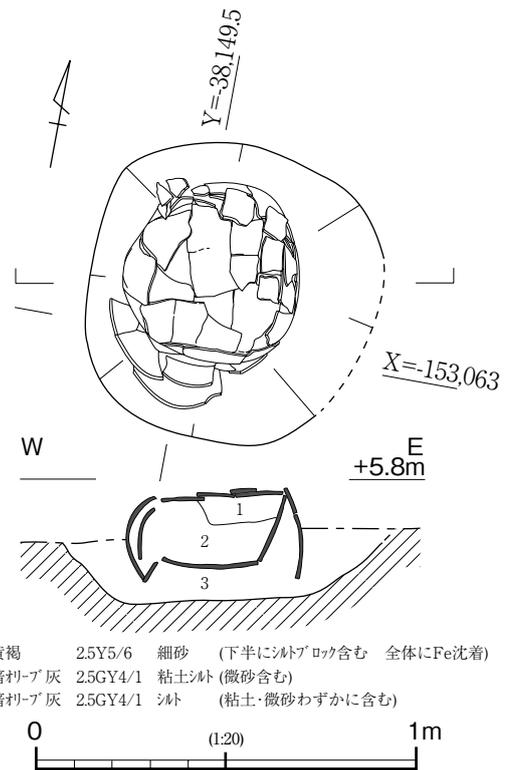


図 258 29号墳埋葬施設⑤ 平・断面

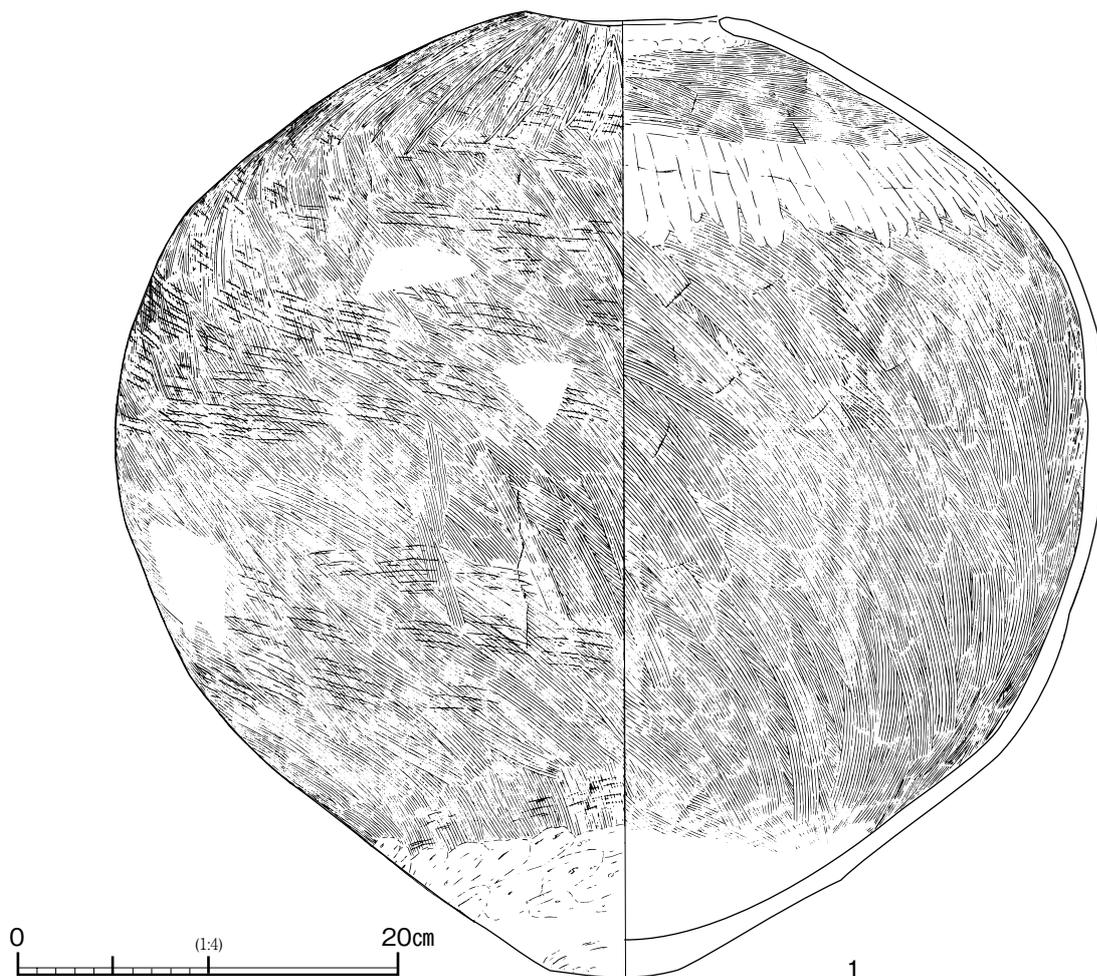


図 259 29号墳埋葬施設⑤ 出土遺物

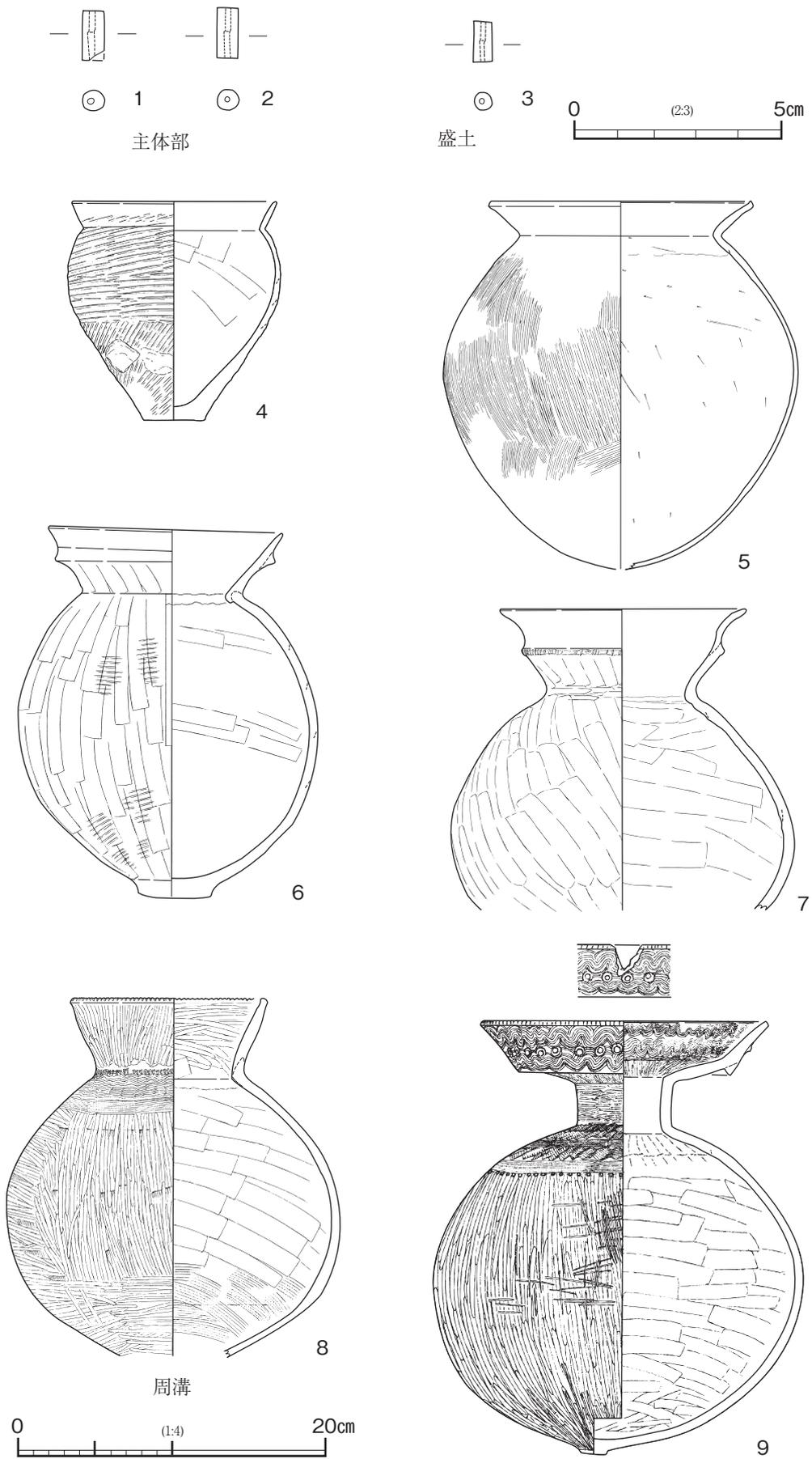


图 260 29号墳 出土遺物

口縁を北西にやや傾けた状態で正置し、その上部に有段鉢の破片を被せた状態に復元される。図や写真では、壺と鉢の大きさに不均衡が感じられるものの、鉢については底部から口縁部までの約3分の1大の破片を棺蓋として流用したものである。

棺身とする壺は原形のままで使用しているため、口径が約13cmと小さく、中に納められるものは限られる。これについては胎衣壺や胎児壺、愛玩動物用等、諸説あるものの、本例については壺内部からの出土遺物がみられないため、詳細は不明である。なお、図化には至らなかったものの、小形器台が共伴している。

埋葬施設⑤は、墳丘の南西斜面に位置する土器棺である(図258)。墳丘盛土をほぼ除去した基盤層の上面において検出した。土器の周囲に直径約80cm、深さ約20cmを測る円形の掘形を検出したことから、墓坑を伴う土器棺と認識する。土器棺は、頸部以上を打ち欠いた胴径約63cmの大型の壺を使用する(図259、図版372)。当初は、出土状況から底部を西に向けた横位の状態で埋納されたものと推測したが、底部に対する東側に開口部がみられないことや、裏込土に異なる部位の破片がみつかったことから、個体を分割した破片を組み合わせる棺状の容器とした可能性を考えるに至った。しかし、肩部付近には一周する破断線がみられることから、入口を拡大するために割った可能性も考えられる。蓋に相当する土器が出土しないのは、上記のような加工が加えられたためと推測する。なお、棺内からは出土遺物はみられなかった。

遺物は、南西周溝を中心にまとまった数の土器が出土した。しかし、量に比して細片が多いため、図

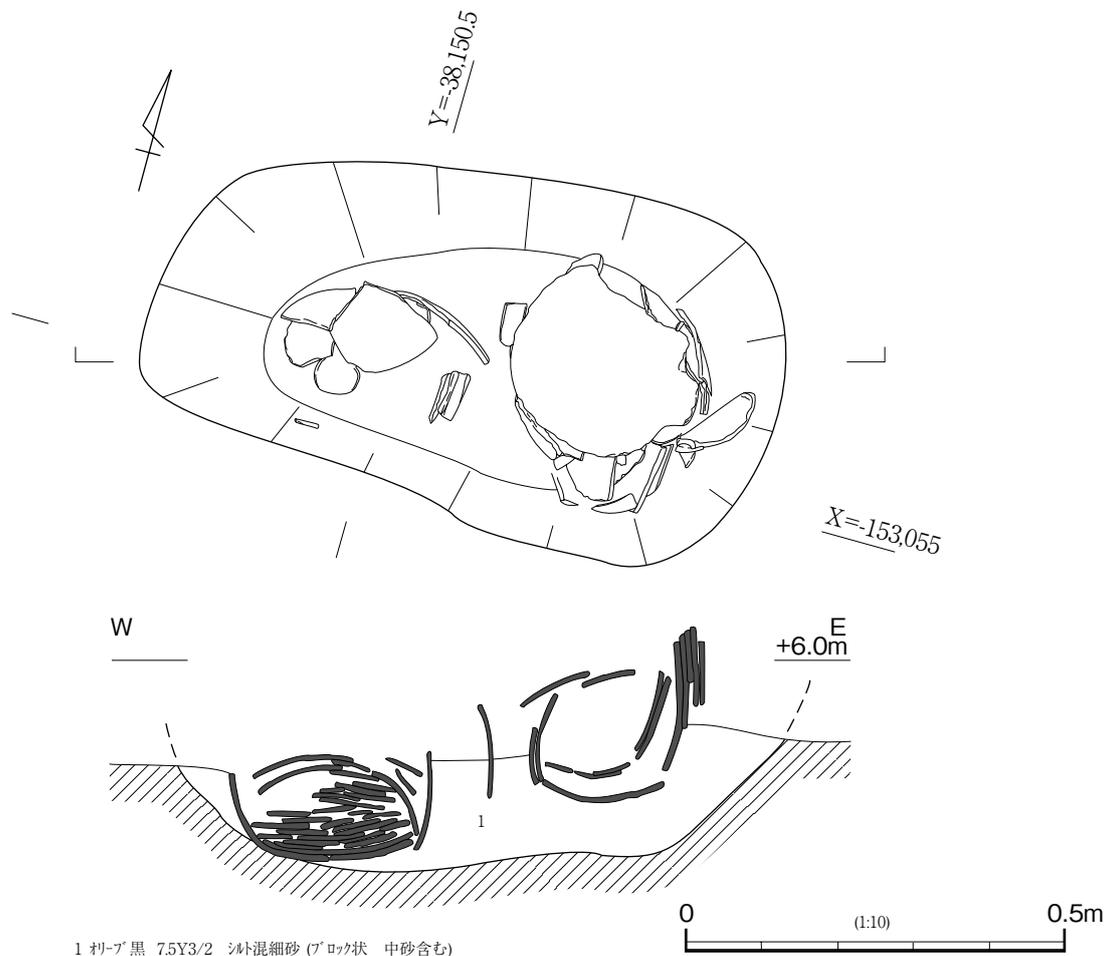


図 261 05340土器棺墓 平・断面

化可能なものは限られる（図260、図版371・372）。5は埋葬施設②の上部、6は南東周溝、4・7～9は南西周溝から出土した。6・7は山陰系の影響を受けた複合口縁壺と思われ、7の口縁屈曲部には刻み目を施す。8は口縁端部に刻み目、頸部付近に刺突文と櫛描文を施す直口壺である。9は口縁部内外面に櫛描波状文と竹管円形浮文、肩部外面に櫛描波状文と直線文を交互に施し、文様の最下に刺突文を巡らせる二重口縁壺である。また、口縁の一部には小さな打ち欠きが認められる。これらの土器から、29号墳は庄内式期古段階に比定する。

05340土器棺墓 29号墳の北西、X = -153,055、Y = -38,150付近に位置する（図253）。

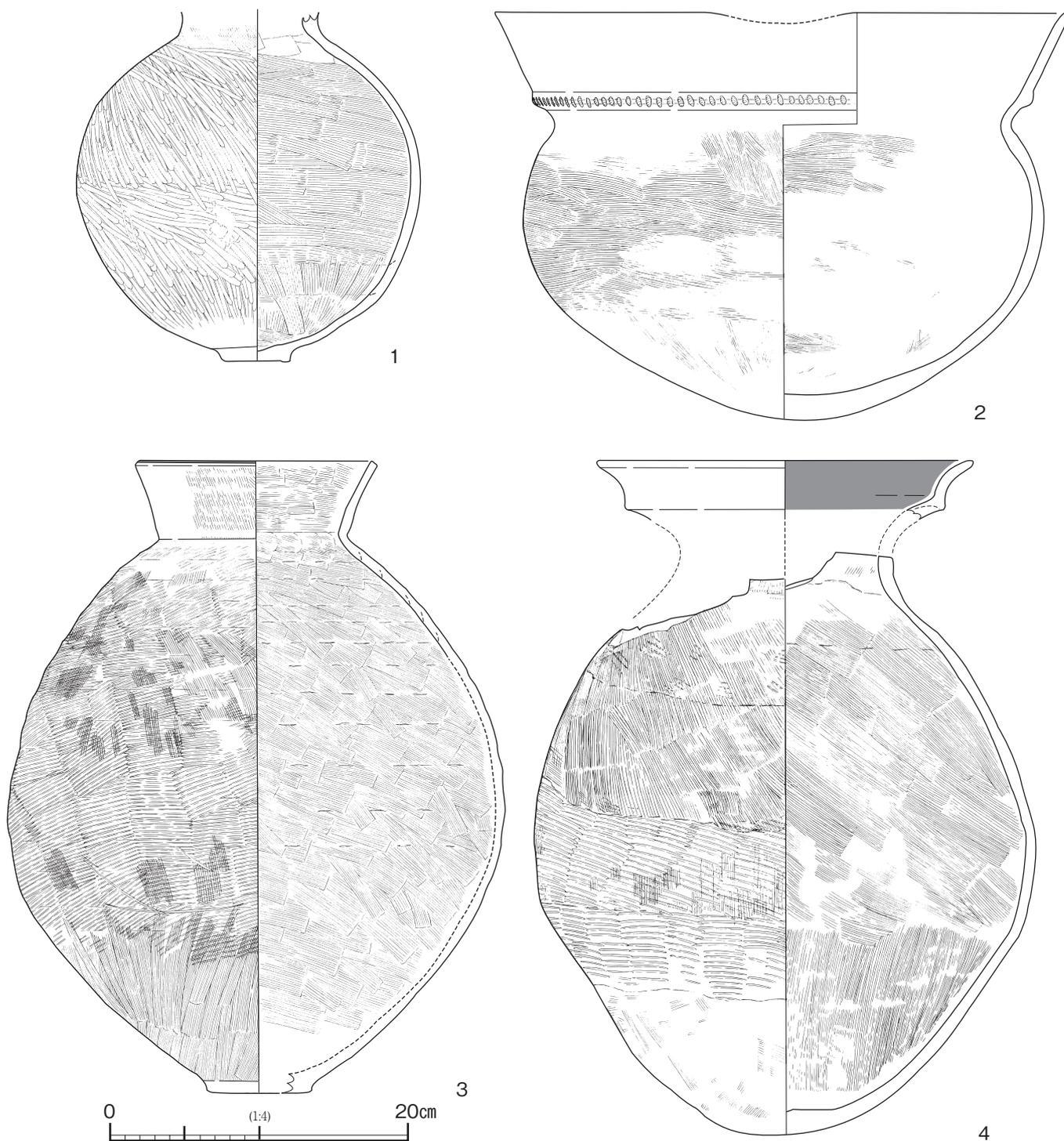


図262 05340土器棺墓 出土遺物

第5-2層の除去中に土器が露頭したものであり、土壌化していたために周辺と区別が付かず、本来は存在していたはずの封土を一緒に掘削してしまったものと思われる。墓坑は東西に長い隅丸長方形を呈し、検出面での規模は長さ約83cm、幅35~47cm、深さ約15cmを測る（図261、図版90）。この細長い墓坑の中に土器が詰まっていたことから、当初は土器棺1基が横倒しになっていると考えたが、その後の調査で土器棺2基が東西に並んだものであることが明らかとなった。断面によると、西側の土器棺は墓坑の底面に接して設置されているのに対し、東側のものは底面より7cmほど上方に位置することがわかる。土器棺の上端も明らかに高低差がみられることから、同時に埋納された可能性は低いと考える。本来は切り合い関係が存在した、時間差のある上下の遺構であったかもしれない。しかし、土器棺の設置場所が偶然、同一になったとは考えにくいことから、故意に横に並べて埋葬された可能性が高いと考える。先に埋葬していた土器棺の傍に、後から亡くなった兄弟等を並べたものであろうか。いずれの棺内からも遺物や人骨等の出土はみられなかったため、詳細は不明である。

05340土器棺に使用された土器として4点を図化した（図262、図版373）。現地での取上げ時に一括してしまったために正確な組合せは不明ではあるが、出土状況の写真から、1・3が西側土器棺、2・4が東側土器棺であったと復元する。1は壺の体部、2は頸部に刻目突帯をもつ大型の鉢であるが、いずれも完形品の2分の1程度の部分にしか復元できず、棺蓋として使用するために故意に割られたものと解釈する。棺身として使用された、3は長胴の直口壺、4は複合口縁壺であり、いずれも口縁部か

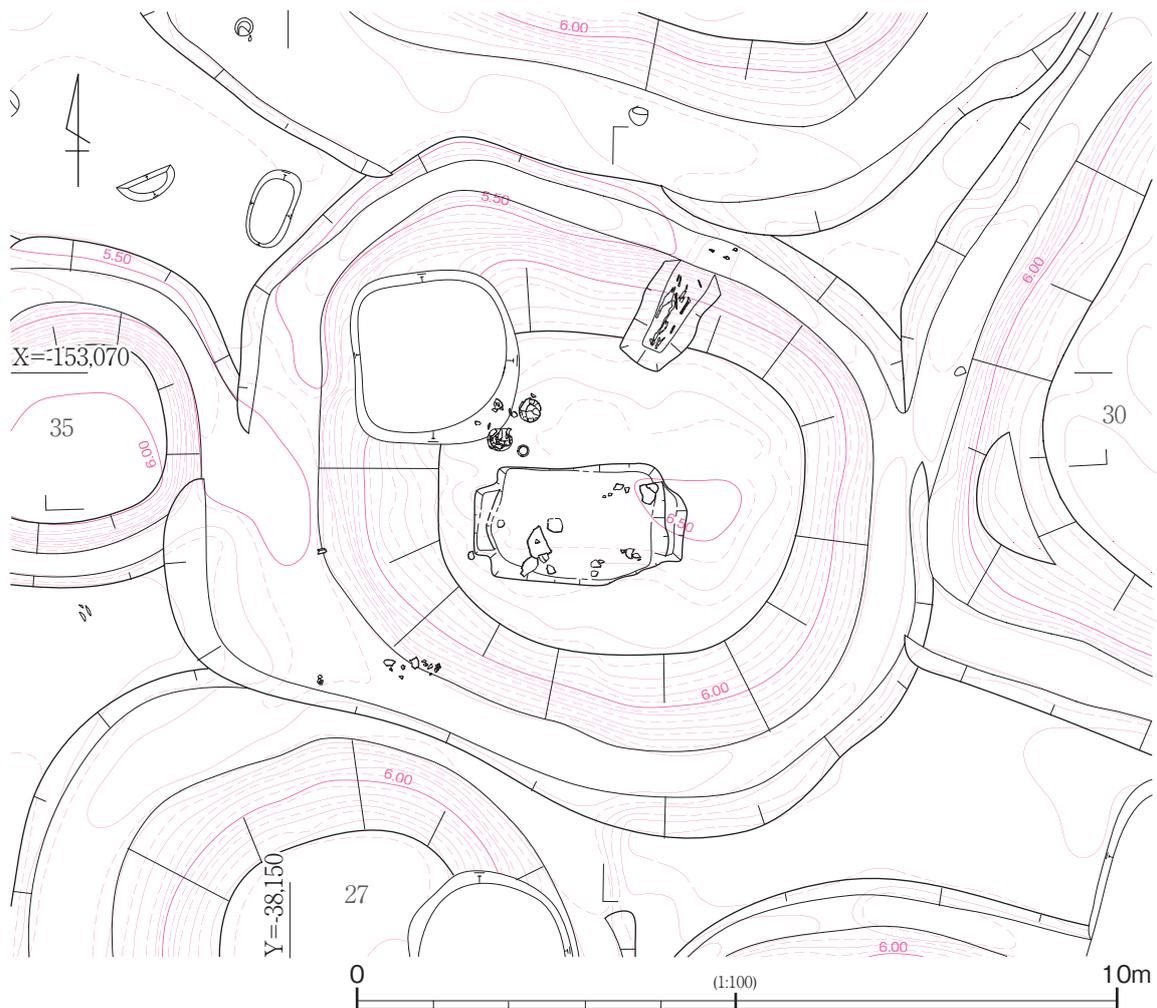


図 263 28号墳 平面

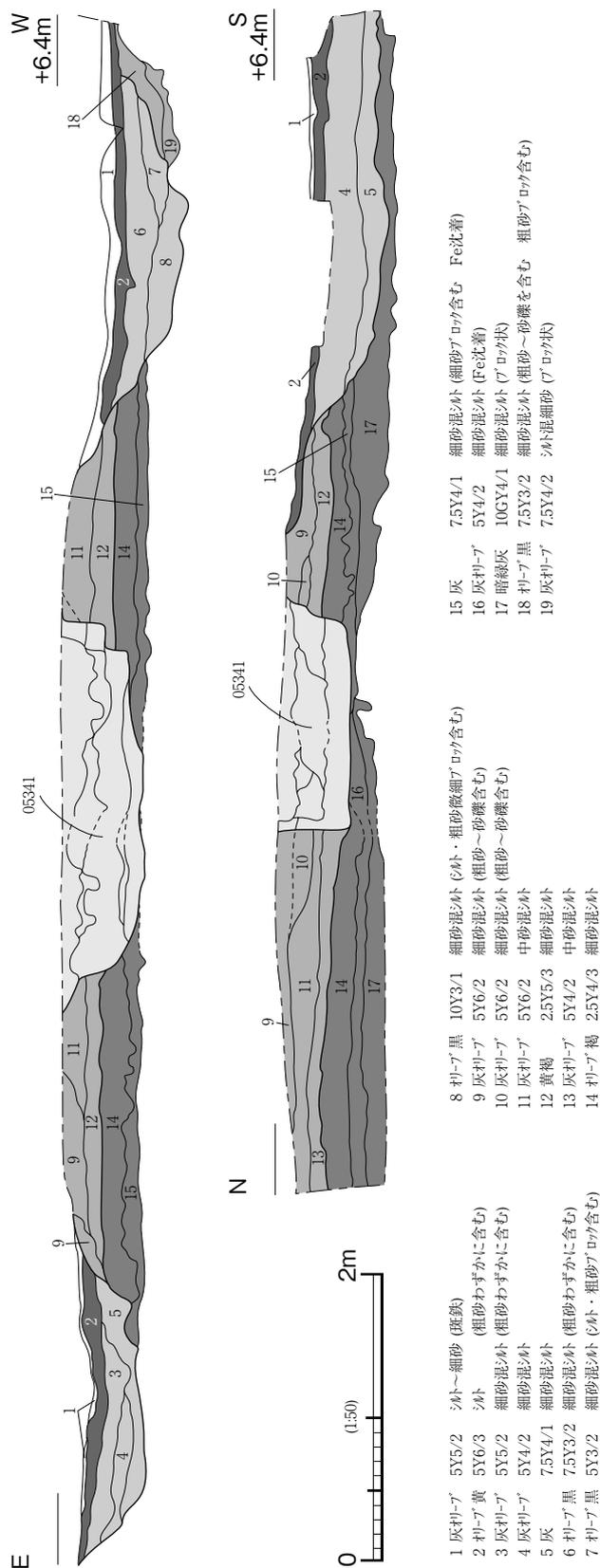


図 264 28号墳 断面

ら肩部を打ち欠いて開口部を上げられている。

4は打ち欠いて碎片となった口縁部が相伴しており、内面全体に不明黒色物質の付着が認められる。これらの土器から、05340土器棺墓は庄内式期古段階頃に作られたものと推測する。

28号墳 調査区中央、X = -153,072、Y = -38,146付近に位置する(図263、図版91・92)。28号墳の周囲には27・29・30・33・35号墳が隣接し、墳墓群の中でも密集する区域である。墳丘の北西部分に後世の攪乱があるために裾部はやや変形するものの、平面は隅丸方形を呈したと考えられる。基底面における規模は、長辺約6.1m、短辺約5.3mを測る。墳丘上部も後世の耕作による削平を受けており、残存した墳丘高は約25cmである。

墳丘断面では、下面に基盤層である第5-2層を2層検出した(図264)。南北断面にみられる最下層は底面が極端に低く、第5-2b面における耕作痕等の遺構埋土と考えられる。基盤層の上部には5つに分層が可能な墳丘盛土を確認した。埋葬施設を挟む両側に同質の土層がみられることから、ほぼ水平に盛土がなされたと考えられる。前述のように周囲には墳墓が隣接し、周溝に切り合いが生じたために正確な数値は不明であるものの、幅1.0~2.3m、深さ35~50cmを測るやや皿状の断面形を呈する周溝が墳丘の四周を巡る。埋土の観察によると、墳丘からの崩落土によって埋没したことが明らかであり、上面には土壌化による第5-1層が形成される。周溝埋土の切り合い関係を詳細に検討した結果、28号墳は、西の35号墳や南の27号墳より後出し、北の29号墳や東の30号墳より先行することがわかった。

埋葬施設については墳丘上に1基と、斜面に1基を検出した(図263)。

墳丘上に検出した埋葬施設は、主体部①に相当する05341土坑である(図265、図版92)。第4面の検出中に本墳墓の墳丘は露頭したが、

それと同時に墳丘中央よりやや南西の位置に方形土坑を検出した。土坑の平面は東西に長い長方形を呈し、南北約1.5 m、東西約2.3 m、深さ約55cmを測る。土坑の東西には、幅約1.0 mに亘って約30cmの方形突出部が付く。突出部は中央より浅いため、段を成して下がる。埋土はシルトを主に砂や炭化物が混じったもので、鉄分の沈着が著しく、墳丘盛土との区別が容易である。また、断面から、層1～5は明らかに他の埋土を掘り込んだ様子が見受けられ、層界が激しく乱れており、本土坑は後から二次的に掘削された可能性が極めて高い。埋土の中位付近からは、土器片がまとまって出土した。いずれも破片の状態であり、明らかに同一個体と思われるものが土坑内に散乱する様子を看取した。これらの土器片以外には、人骨や木質遺物等の出土はまったくみられなかった。

このような形状の墓坑は、本調査区の墳墓郡における他の墳墓ではまったく確認されていない。また、墓坑内の埋土と墳丘盛土は、一貫した作業の中で同一の土砂を用いて行うため、必然的に土質が酷似することとなり、調査では非常に検出され難いのが通常である。しかし、05341土坑の埋土は、土質の内

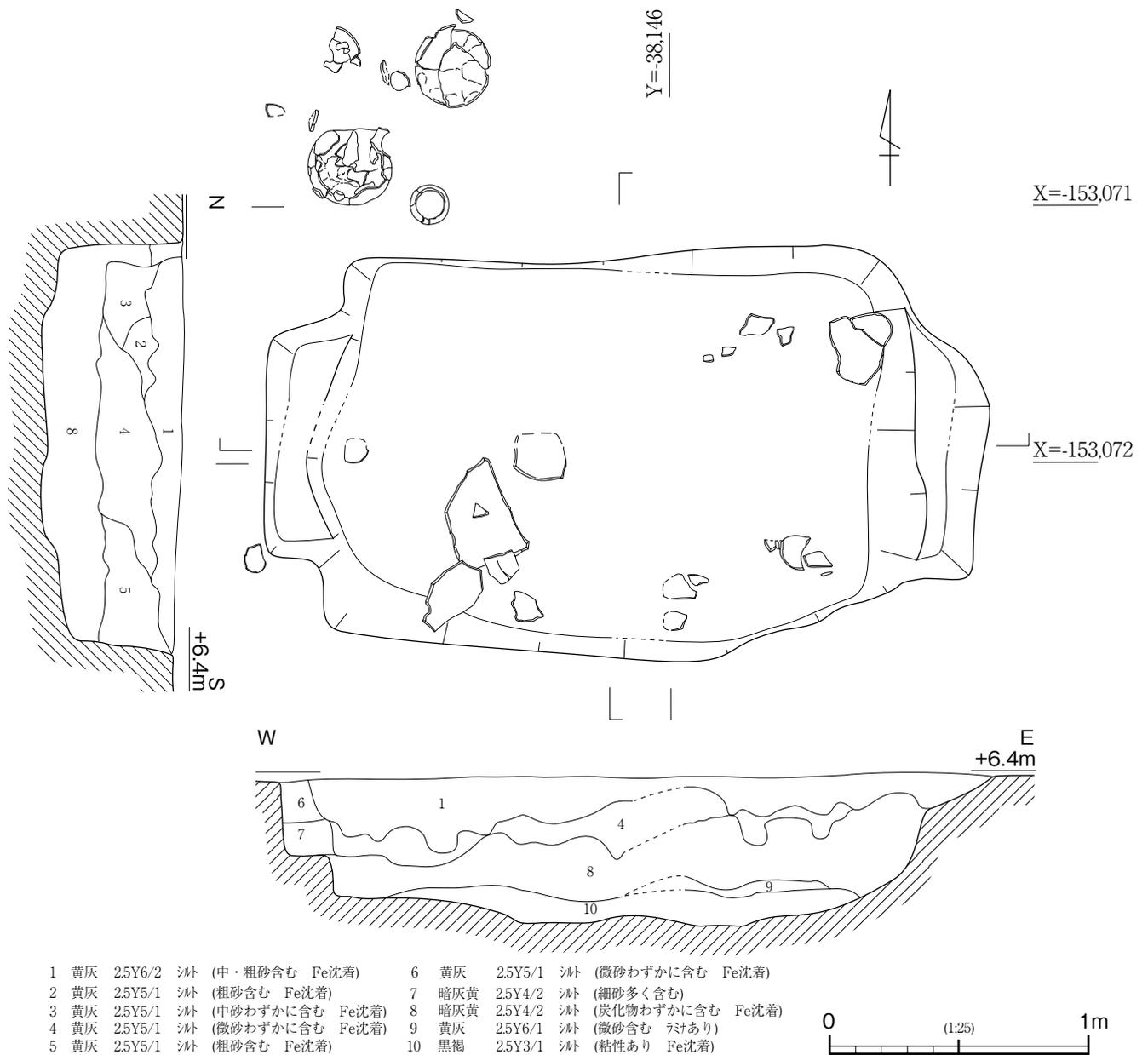


図 265 05341土坑 平・断面、遺物出土状況

容としては大差ないものの、墳丘盛土とは明確に区別され、遺構の検出が容易であった。また、他の墳墓では墳丘断面において鉄分の沈着はあまり目立たないものであるが、本土坑の埋土については顕著に認められた。

これらのことから、墳丘上に検出した方形土坑は本墳墓の主体部であった可能性が高いものの、明らかに後世の攪乱を受けており、その時期や影響範囲を明確にすることができないため、通常の遺構として取り扱うことにした。攪乱については、墳丘が露頭する直上の第3面に点在する方形土坑の可能性が高いと考える（図564・565）。しかし、05341土坑において、これを立証するものが何もみつからなかったことから、遺構面の帰属は変更しない。

05341土坑の北西の墳丘検出面において、土器が2個体出土した（図265）。原形のまま圧碎されたものと思われ、残存状態は良好である。土器の下部は盛土内に埋没していた。削平された墳丘上部を考慮すると、墳丘上面から掘り込まれた土坑等に埋納された可能性や、あるいは土器棺であった可能性が考えられる。

出土した土器は複合口縁壺と壺の体部であり、前者について図化を行った（図267-7、図版376）。突出した平底を持つ複合口縁壺であり、体部下半には焼成後に行った穿孔が認められる。このことから、少なくとも1つは供献土器として墳頂に樹立されていた可能性が高い。また、出土土器の状態から、墳丘上部の削平部分はそれほど厚くないこともわかった。

埋葬施設②は、墳丘の北側斜面に位置する（図266、図版91）。埋葬施設自体は、墳丘盛土を除去した後、第5-2層の基底面を精査中に検出した。しかし、それ以前に頭骨のみは北周溝内から出土しており、墳丘斜面の崩落により露頭していたものと推測する。墓坑の平面は隅丸長方形を呈し、検出時の規模は、幅65~85cm、長さ約1.5mであった。周溝内の頭骨出土地点を含むと、全長は2.1m以上であ

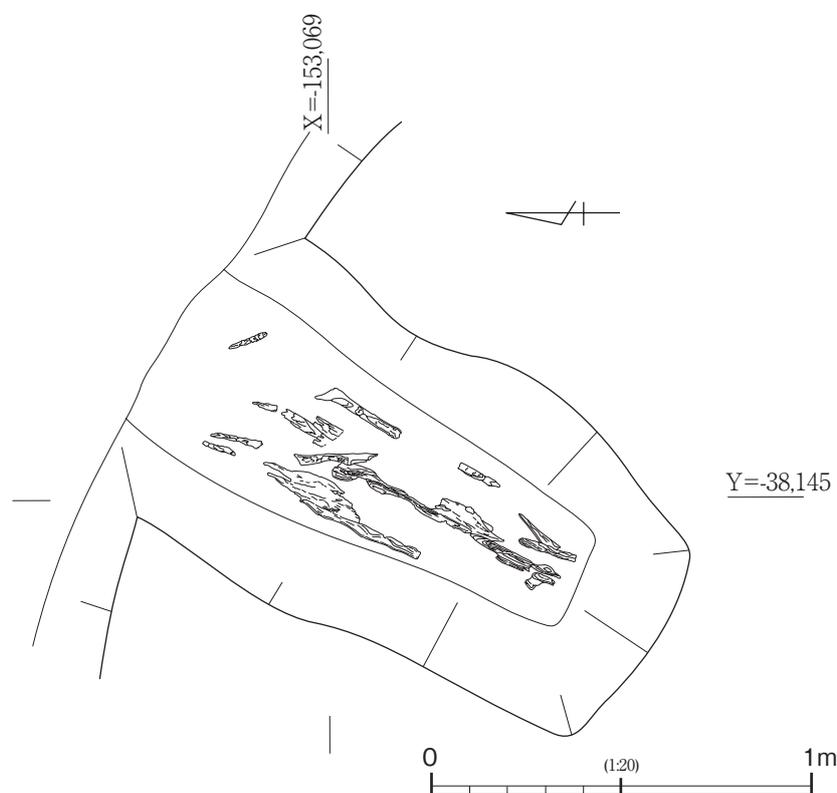


図 266 28号墳埋葬施設② 平面

ったと考えられる。墓坑内からは木棺の残片と人骨が出土した。木棺は残存状態が良好ではなく、辛うじて板状を呈することが認識できる程度であるが、おそらく組合式木棺であったと思われる。人骨も遺存状態が不良であったため、鑑定も不可能であった。

人骨の出土状況から、頭位は北東方向であり、真北から約31°東に振った方向を示す。棺内からは他に遺物が出土しなかったものの、墓坑内から土器が1点出土した（図267-6、図版374）。小型の第V様式形甕であり、内面の下半に縦方向のミガキ調整を行う。外面の叩き目

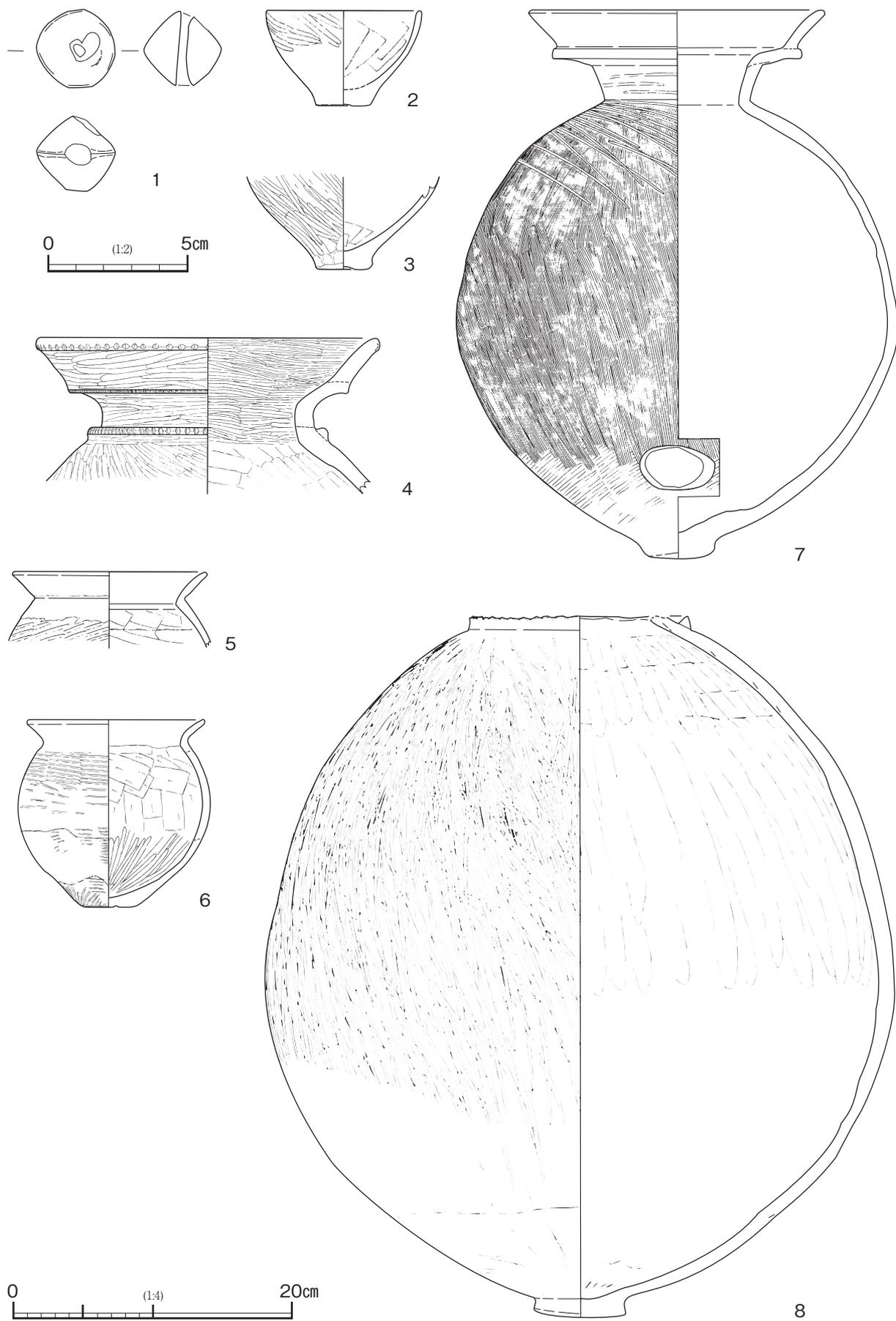


图 267 28号墳 出土遺物

が左上がりの大和型を呈するが、胎土は生駒西麓産である。

遺物は、前述の墳丘上面以外に、南西周溝を中心に墳丘盛土等から出土した。遺物には、鉢・壺・甕等の土器の他、土製品が挙げられる（図267-1~5・8、図版374）。1は墳丘基底面である第5-2層上面から出土した土玉である。算盤玉の上下の平坦面がほとんどない複円錐体を呈する。上下の頂点を孔径約3mmで貫通し、上部には使用に伴う剥離痕がみられる。また、稜線上の対となる2ヶ所に指頭圧痕が残る。2~5は南西周溝から出土した土器である。4は複合口縁壺であり、口縁端部・屈曲部に刻み目を施し、頸部には刻み目突帯を巡らせる。8は頸部に突帯が巡る、平底の壺体部である。頸部から上を丁寧に打ち欠かされている。これらの土器から、28号墳の築造は庄内式期古段階に比定する。

27号墳 調査区のほぼ中央、 $X = -153,078$ 、 $Y = -38,149$ 付近に位置する（図268、図版92）。27号墳の周囲には28・33・36・19・26・35号墳が隣接し、墳墓の密集する中にある。このうち、周溝の切り合い関係から28号墳より先行して築造されたことが明らかである。墳丘の東部に後世の攪乱が及ぶものの、全体的には残存状態が良好である。墳丘の平面は円形に見えるが、墳丘裾部には隅を意識した様子が看取されることから、隅丸方形であったと判断する。基底面における規模は、長軸が約5.2m、短軸が推定で約4.2mとなる。

墳丘断面では、下面に第5-2層を検出し、その上部に4層の盛土を確認した（図269）。盛土は埋葬施設の構築面で上下に分けられるものの、土質や盛土の方法に違いは認められない。周溝は幅1.3~2.5m、深さ約40cmの断面が逆台形を呈し、墳丘の四周を巡る。埋土の大半は墳丘の崩落土や周辺土壌

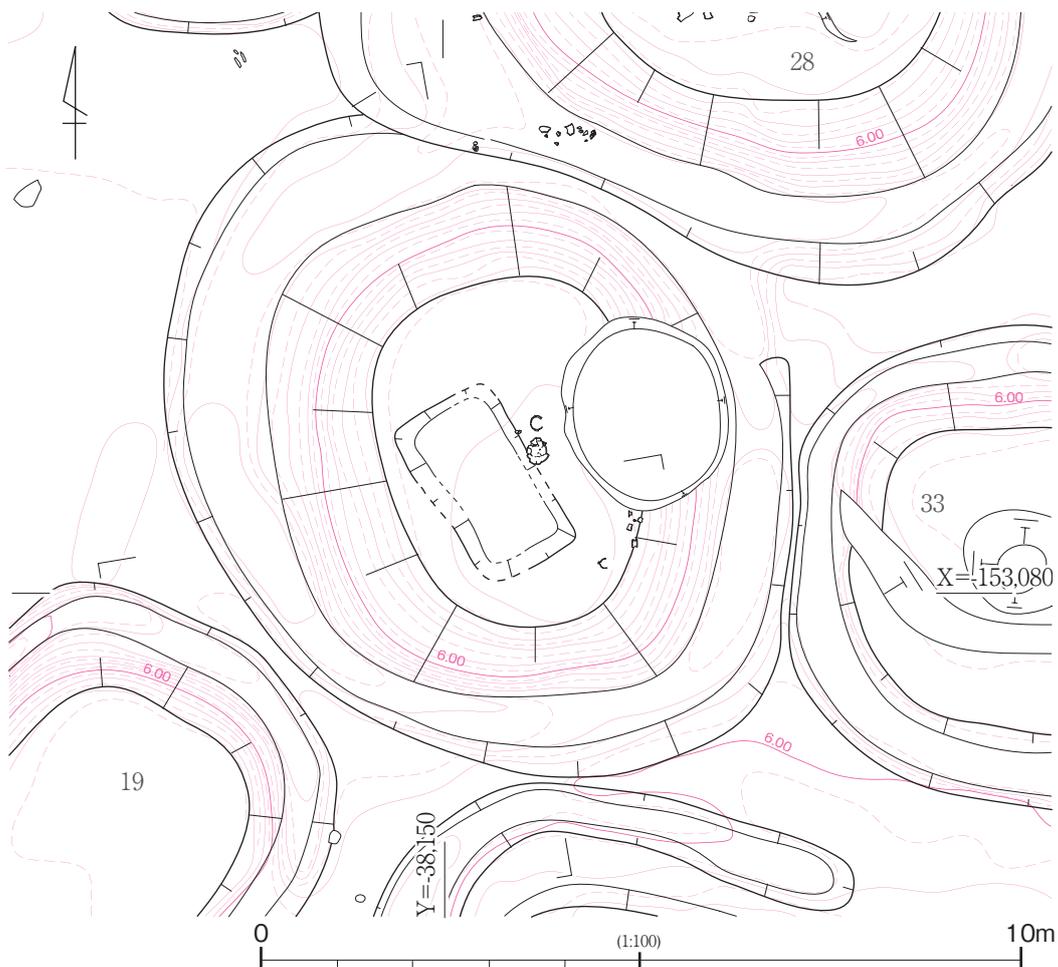


図 268 27号墳 平面

からの流入であり、水成堆積はみられない。埋土上面は土壌化によって第5-1層へと化しており、それ以前に周溝が埋没していたことは明らかである。

埋葬施設としては、墳丘上面に確認した主体部1基のみである。主体部①は墳丘上面を10cmほど掘削した面において検出し、墳丘中央のやや南西に位置する(図270)。平面は隅丸長方形を呈し、幅1.35~1.45m、長さ約2.5m、深さ約15cmを測る。埋土には墳丘盛土と同質の水平な堆積が認められ、内部から木質遺物や人骨等の出土はみられなかった。

遺物は墳丘上面から周溝にかけて出土したもので、土器に高杯・小形鉢・壺・手焙形土器等があり、他に石製品を挙げられる(図271、図版375・376)。1~3・6は、西から南西周溝にかけて出土した土器である。1は杯部が緩やかな段状を呈する小形高杯である。3は頸部に小さな突帯を巡らせる複合口縁壺である。口縁の屈曲部にも突帯を貼り付け、段を強調させる。4・5・7・8は、墳丘上より出土した遺物である。4・5とも複合口縁壺の破片であり、4は頸部に刻み目突帯を貼り付け、5は櫛描波状文を施す。7は手焙形土器の体部であり、口縁端部に刻み目、体部外面にヘラ描きによる綾杉文を施す。8は主体部①の北東肩部の上面から出土した壺の底部片である。突出した平底の近くに直径約2.6cmの穿孔があり、焼成後に打ち欠かれたものである。9~11は、北側の28号墳との境界付近から出土した遺物である。9は砂岩製の、10はチャート製の礫である。自然の状態では当地に礫が出土する可能性は低く、人為的に移動されたものであることは確かであり、10は外面に煤が付着する。これらの遺物から、27号墳の築造時期は、庄内式期古段階に比定する。

36号墳 27号墳の南側、X = -153,087、Y = -38,148付近に位置する。第5-1層を除去した際、27号墳の南側に屈曲する溝を検出した(図268)。溝は幅60~90cm、深さ約10cmを測る。南側に溝の続きは検出できず、溝の内側に盛土も確認できなかった。すぐ南東側に隣接する61号墳と同様、高所に立地するために第4面以降の耕作によって削平されたものと推測する。埋葬施設の痕跡が検出されず、61号墳と異なって遺物の出土も確認できなかったことから、墳墓と判断する根拠は乏しい。しかし、周囲に墳墓が密集する状況において、屈曲する溝を他の遺構に想定することはむしろ困難であり、最も可能性の高い遺構として墳墓を選択し、36号墳とした。

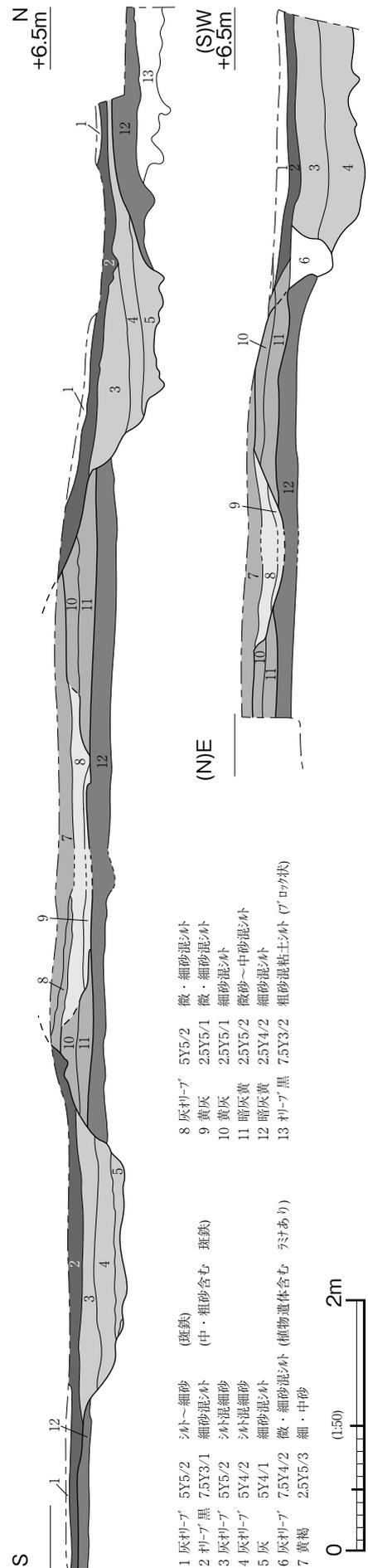


図 269 27号墳 断面

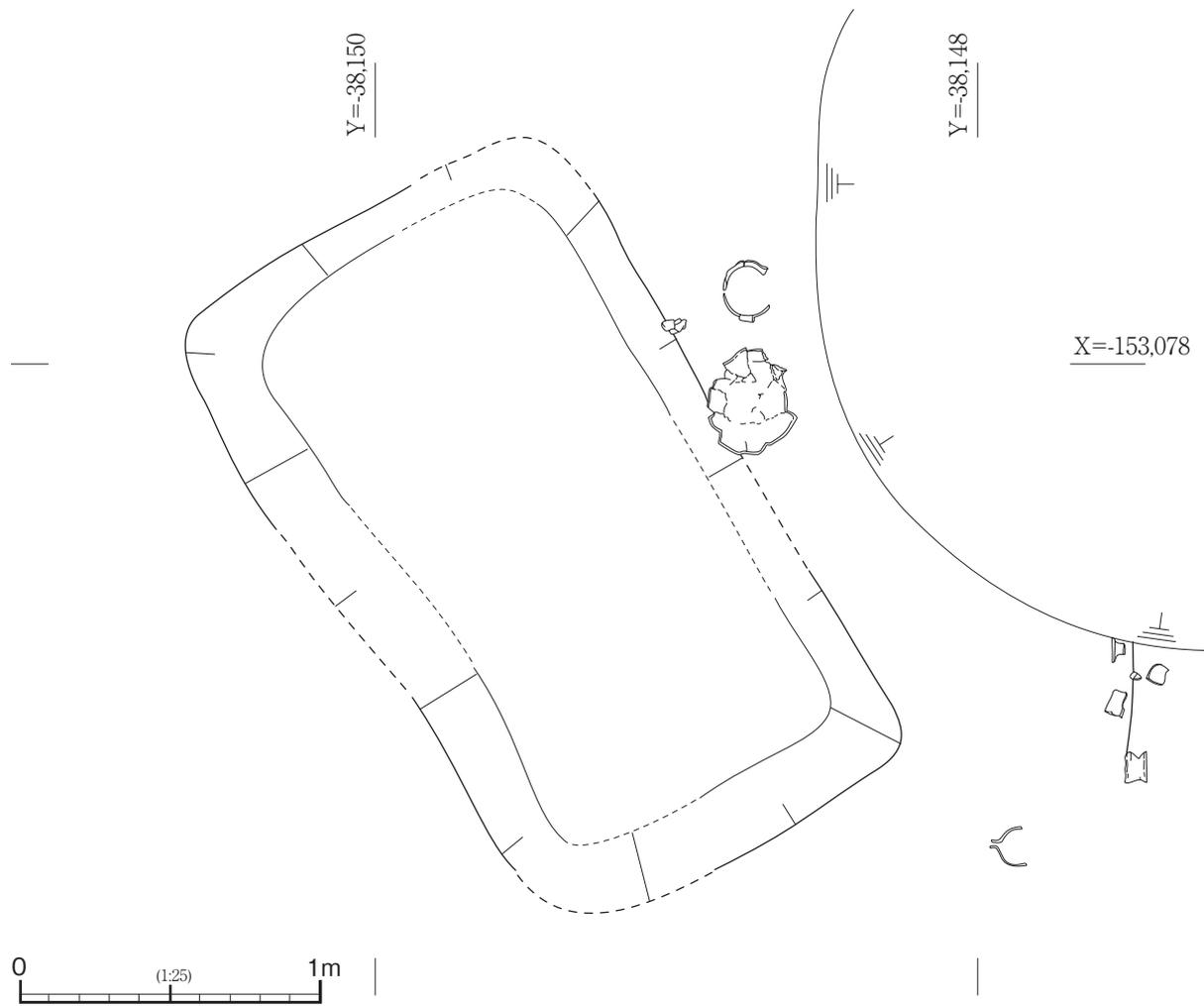


图 270 27号墳主体部① 平面、遺物出土状況

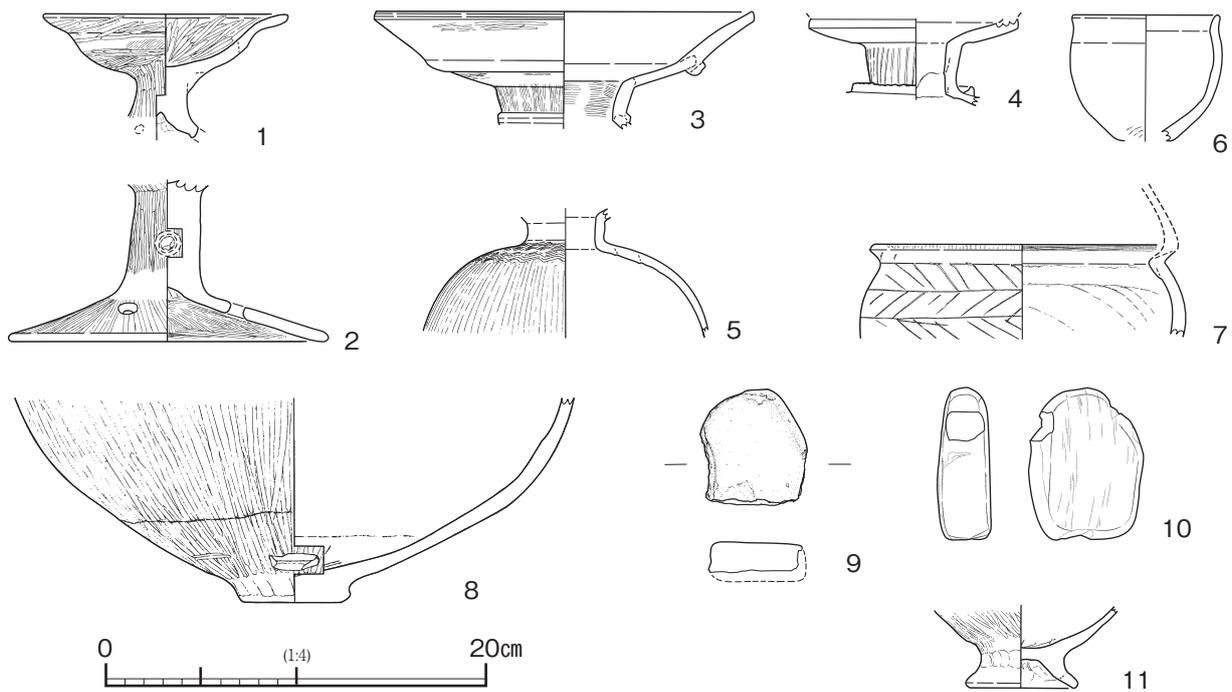


图 271 27号墳 出土遺物

34号墳 35号墳の西側に隣接するやや不定な方形の墳墓である（図272、図版94）。第5 - 1面では平坦化が進んでいたために認識されず、第5 - 1層に土壌化した墳丘や周溝埋土の上部を削平してしまった。他の墳墓に比して墳丘規模が非常に小さく、墳丘下端における一辺長は約3.5 m、基底面からの高さは確認時で約30cmを測る。墳丘盛土の直下では、周溝外側にみられる旧表土の第5 - 2層上部に対応する土壌は認められず、同層の下部に相当するブロック土のみであった（図273）。その直上には炭化物を僅かに含む盛土が厚さ15cmほど検出された。墳丘築造当初の整地土と考えるが、周辺土壌が変化したために差異を感じるだけで、同層が旧表土であった可能性もありうる。

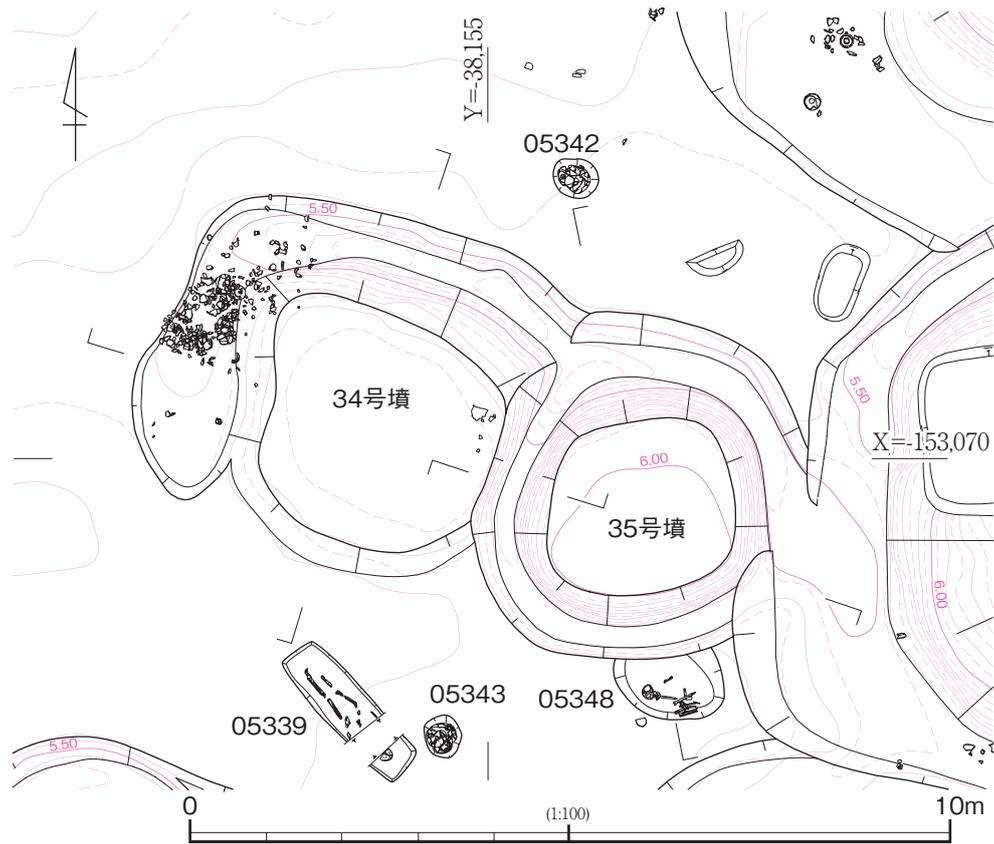
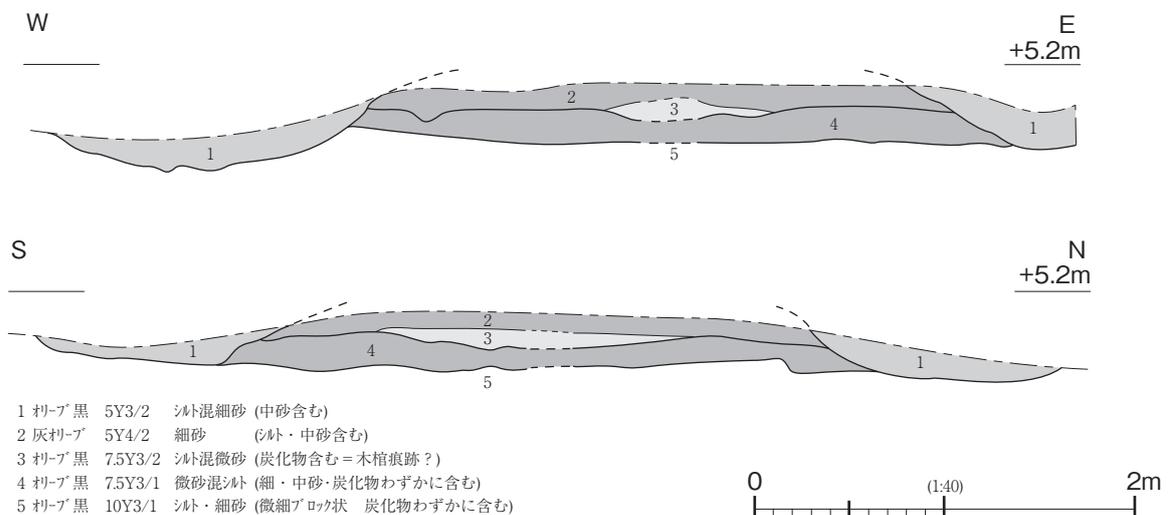


図 272 34号墳・35号墳 平面



- 1 柳-ブ黒 5Y3/2 シルト混細砂 (中砂含む)
- 2 灰柳-ブ 5Y4/2 細砂 (シルト・中砂含む)
- 3 柳-ブ黒 7.5Y3/2 シルト混微砂 (炭化物含む=木棺痕跡?)
- 4 柳-ブ黒 7.5Y3/1 微砂混シルト (細・中砂・炭化物わずかに含む)
- 5 柳-ブ黒 10Y3/1 シルト・細砂 (微細ブロック状 炭化物わずかに含む)

図 273 34号墳 断面

同層上面の墳丘中央付近において、木質遺物を含む層を検出した。人骨等の直接的な証拠は確認できなかったものの、状況的に主体部の痕跡であると判断する。掘形等がみられないため、整地層上面に直接遺骸や木棺を置いたものと推測する。その上部は混じりの多い粗砂で被覆されており、周溝の掘削に伴う排土の第5-2b層を利用したものと考えられる。

墳丘盛土の上面からは生駒西麓産の庄内式甕が出土した(図275-19)。後述する周溝内の土器に比較して新しい型式の遺物であり、出土状況を鑑みると、後世に供献されたものと考えられる。

周溝の埋土は墳丘盛土に酷似することから、崩落土によって埋没したものと考える。周溝の北西隅に集中して大量の土器が出土した(図274)。いずれも破砕した状態であり、周溝内に積み重なって埋もれていた。破片同士の密着性が高いため短期間のうちに集積されたことは明らかであり、葬



図 274 34号墳 遺物出土状況

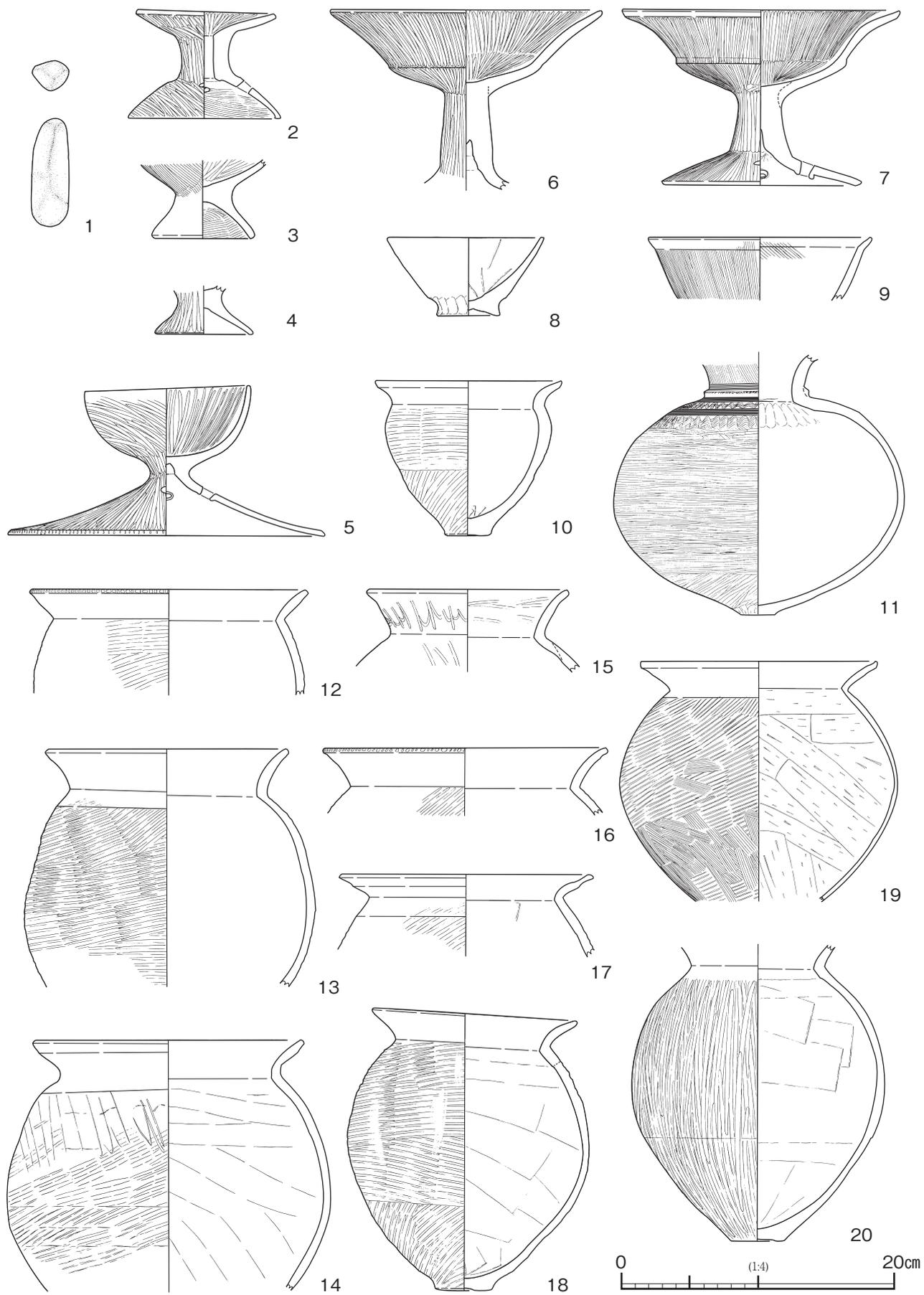


图 275 34号墳 出土遺物

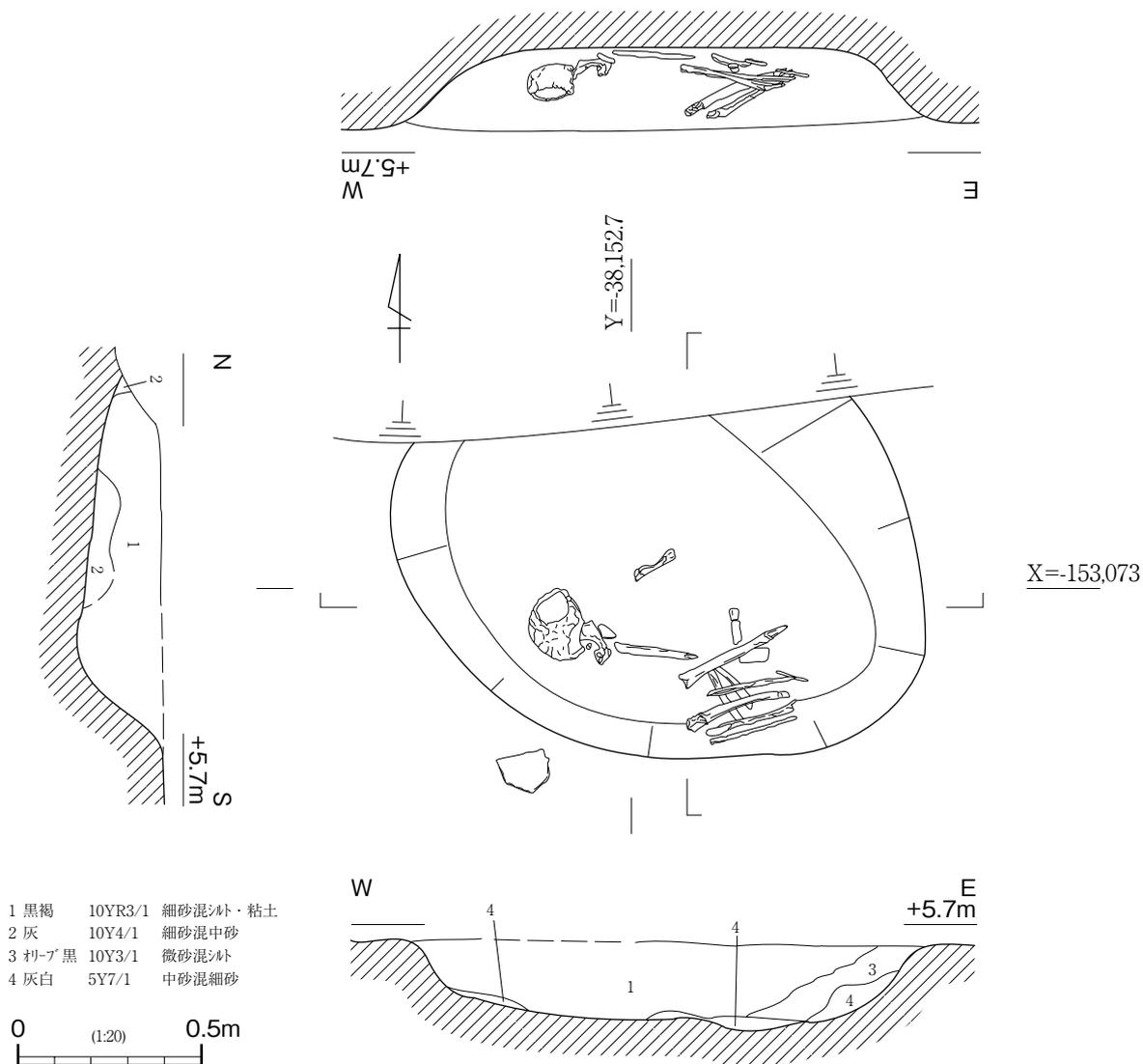
送儀礼に伴う投棄か、周辺整理による廃棄が考えられる。遺物には小形器台・高杯・鉢・加飾壺等がみられるものの、大半は甕であり、その内の90%以上が第V様式系甕である（図275、図版376～378）。

周溝の切り合いから35号墳より先行して築造されたことは明らかであり、また墳丘下の第5～2層の土壌化が進行していない点から、墳墓群の中でも初期の段階に築かれたものであることがわかった。その時期は、出土遺物から庄内式期古段階に比定できる。

05348土坑墓 35号墳周溝の南側に位置する（図272、図版95）。同墓を35号墳より先行するように表記しているが、これは周溝埋土との関係を表したものであり、墳墓の築造以降に掘削された可能性は十分に考えられる。

土坑は直径約1.5 mの円形を呈し、深さ約25cmを測る（図276）。内部から一体分の人骨が出土した。人骨は頭蓋骨と大腿骨を残し、それ以外はほとんど残存しない。頭位はほぼ真西を指向し、顔面の向きや大腿骨の出土状況から、南向きの横臥屈葬による埋葬であることがわかる。人骨の鑑定によると、20才代の成人と推定される（分析編参照）。

土坑内から他に出土遺物はみられなかった。情報が少ないため推測の域を脱しないが、おそらく35号墳に関連した副次的な埋葬施設と考える。



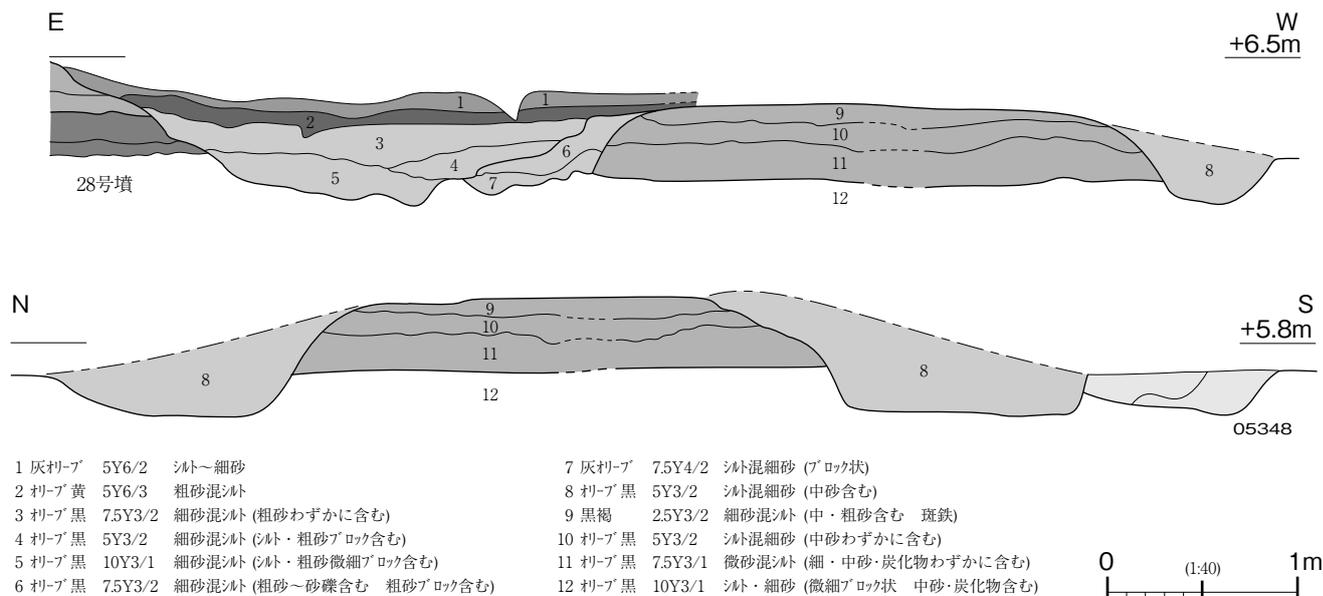


図 277 35号墳 断面

35号墳 34号墳と28号墳の間に位置する隅丸方形の小型墳墓である（図272、図版93）。第5 - 1面では、34号墳と同様に墳丘が完全に埋没して平坦化していたため、隣接する28号墳の周溝検出に伴って見つかったものである。墳丘の基底部を基準とする規模は、一辺の長さが東西約3.0 m、南北約2.8 m、高さ約40cmを測り、旧地表面からの周溝深さは約25cmである（図277）。

墳丘断面の観察により、計3層の盛土を確認した。上層ほど盛土に含まれる粒径が粗くなることから、周溝の掘削深度の低下に伴う第5 - 2 b層下層を含む割合が増加したと考えられ、墳丘構築と周溝掘削が連動していたことを示す好例となる。隣接する34号墳の状況と鑑みると、まず位置確定のための周溝掘削とその排土を利用した整地を行い、遺骸を納めた後、さらに周溝を掘削した排土で墳丘上部に盛土を行ったものと推測する。

残念ながら埋葬施設は確認できず、墳丘中央付近の盛土がわずかに凹む様子を看取したのみである。盛土の除去中には歯片が多数出土し、鑑定によると、成人が埋葬されていたことは明らかである。

周溝の埋土は、墳丘盛土上部に類似するやや粗い土壌化層であり、墳丘からの崩落土が中心となって埋没したものと考えられる。なお、図277上段の28号墳周溝との重複部分をみると、周溝の埋没後にその上面が第5 - 1層として土壌化したことがよくわかる。

同墳からの出土遺物はごく僅かしかみられなかった（図278、図版379）。34号墳に比して極端に点数が少ないことから、28号墳の築造に際して整理された可能性も考えられる。1は甕か鉢の脚台部と思われ、2は周溝内から出土した台付鉢である。

05342土器棺墓 34・35号墳の北側、29号墳との間において、土器棺墓を検出した（図272、図版93）。封土を特定することはできず、第5 - 1層の除去中に土器が露頭した。掘形は歪な円形を呈し、東西約60cm、南北約53cmを測る（図279）。断面は皿形であり、中央の浅い凹みは土器棺を設置するためのものと思われる。土器棺は、短頸壺と壺体部で構成され、口（蓋）を西に傾けて設

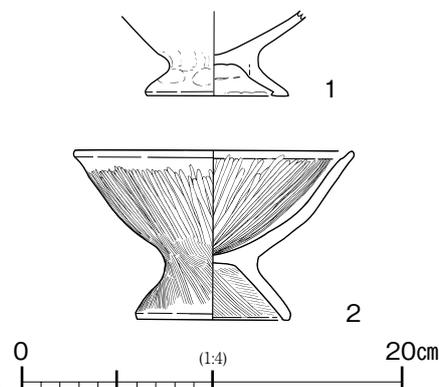
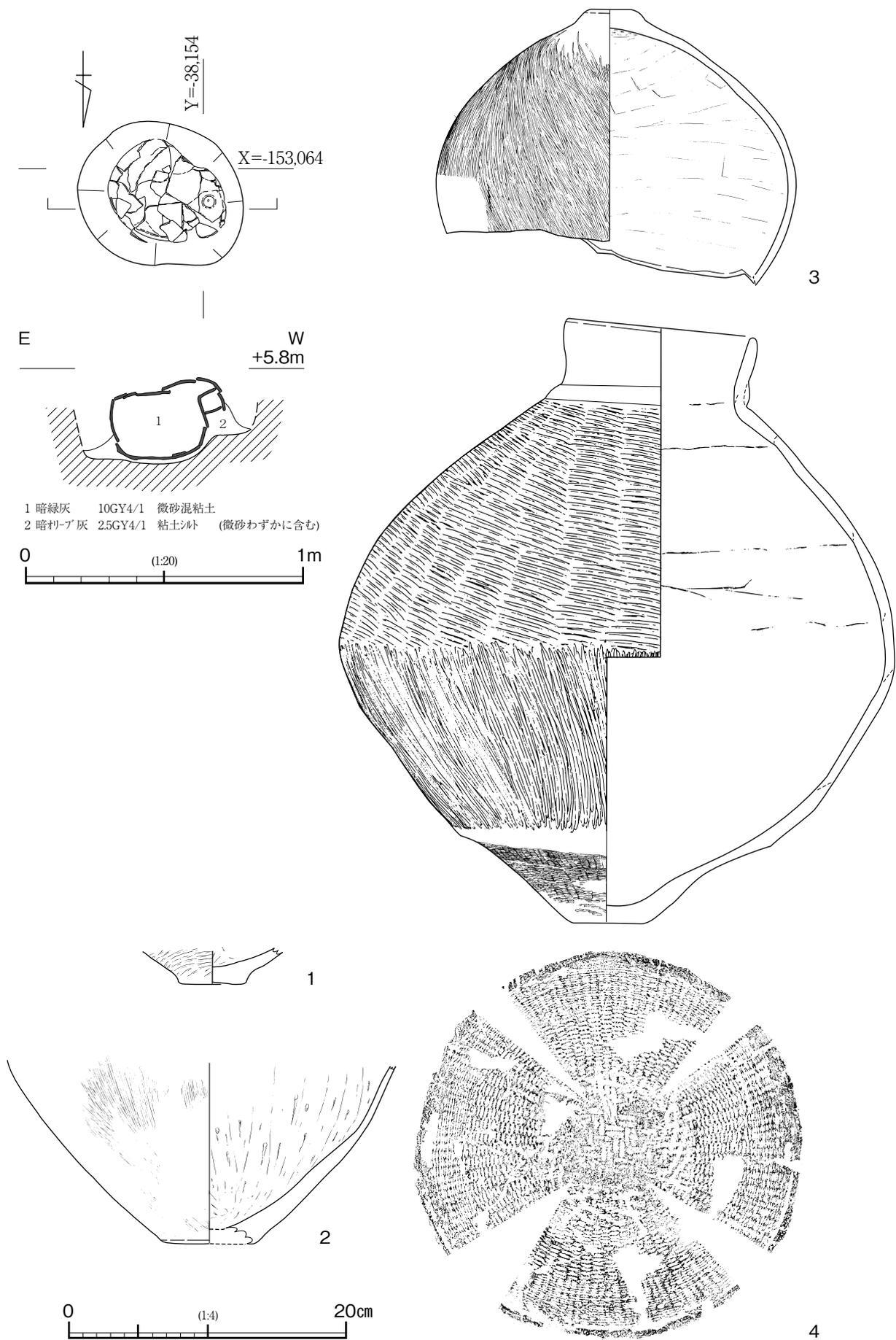


図 278 35号墳 出土遺物



1 暗緑灰 10GY4/1 微砂混粘土
 2 暗利-ブ灰 2.5GY4/1 粘土シルト (微砂わずかに含む)

図 279 05342土器棺墓 平・断面、出土遺物

置する。棺内から遺物は出土しなかった。

遺物は土器棺以外に甕や壺片が出土する（図279、図版379）。1は混入物と考えられ、2は土器棺の一部として使用された可能性が高い。3は壺を体高の約3分の2で打ち欠き、下半を棺蓋としたものである。4は棺身とした異形の籠目短頸壺である。頸部から口縁部の約7割を打ち欠いており、使用の際に口を広げたものと思われる。底部には籠容器による成型時の圧痕が明瞭に残る。

39号墳 調査区のほぼ中央に位置する。40号墳と共に、第5-2面の精査において遺物密度の高さや僅かな高まりに気付いたものの特定できず、下面の調査にて周溝を検出して認知できた墳墓である（図280、図版96）。

第5-2b面では周辺に多数の竪穴建物が存在することから壁溝等を混同した可能性も検討したものの、耕作痕が周溝より下面において検出される点で建物とは異なっており、墳墓とすることが妥当と考えたものである。

39号墳は40号墳に先行すると思われる。南北約3.0m、東西約2.5mの歪な隅丸方形を呈する。

周溝は幅50~85cm、検出時の深さは約20cmを測る（図

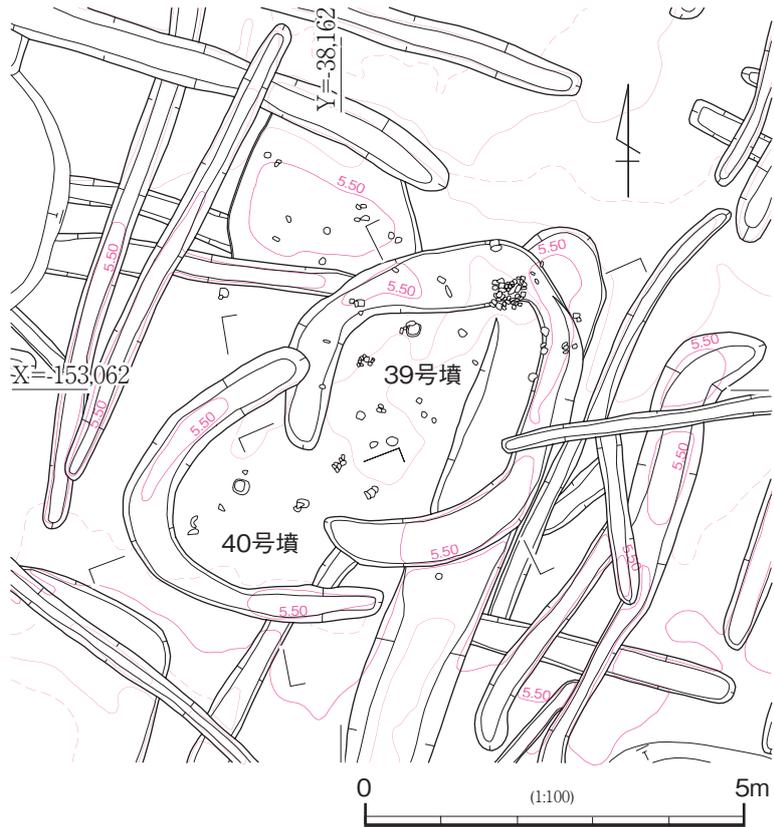


図280 39号墳・40号墳 平面

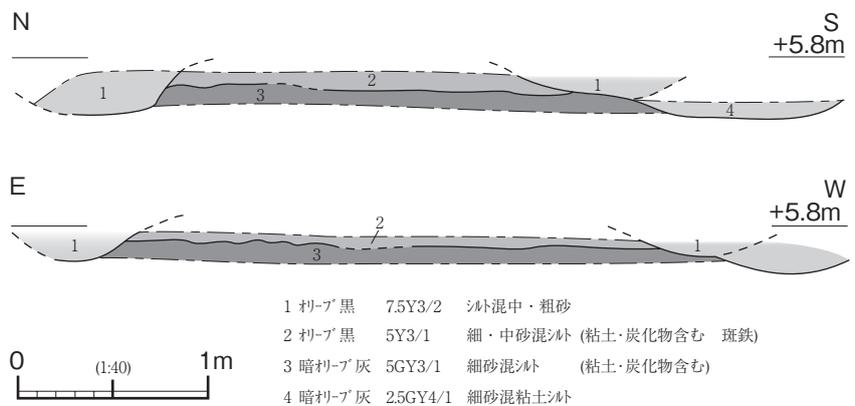


図281 39号墳 断面

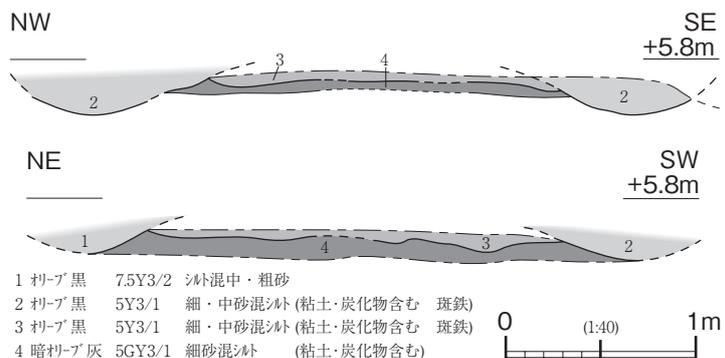


図282 40号墳 断面

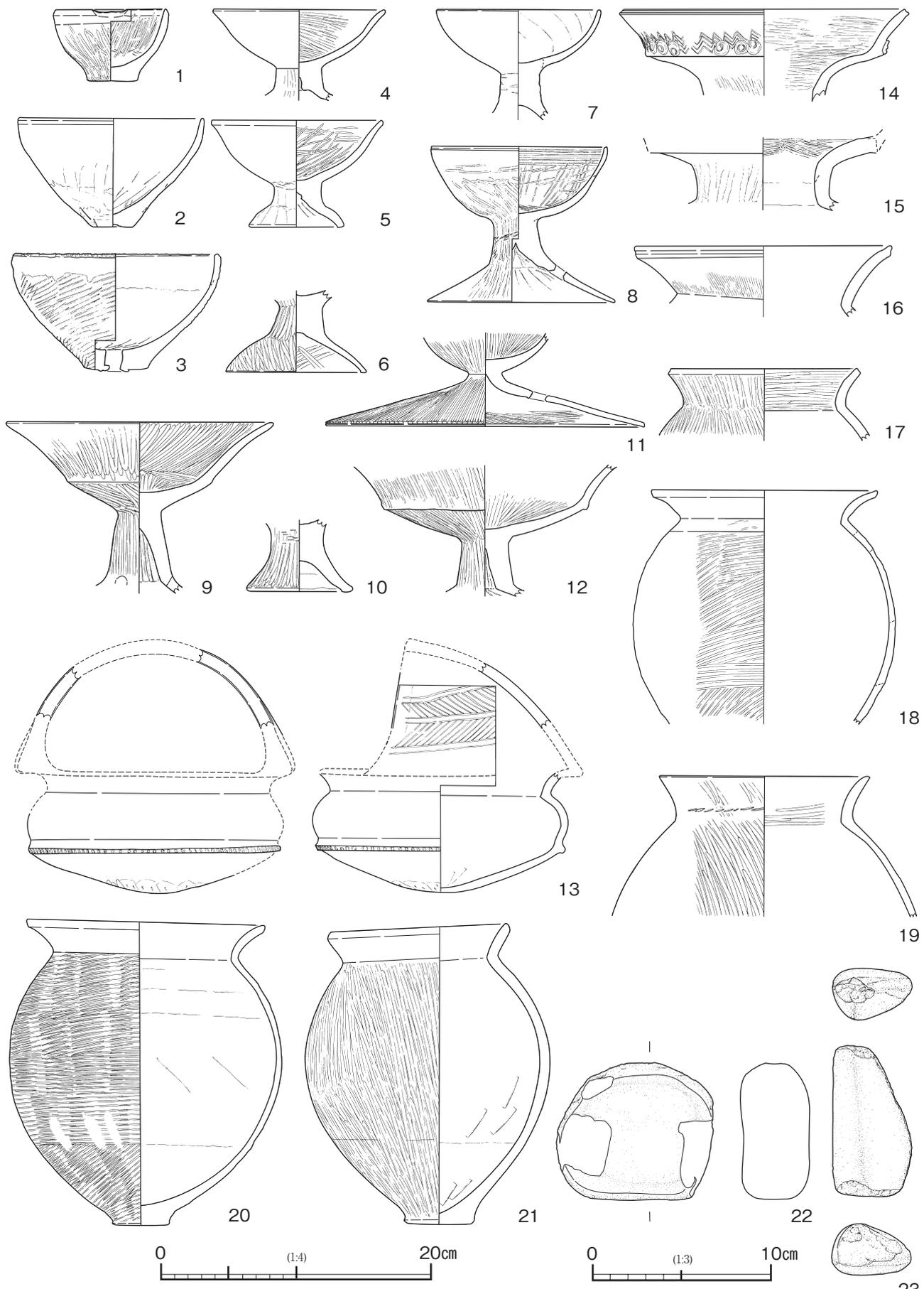


图 283 39号墳・40号墳 出土遺物

281)。墳丘盛土は精査時に大半を削平したため、確認できたのは僅かに10cm足らずである。ただし、墳丘下面には第5-2層が明瞭に残存しており、この点においても第5-2b面の竪穴建物と異なる。周溝は、南西部分が幅約1.0mに亘って途切れており、墳丘の南西隅が陸橋状に周溝外と繋がる平面形となっている。このような陸橋は、通常、墳墓外部との通路として考えられるが、後述する40号墳の築造はその機能を損なうものであり、隣接する墳墓の築造を考える手掛かりとなるかもしれない。

なお、墳丘内部の精査を行ったものの、埋葬施設の存在は確認できなかった。遺物は、墳丘から周溝埋土上面にかけて土器の碎片がまとまって出土した。遺構検出時に包含層として地区で取上げてしまったものが多く、正確な出土地点を把握できないため、後述する40号墳に併記する。

40号墳 39号墳の南西側に隣接する墳墓である(図280、図版96)。39号墳の南西隅の陸橋部を塞ぐように、半円形の周溝が掘削される。墳丘と考えられる半円部分は、南北約2.5m、東西約2.0mを測り、39号墳と同様、墳丘のほとんどが削平されたために高まりの形状は不明であるが、基盤層としての第5-2層の存在を確認した(図282)。

周溝は幅50~70cm、深さは確認時点で約17cmを測る。北側の周溝端は図面上では切り合うものの、実際には接続して一つの溝となっていたようである。一方の南側は、39号墳の南側周溝との間に幅約40cmの間隙が認められ、新たな陸橋として故意に残された可能性が考えられる。

遺物は、墳丘上から甕1点が出土した以外は、周溝の埋土上面に散見される程度である。後の整理作業において、39号墳を含む周辺一帯の遺物は接合関係にあることが判明し、各墳墓に分別することは不可能であることから、両者を一括して報告を行う。

39・40号墳から出土した遺物には、壺・甕・高杯・鉢・手焙形土器・石製品がみられる(図283、図版379~383)。3は有孔鉢であり、口縁端部に刻目を施す。椀形高杯の全体に占める割合が高く、11のような低脚は少なく、4~7のような脚台部の小さな鉢様のものが多くみられる。13は手焙形土器で、覆部にヘラ描きによる矢羽状文様が施される。壺は、14のような複合口縁の加飾壺以外に、香東川流域産とみられる胎土の15が出土している。甕は第V様式系と外面をミガキ調整したものが特徴的にみられる。いずれにしても、図示した遺物にほとんど型式差がみられないことから、両墳墓以外の混入は少なく、またそれらの築造時期が近接していたことは明らかである。高杯や甕の様相から、庄内式古段階を下るものではないと判断する。なお、土器以外には砂岩製の石製品として、22の播石や、23の石杵が出土した。

19号墳 調査区のほぼ中央、X=-153,085、Y=-38,155付近に位置する(図284、図版97)。現地調査では墳丘の北半部のみを検出したことから、調査区の拡張を検討したものの、19号墳の周囲に他の墳墓の密接する状態が予測されたため、範囲の設定が非常に困難であると判断し、南北に分割して調査を行うこととなった。しかし、北側に比して南側の墳丘や周溝の位置を特定することが難しく、墳丘頂部を検出した時点でかなりのズレが生じてしまった。前述の34・35号墳のように小規模な墳墓2基が隣接する可能性を考えたものの、南東側周溝を検出した際に途中で屈曲する様子が看取されなかったことから、北側と南側は連続する周溝と墳丘であると判断した。したがって、平面形は主軸を真北より約40度東に振った隅丸長方形を呈することになった。

墳丘の規模は、短軸で約3.8m、長軸で約6.0mを測る。墳丘高は南北で若干異なっており、北側は25~30cmで確認した盛土の単位が多く、一方の南側は10cm前後で盛土は1層しか検出できなかった(図286)。上段2つは北側の断面図であるが、上層の盛土ほど粒子が粗くなることから、周溝の掘削が下

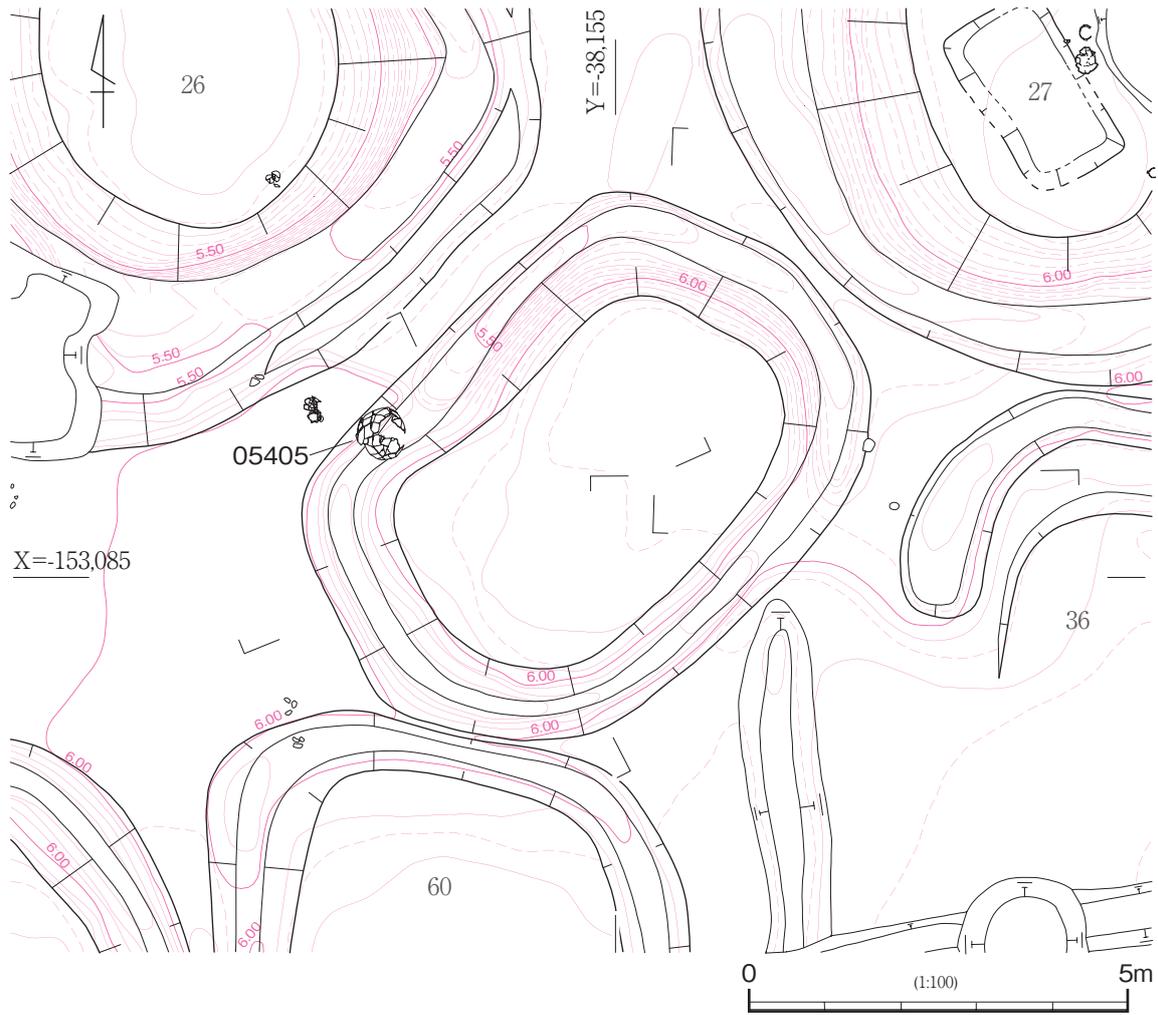


図 284 19号墳 平面

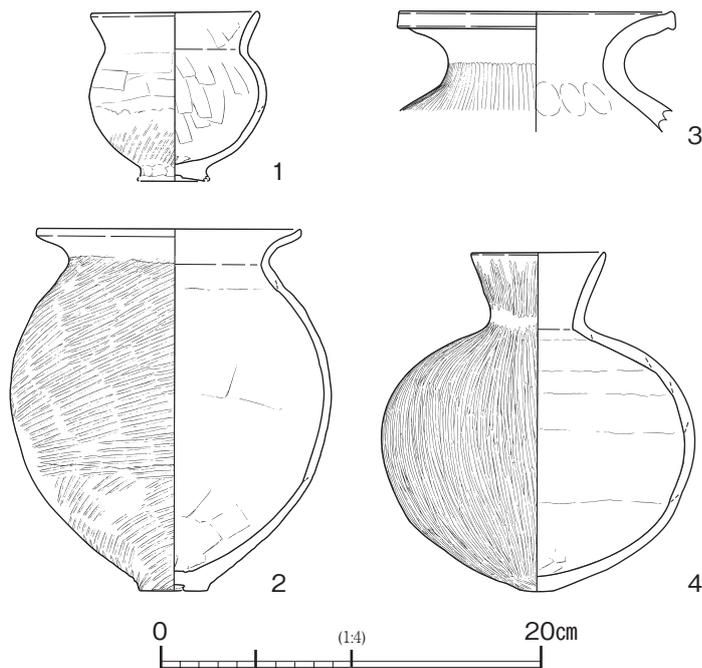


図 285 19号墳 出土遺物

層にして排土が粗くなったものであろう。

周溝の深さは45cm前後とほぼ同値を示しており、それぞれの埋土の細分は異なるものの、いずれも墳丘盛土を成因とする崩落土と考えられる。なお、西側周溝上に土器棺を図示するが、これは周溝が埋没した後に設置された上面の土器棺墓であり、位置関係を表すために示したものである。詳細は第5-1(2)面に後述する。

遺物としては壺・甕の破片が出土した(図285、図版383)。1は小型の平底甕であり、東側の周溝肩より出土した。3は広口壺の口縁片で、周溝の掘削中に出土した。2・4は墳丘直下の第5-2層から出土したものである。いずれも庄

内式最古段階に比定され、築造後の遺物との間にもあまり時期差が認められないことから、その直後に築造されたものと推測する。

60号墳 19号墳南側に位置する（図287、図版98）。平面は円形に近い方形を呈し、墳丘や周溝の南側は第4面の水路による攪乱を受ける。周辺に位置する61・36・19号墳と同様、墳丘上部も著しく削平されたようであり、墳墓の景観として不明な部分が多い。墳丘規模は東西約4.2 m、南北約4.4 mを測る（図288）。

周溝は幅60～80cmを測り、東側がほとんど基盤層を掘削せずに約5 cmと極端に浅い点を除けば、その他は15～30cmの深さを有する。墳丘の盛土として確認できたのは層厚10cmに満たない1層だけであり、直上では第5-1層を検出した。通常、墳丘が築造された後に第5-1層の土壌化が始まるため、周溝から墳丘にかけては連続する黒色土層が形成されるのである。検知された第5-1層が正しければ、本墳墓の場合、周溝の掘削土を利用して整地を行った後、墳丘の盛土を行う前に周溝は埋まってしまい、平坦化した上面が土壌化したというように解釈が可能である。

しかし、60号墳が墳墓として築造されなかったかといえ、必ずしも断定はできない。第5-1層を

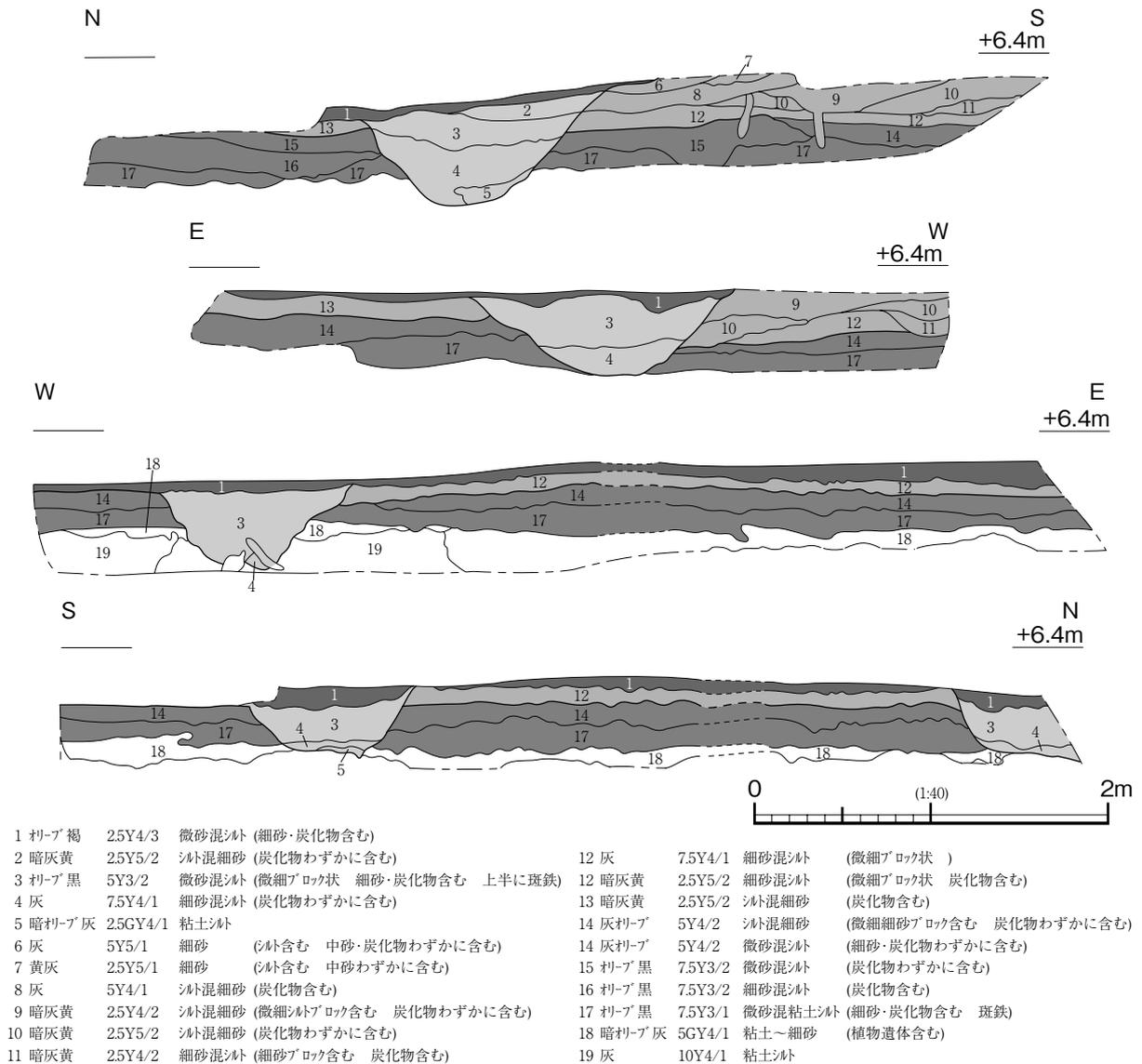


図 286 19号墳 断面

除去した盛土（整地土）上面にて、墳丘中央よりやや北側に東西に長い楕円形を呈する凹みを検出した。上端の幅約85cm、長さ約2.4 mを測り、深さは墳丘断面ではほとんど認知できない程度の浅いものである。内部からは何も出土しなかったものの、状況的に主体部の位置を示すものと考えられる。しかし、その場合、前述の盛土に関する推測とは相反するものとなることから、周囲からの盛土作業を

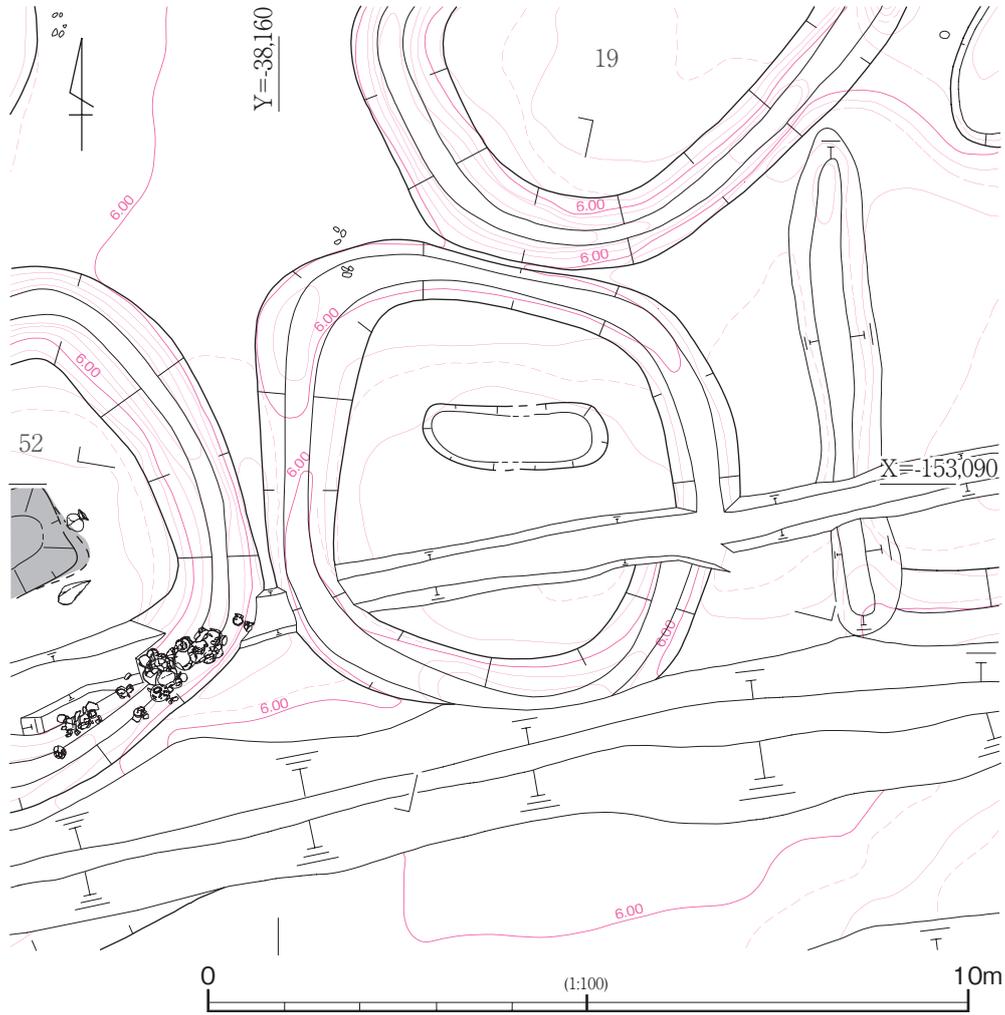


図 287 60号墳 平面

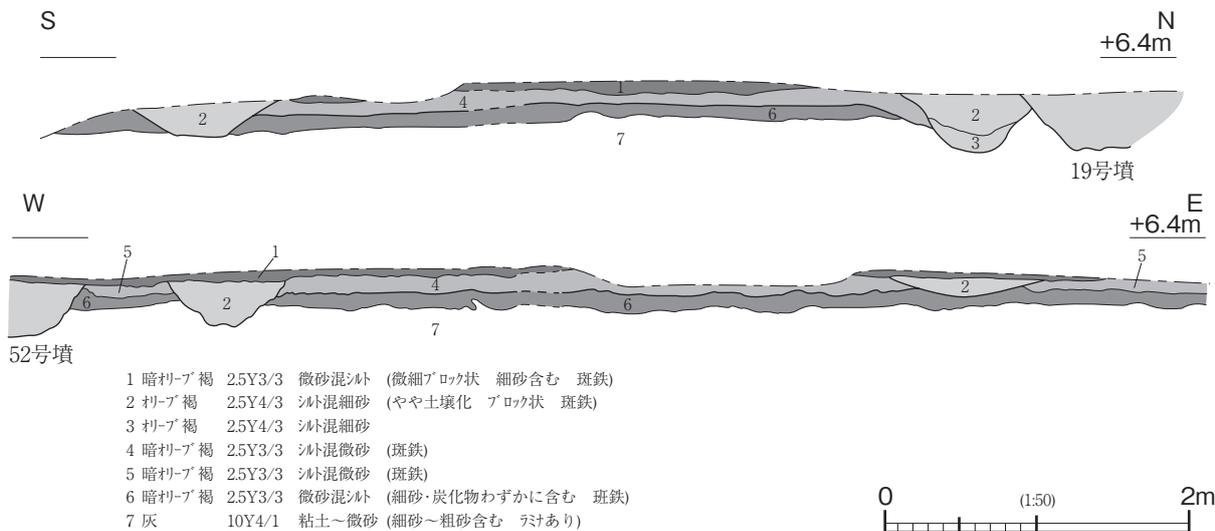


図 288 60号墳 断面

行った結果、僅かな凹みが中央付近に残ったものとも想定できる。いずれにしても、墳墓のあり方を考える上では重要な資料である。

26号墳 調査区のほぼ中央、 $X = -153,078$ 、 $Y = -38,161$ に位置する（図289、図版100）。26号墳の東側には同規模の27・19・60号墳、南西側には倍以上の面積を持つ50号墳が配する。50号墳との境界に攪乱があるためか、墳丘と周溝に若干の変形がみられるものの、残存状態が非常に良好な墳墓の一つである。

平面形は墳丘頂部が円形に見えるものの、周溝底面を確認したところ、やや弧状に膨らむ南西部以外は整った隅丸正方形を呈することがわかった。墳丘上部の形状は盛土の崩落により著しく変形したものと思われる。基盤層を基準とする墳丘規模は、一辺が約5.15m、高さが約50cmを測る（図290）。

墳丘の盛土は計6層に細分が可能であり、主体部の構築を境に下2層、上4層に分けられる。下層はオリブ褐色・黒色のシルトを中心とし、上層は黄色系の砂土を主とすることから、下は第5-2層、上は第5-2b層の掘削土をそれぞれに使用したものと推測する。墳丘盛土の下面においては、墳墓築造の基盤となった第5-2層の存在を確認した。しかし、前述の19号墳等とは大きく異なり、層厚が薄く、土壌化の程度が弱いものである。墳丘外に検出した第5-2層と比較すると、その差は歴然としている。これは地表化していた期間の違いを示すものであり、土壌化が進行する以前に26号墳が築造され

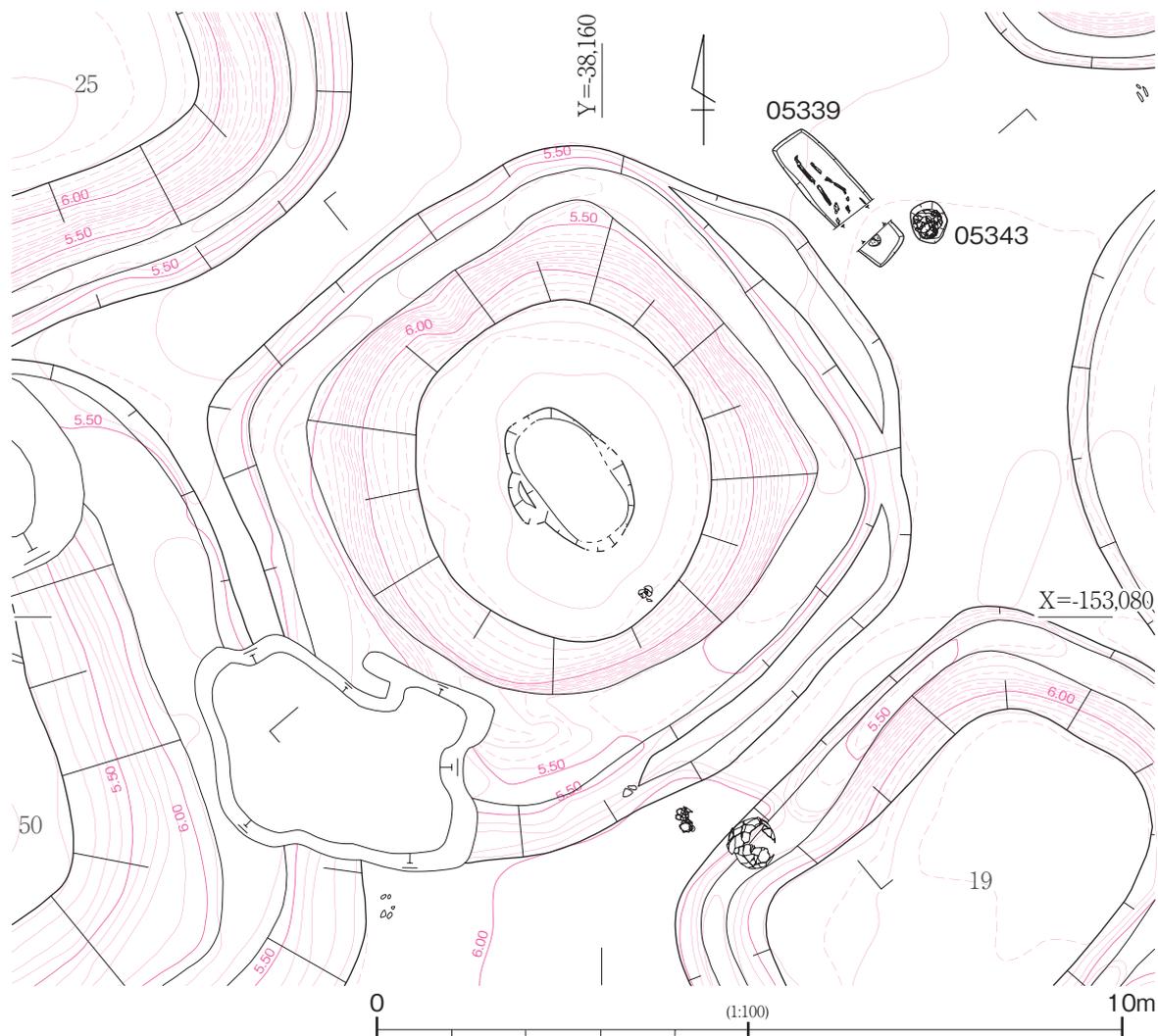


図 289 26号墳 平面

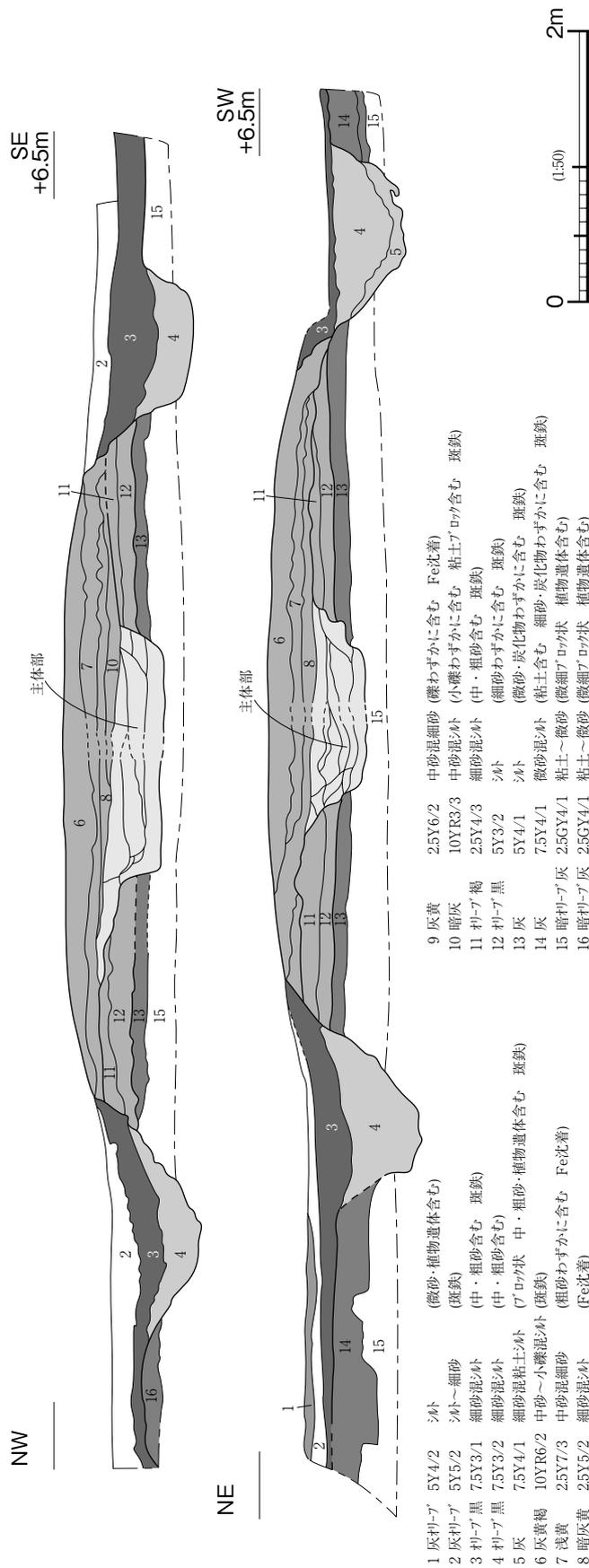


図 290 26号墳 断面

たことを意味する。

周溝は幅1.3~1.6 m、深さ35~55cmを測り、埋土はオリブ黒色のシルトがほとんどであることから、墳丘の崩落土により埋没したものと考えられる。また、東側の周溝の表法面には緩い段を持つ様子が看取されるものの、西側にはそれらは見当たらない。特に周囲から遺構や遺物はみつからなかったことから、形質的な意味を持つものではないと判断する。おそらく、墳丘盛土の土量が不足したために斎掘削を行ったか、墳丘の大きさととの均衡を整えるために掘削部分を拡大したものと推測する。

主体部①は、盛土の上層を除去した墳丘の中央において検出した(図291、図版100)。墓坑の平面は楕円に近い長方形を呈し、断面は逆台形である。上端の幅は0.9~1.3 m、長さ約2.1 m、深さ約35cmを測る。墓坑の主軸は墳丘軸に一致しており、頭位は不明であるが、真北より西に約39°振る。

棺内埋土の掘削中、主軸に平行・直交する木質遺物を検出した(図版100-6)。状況的に木棺の痕跡と考えられるものの、樹種の鑑定等に至るほどの資料は得られなかった。木棺の設置を考慮した場合の墓坑断面は、図示の通り、床土・裏込土と棺内の崩落土に分けられる。この場合の木棺推定寸法は、幅約70cm、長さ約1.2 m、高さ25cm以上となる。

26号墳は墳丘の残存状態が良好であるため、構築面からはほぼ完全な形で主体部の検証が可能である。まず、基盤層上を周溝の排土により20cm前後ほど整地した後、墳丘中央を基盤層の下層まで約40cm掘削する。墓坑底面を整地してから棺を設置し、これを覆土する。時間差が存在したかは不明であるが、次に周溝を掘削しながら墳丘の盛土を行い、墳墓を完成させたものとする。なお、主体部に関しては木棺痕跡以外に遺骸や遺物はまったく出

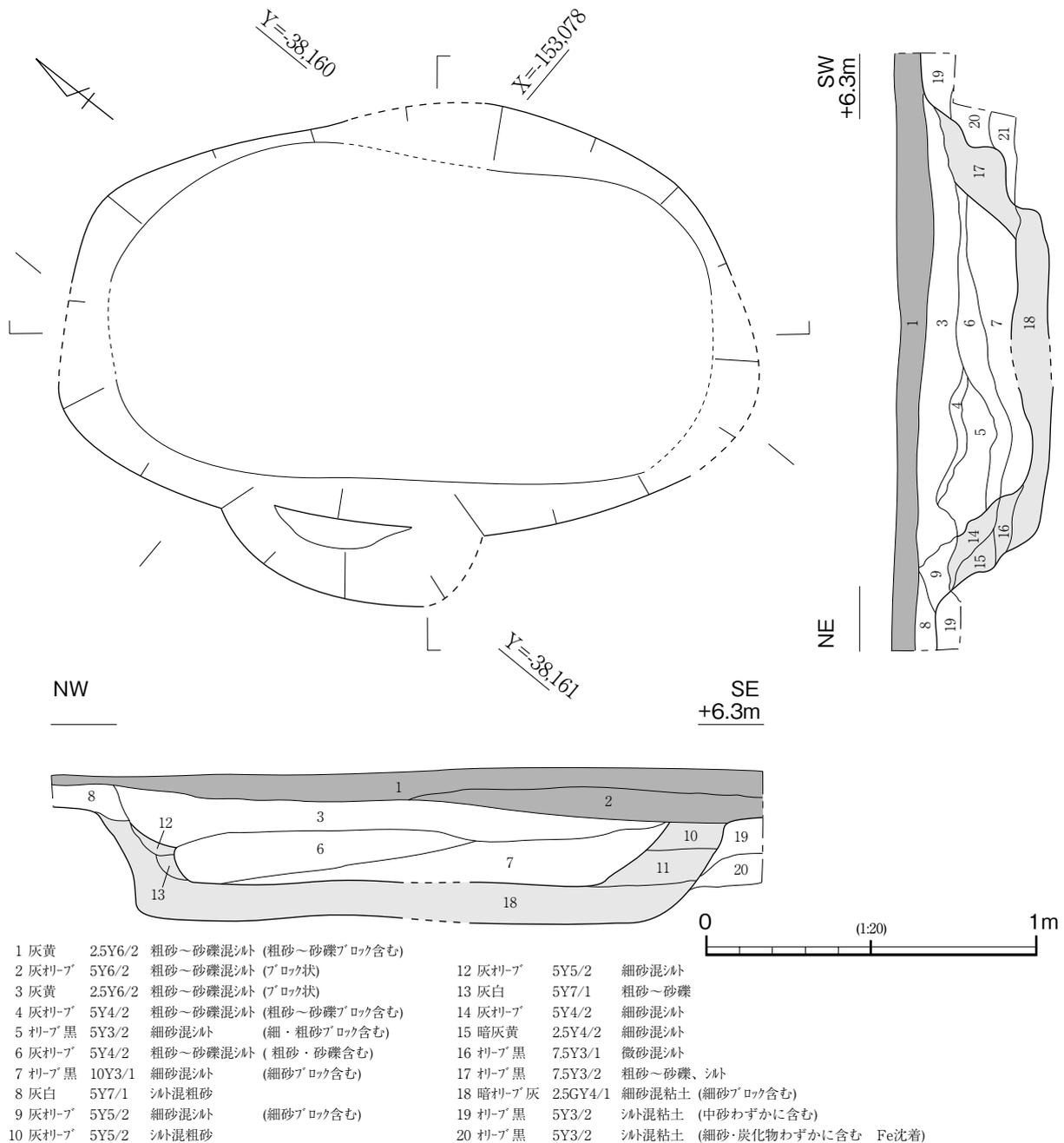


図 291 26号墳 主体部① 平・断面

土しなかった。

遺物は主体部と同様、墳丘・周溝についてもほとんど出土していない。図示したものは、墳丘盛土の掘削中にみつけた複合口縁壺である（図 292、図版383）。垂下した大きく広がる口縁とやや扁平な球形化した体部を特徴とする。肩部と口縁部の内外面に、櫛描文を中心に列点文や竹管円形浮文による加飾を施す。庄内式古段階に比定することができる。これらの遺物が盛土中より出土したことから、墳墓完成以前のものであることは間違いのないものの、墳丘築造過程のものか無関係のものかは判別が不可能であり、墳墓の時期の特定は困難である。

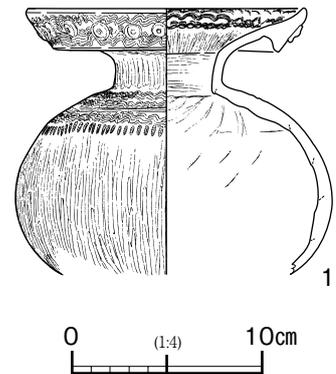


図 292 26号墳 出土遺物

05339土坑墓 26号墳の北東に位置する。同墳墓周溝の断面観察用トレンチの掘削中に検出したため、一部を欠損する。検出時の墓坑は、長方形を呈し、幅0.55~0.65m、長さ約2.15m、深さ約10cmを測る（図293、図版102）。内部には木棺等の痕跡は認められず、人骨のみが遺存する。頭骨・寛骨・大腿骨・脛骨の一部が確認され、身長は約1.55mと推定する。年齢や性別等は不詳である。頭位は南東方向

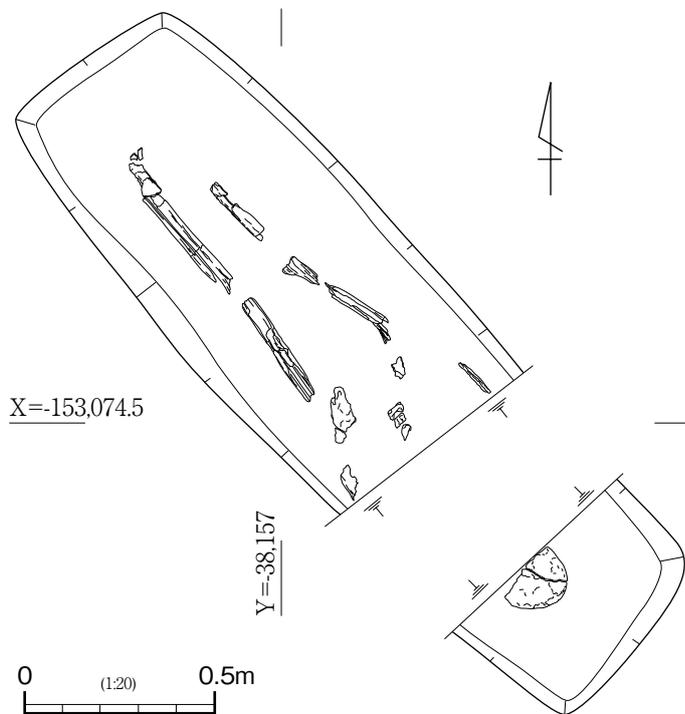


図 293 05339土坑墓 平面

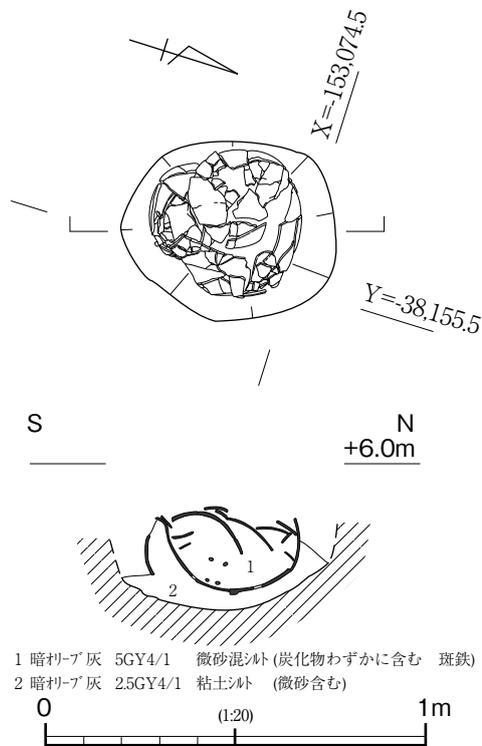


図 294 05343土器棺墓 平・断面

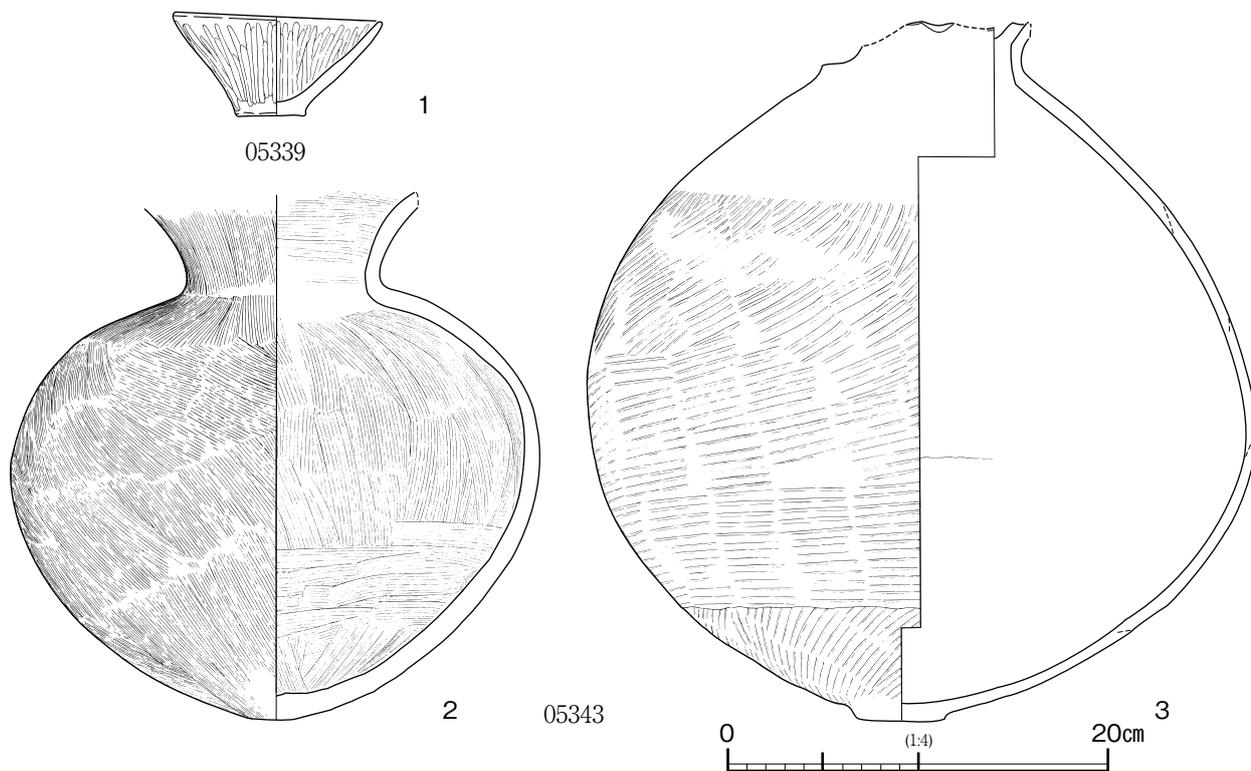


図 295 05339土坑墓・05343土器棺墓 出土遺物

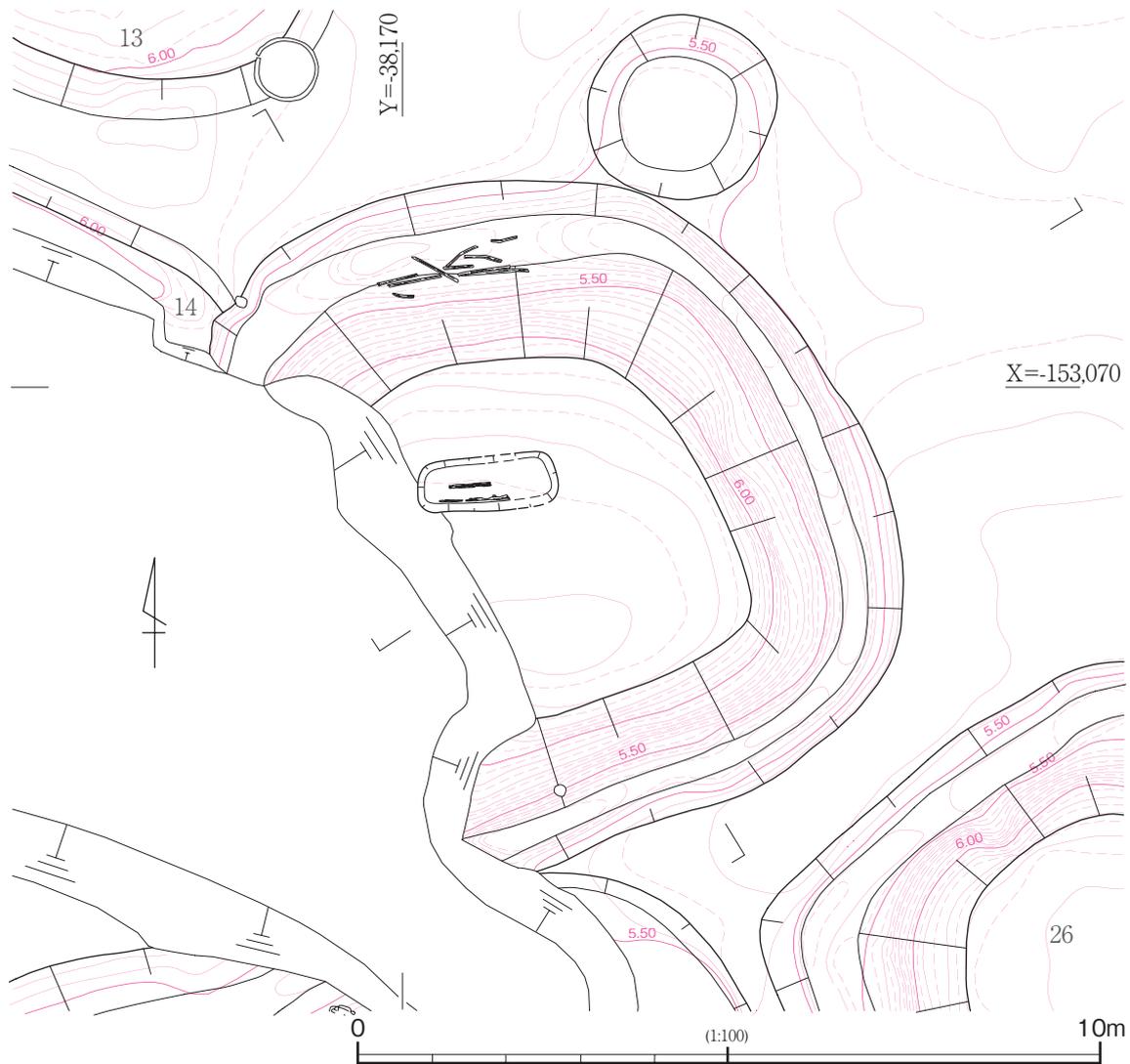


図 296 25号墳 平面

であり、真北から約139° 東に振る。人骨が墓坑の幅一杯に広がることから、棺内に納められた可能性は低く、土坑に直葬されたものと推測する。

遺物は土坑周辺から出土した小型鉢がみられる程度である（図295、図版102）。

05343土器棺墓 26号墳の北東、05339土坑墓の東側に隣接する。同墳墓の断面観察用アゼの中に隠れていたため、平面的な確認は十分に行えなかった。掘形は円形を呈し、検出時点では南北約57cm、東西約48cm、深さ約24cmを測る（図294、図版102）。掘形の断面はU字形を呈し、土坑底部を整地した後にやや傾けて土器棺が設置される。棺身の開口部は南東を向いており、頭位を示すものかは不明であるが、05339土坑墓と同じ方向である。

土器棺は大小2個の壺を使用し、いずれも、口縁部が打ち欠かれている（図295、図版384）。出土状況から2を棺蓋、3を棺身として使用したと考えられるが、圧壊による細片化のため、正確な組み合わせ方は不明であ

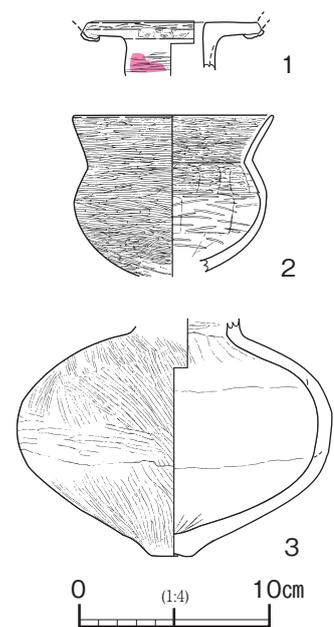


図 297 25号墳 出土遺物

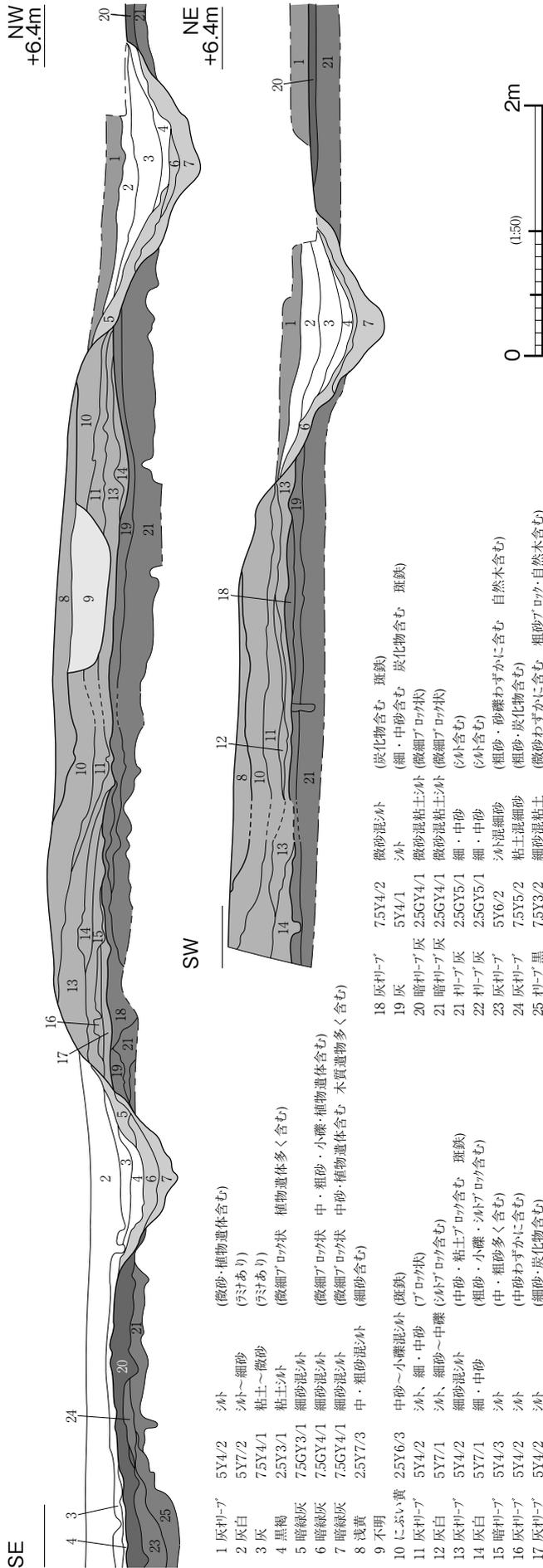


図298 25号墳 断面

る。また、2の壺が丸底化することから庄内式中段階以降と推測するものの、あまり定かではない。

なお、土器棺の内部からは多数の歯片が出土した。大白歯が未萌出であることから、幼児を埋葬したものと鑑定された。

上記の05339土坑墓・05343土器棺墓と、これらを挟む26・27号墳はいずれも埋葬施設の軸位が同じであり、周辺の墳墓とは異なる点から、何らかの関連があったと想像するに難くはない。これらの土坑墓や土器棺墓が、墳墓に関する副次的な埋葬施設であった可能性はあるものの、いずれの墳墓に属するものが不明なため、ここでは通常の遺構として取り扱った。

25号墳 調査区のほぼ中央、X = -153,072、Y = -38,168に位置する。墳墓の西側約3分の1を現代の攪乱により消失するものの、墳丘形状等の残存状態は良好である(図296、図版101)。

平面は隅丸方形を呈し、残存部分の規模は、墳丘基底部の一辺約6.1m、同高さ約50cmを測る。

周溝は、断面が大きく開いたV字形を成し、幅1.5～2.2m、同深さ約55cmを測る。墳丘の断面観察により、計9層の盛土と、墳丘下面に3層の旧地表土を確認した(図298)。明瞭でなおかつ複数の旧表土を検出できる点から、前述の26号墳とは対照的に、同墳墓の築造は第5～2層の土壌化がかなり進行した後に行われたことに間違いはない。

墳丘盛土は、主体部の構築面を境に上部1層、下部8層に分けられる。やはり他の墳墓と同様、墳丘の上層ほど盛土の粒径が大きくなっており、周溝の掘削が深度を増す毎に下部の粗砂を墳丘上に盛り上げた結果と考えられる。特に主体部を覆う最上層はほとんど砂と言ってもよいほどの土質であり、このよう

な場合、他の墳墓に比較して崩落の進行が著しいように思われる。しかし、崩落土は周溝の下部に堆積する程度であり、大半は後から流入した第4-2b層によって埋没する。特別に崩落防止の対策を施した様子は認められないことから、単純に崩落までの時間が短かったものと考えられる。また、崩落土が第5-1層上に検出されたことから、同層の形成後から第4-2b層の堆積以前という極めて限られた期間、つまり第5-1面において崩落が発生したことがわかる。これらのことから、25号墳は第5-2面の中でも最終段階に築造されたと考えられる。

埋葬施設としては、墳丘の中央よりやや北東にずれた位置において主体部を検出した（図296、図版101-7）。その他の副次的な埋葬の有無は確認できなかった。

主体部①は、平面が隅丸の長方形を呈し、幅70~75cm、長さ約1.9m、深さ約27cmを測る。墓坑の主軸は真北から約85°東に振るほぼ東西方向であり、墓坑幅がやや広いことから、頭位は東側であったと推測する。調査中の手違いのために断面観察が行われておらず、詳細は不明であるが、前述の26号墳と異なり、墓坑構築面からの掘削深度が浅いために盛土内で終息して基盤層に達していない。墓坑内からは僅かな木棺の痕跡を検出したのみであり、遺骸や遺物は出土しなかった。

遺物は墳丘斜面や周溝内から散漫に出土した。土器のほとんどは碎片であり、多くは第V様式系甕の摩滅したものであることから、下層の遺物が混入したものと考えられる。25号墳に関連があると思われる壺・小形丸底土器を抽出して図示した（図297、図版384）。1は二重口縁壺の頸部片である。追加した口縁部は欠落しており、その接合部分の4箇所にも3個1組の竹管円形浮文を貼り付ける。また頸部外面には赤彩の痕跡が残る。2は墳丘の南側斜面から出土した小形丸底土器である。3は北側周溝の表法面から出土した壺の体部である。2の資料をもって、本墳墓の築造時期は庄内式新段階以降で、墳墓群の中でも最後発に近いものとする。

なお、その他に北側周溝において多数の棒状木質遺物が出土した（図版101-4）。いずれも直径が3cm前後の芯持材であり、表面には樹皮が残存する。長さは1m以上であり、中には2m近くに達するものも含まれる。観察した結果、加工されたような形跡が認められなかったため、図示しなかった。しかし、これらはすべて崩落土の中位から一括して出土したものであり、同じような規格に揃っていることから、何らかの目的のために集積されたものと考えられる。崩落土と共に墳丘から転落したとすれば、これらを用いて墳丘上での祭祀が行われていたとも推測できるものの、詳細は不明であり、元の形状を復元するまでも至っていない。同様の遺物は、既往の1号墳や後出する24・43号墳等でみつかっている。それらは樹皮が取り払われた芯去り材であり、若干性格は異なるかもしれないが、木材を使用した祭祀的な行為が行われた可能性がある点では注目される。

52号墳 調査区中央のやや南寄り、X=-153,091、Y=-38,163.5付近に位置する（図299、図版98・99）。50号墳の南東に位置し、周囲にはほぼ同規模の19・59・60号墳等が密集する。南東側を中心とする墳丘上面が、後世の耕作や水路により削られるものの、全体的には残存状態が良好である。

平面は隅丸の正方形を呈し、基底面における墳丘規模は一辺約4.0m、残存する高さは約22cmを測る（図300）。周溝の断面は逆台形を成し、幅1.0~1.5m、深さ30~60cmで墳丘の周囲を巡る。

墳丘の盛土は上部が著しく削平されているためにほぼ1層しか確認できなかった。墳丘の検出面において埋葬施設が露頭することから、覆土は完全に除去されており、残存した盛土は墓坑構築面を形成するための整地層と考える。墳丘の下面では明確な第5-2層を確認できる。上下2層に細分が可能であるが、下層は遺構や耕作痕の埋土であり、旧表土としては1層しか認められないことになる。

周溝は複数の埋土に分かれるものの、いずれも墳丘の崩落土であり、上面が第5 - 1層として土壌化する。

埋葬施設としては、墳丘中央部に主体部1基を確認した(図301)。第4層を除去すると、墳丘頂部の輪郭を検出すると共に、中央部付近に板状石と横倒し状態の壺が出土した。これらの遺物に囲まれるような形で主体部①を検出した。当初は、点線に示すような形状で西に細く続く溝状の痕跡を検出したものの、1cmの深度も無く、遺構として掘削する前に消失した。墓坑の上部が削平されているため、遺構の大半を失っている可能性があり、土坑や暗渠状施設が存在したものかもしれない。墓坑の平面は隅丸長方形を呈し、全長約1.83m、幅は西側で約1.25m、東側で約1.3mを測る。断面は皿状を呈し、深さ20cm前後である。墓坑の主軸は墳丘軸に一致しており、幅がわずかに広いことから頭位は真北から約64° 東に振っていたと考えられる。

墓坑内からは遺骸や木棺の痕跡はまったく検出されなかった。墓坑の頭位側肩口のほぼ中央から壺、東側隅を挟んだ南東側から板状石が出土した。壺は、主体部の頭位と同じ方向に口縁を向けた横倒しの状態で、墳丘盛土内に半分ほど埋まっていた。壺は口縁を欠くもののほぼ完形の複合口縁壺である(図304-1、図版385)。胎土が乳白色を呈し、後述する周溝内の土器に比較して風化が著しいのが特徴である。掘形や埋土の確認を行わずに遺物を取り上げてしまったため、主体部構築に伴うものか、あるいは後世に設置されたものかは判然としない。この壺の南側にみつかったものが板状石である。第4面

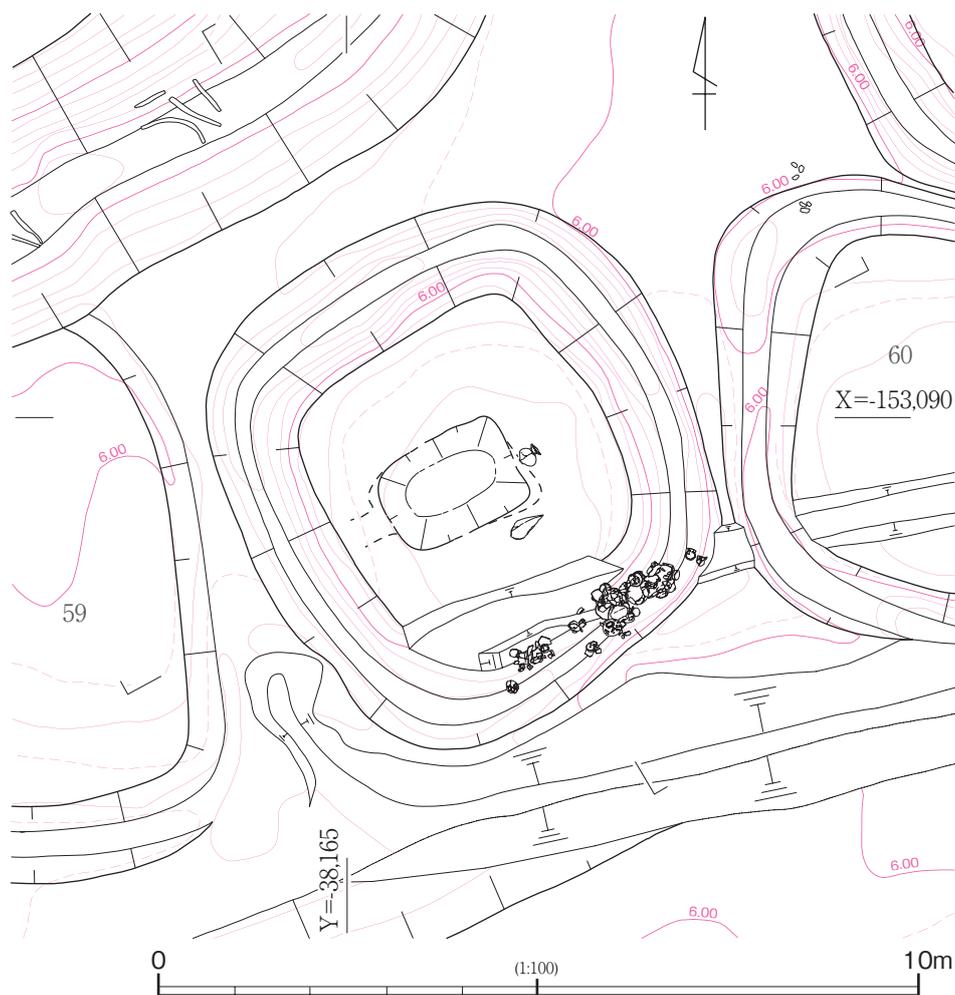


図 299 52号墳 平面

検出時にほぼ全形が現れていたものの、遺構等の掘形は認められず、墳墓上に位置することから本遺構面において報告するため、厳密には帰属遺構面が定かではない。厚さは5cm未満であるが、全長が50cm近くあるために重量は11kgに達する（図304-12、図版386）。石材は安山岩で、表面が白色になる等、風化が顕著である。

墓坑周辺で出土した両遺物は、ほぼ同時期である周溝内の土器に比較すると、風化が著しく進行している点で共通する。第4面において露頭するという事は、周辺を水田化した際も此処に並行して存在したことを示しており、第4層の下に埋没する周溝内の遺物に対し、これらの遺物は移動されずに地表面に残されていたと考えられる。これらの遺物が墳墓の築造当初から存在したのかどうかであるが、今回の調査における墳墓群の中では、破片以外に墳丘盛土内から土器が出土した例は認められず、祭祀行為として埋納したものと考えるににくい。掘形が確認されていないものの、墳丘盛土に土器棺を設置した痕跡と考えられなくもないが、口縁端部を僅かに欠いただけの完形品はあまり例がなく、蓋部分がまったく残らない点にも疑問を感じる。後から持ってきたものとする、第4面の時期差が生じてしまい、意図的に古い土器を持ってきたことになる。

そこで気になるのは、第4面の水路によって攪乱される南東側の周溝である。同溝の埋土を除去中に、底部から52号墳周溝の土器が出土したのは自明の理である（図版99-1）。その当時も同溝の掘削に際して遺物が出土したことは間違いないであろう。墳丘の断面から推測すると、第4面の当時に主体部も露頭していたことは明らかであり、墓として認識されていたからこそ、第

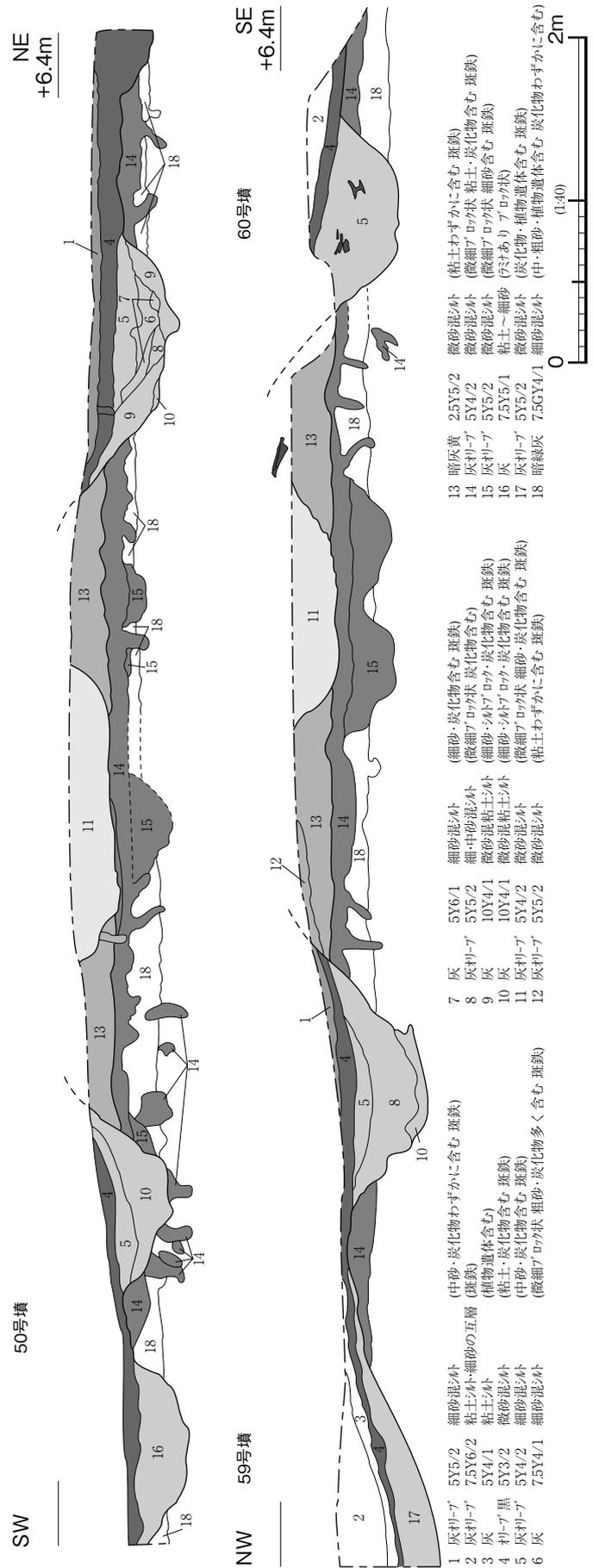


図 300 52号墳 断面

4-2面では水田化されなかったと考える。

これらのことを鑑み、推測を行ってみる。その当時、墓として認識していたことから52号墳の周辺は水田化を避け、支障無いと判断する南側に水路を掘削したところ、完形の土器が出土した。それが墓に関わるものであることはすぐに理解され、埋葬施設の前に供献し直した。また、死者に対する畏怖の念から、鎮魂の意味を込めて主体部に置石を行ったのであろう。他の墳墓も同様、第4面の水田化に際しては注意が払われた様子が窺える。類似する事例としては、弥生時代後期の方形周溝墓上に、庄内式土器と置石の出土した巨摩廃寺遺跡3号墓が挙げられる。

その他の遺物としては、南東側の周溝からまとまって出土した(図302、図版99)。前述のとおり、墳丘の肩部を中心に上面の水路が攪乱するため、詳細は不明である。しかし、遺物の大半が周溝埋土の上半から出土し、北東側の土器群は墳丘斜面に沿って積み重なった状態に見えることから、34・55号墳のように当初から周溝内への廃棄を目的としたものではなく、周溝の埋積がある程度進んだ段階に墳丘側から転落したものと考えられる。出土した土器の多くは周溝の南東隅、約1㎡の範囲に集中し、数点がその周囲に散在する状態である。この集中地点では、検出した土器を除去すると更に直下から数個体分の土器がみつかり、ここだけで図示した土器の19点が出土した。下層から出土した土器(図303-

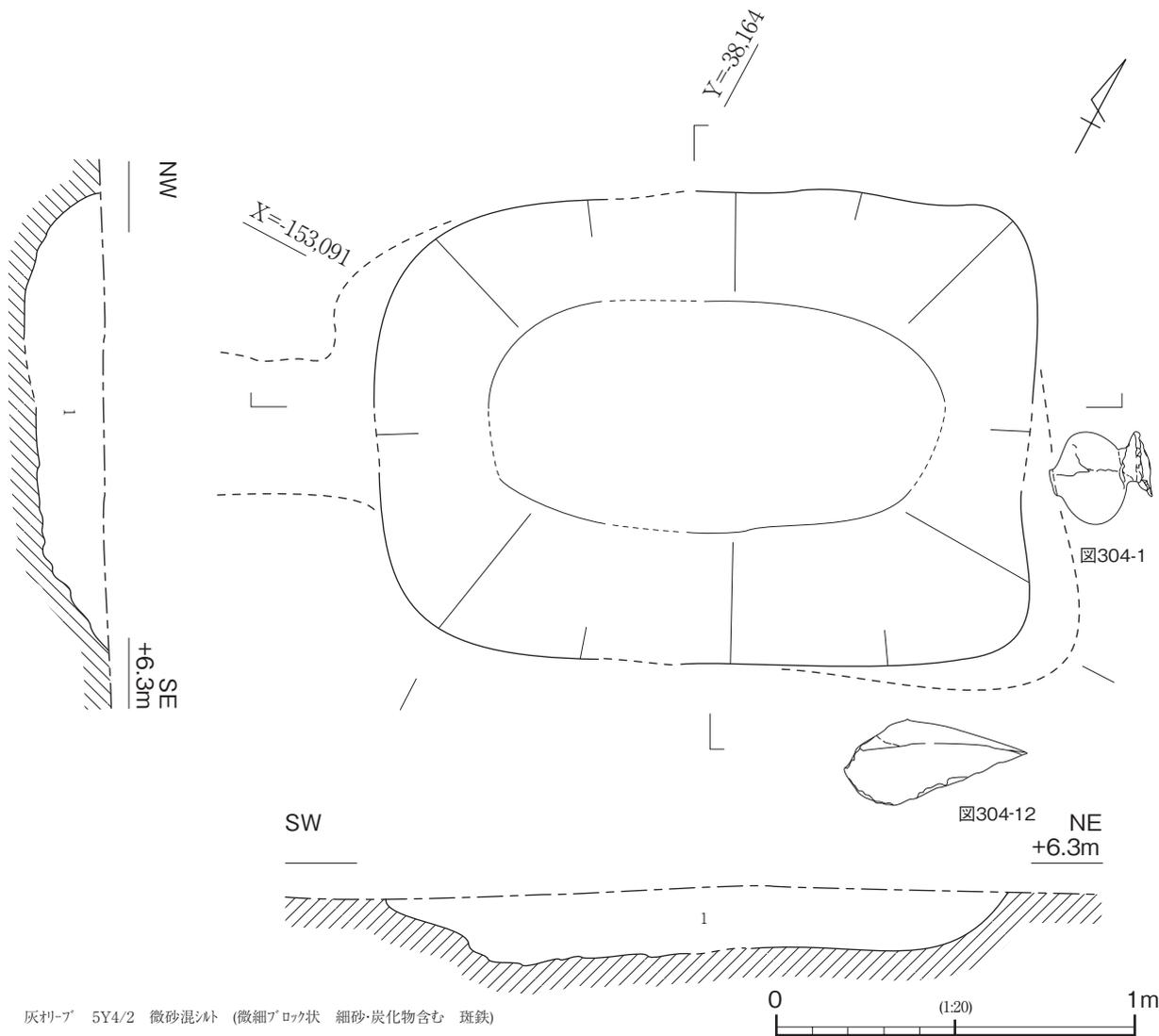


図 301 52号墳 主体部① 平・断面

1・8・10・11、304-7)と上部のものとは、特に時期差は認められない。土器のおよそ半数は部分的に破損する程度で原形を保っており、残りの破砕した土器もその場で崩壊したように見受けられる。周溝の断面観察によると、これらの土器は埋積途中に転落したと考えられることから、軟らかい埋土が緩衝材の役割を果たしたことで破砕せず、周溝が完全に埋没した後に上からの圧力を受けて土中で押し潰されたものと推測する。

周溝から出土した遺物は、高杯・鉢・器台・壺・甕が挙げられる(図303・304、図版384~388)。周溝内から出土した土器のうち、半数近い9点が生駒西麓産の胎土である。特徴的なもののみを抜粋する。図303-1は椀形高杯の杯部と考えられ、内外面共に放射状のミガキ調整がみられる。5は明確な脚部を持つ小型の器台である。9は口縁が立ち気味の直口壺であり、口縁端部に打ち欠きと肩部に直径約8mmの穿孔が、いずれも焼成後に施される。12は口縁端部を上下につまみ出す広口壺であり、肩部に直径約2cmの穿孔が焼成後に施される。図304-3は調整痕がナデのみの甕である。5は小型の二重口縁壺であり、口縁段部外面には刻目を施す。7・8は小型の第V様式系甕であるが、4は弥生色が濃く残る、9・10は典型的な河内型庄内式甕である。11はやや長胴の体部を持つ甕であり、摂津地域等からの搬入品と考えられる。全体的には古い要素を強く残しながらも、小型器種が出揃っており、典型的な庄内式甕が含まれることから、庄内式期中段階に近い時期ではないかと考える。



図 302 52号墳 遺物出土状況

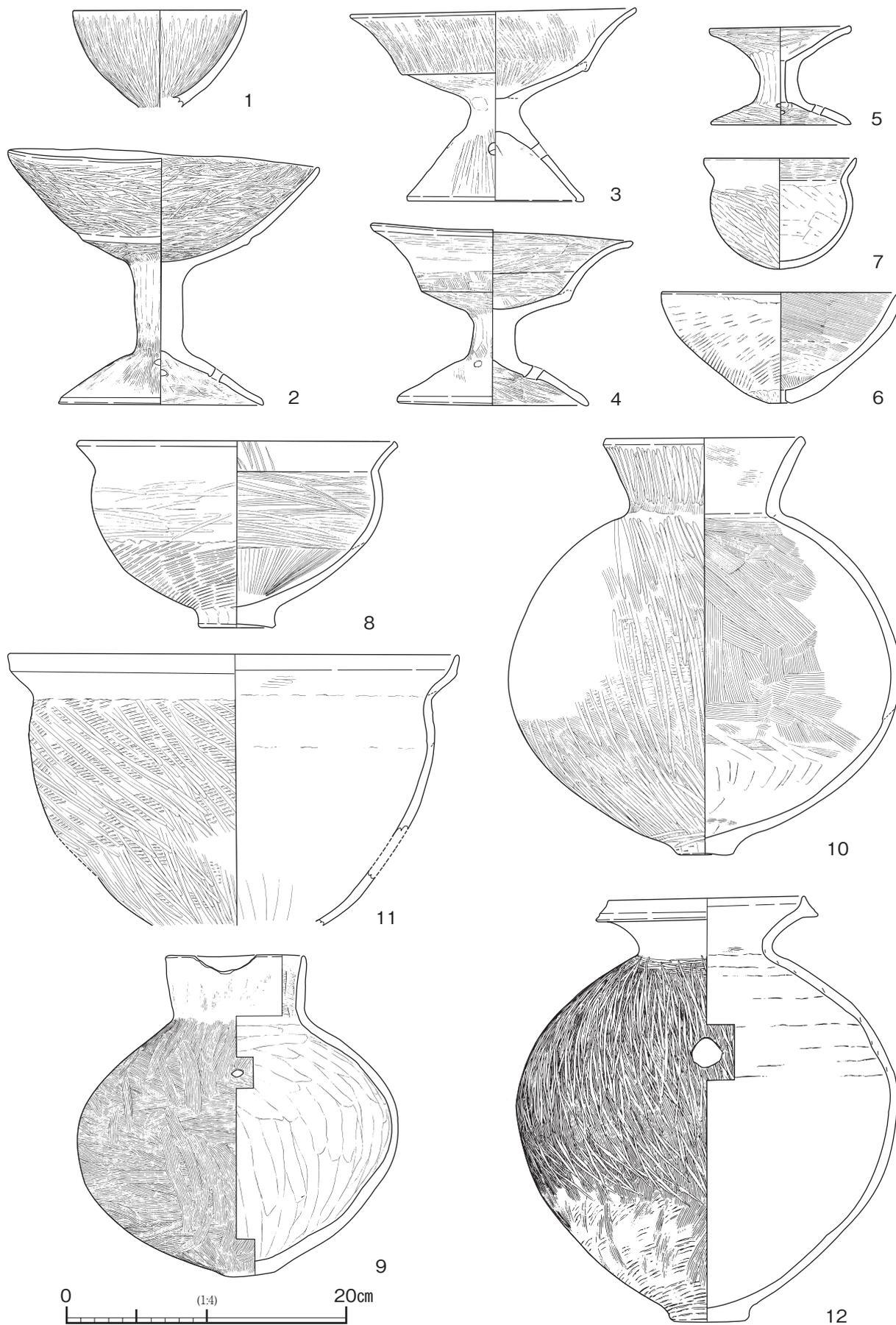


图 303 52号墳 出土遺物 (1)

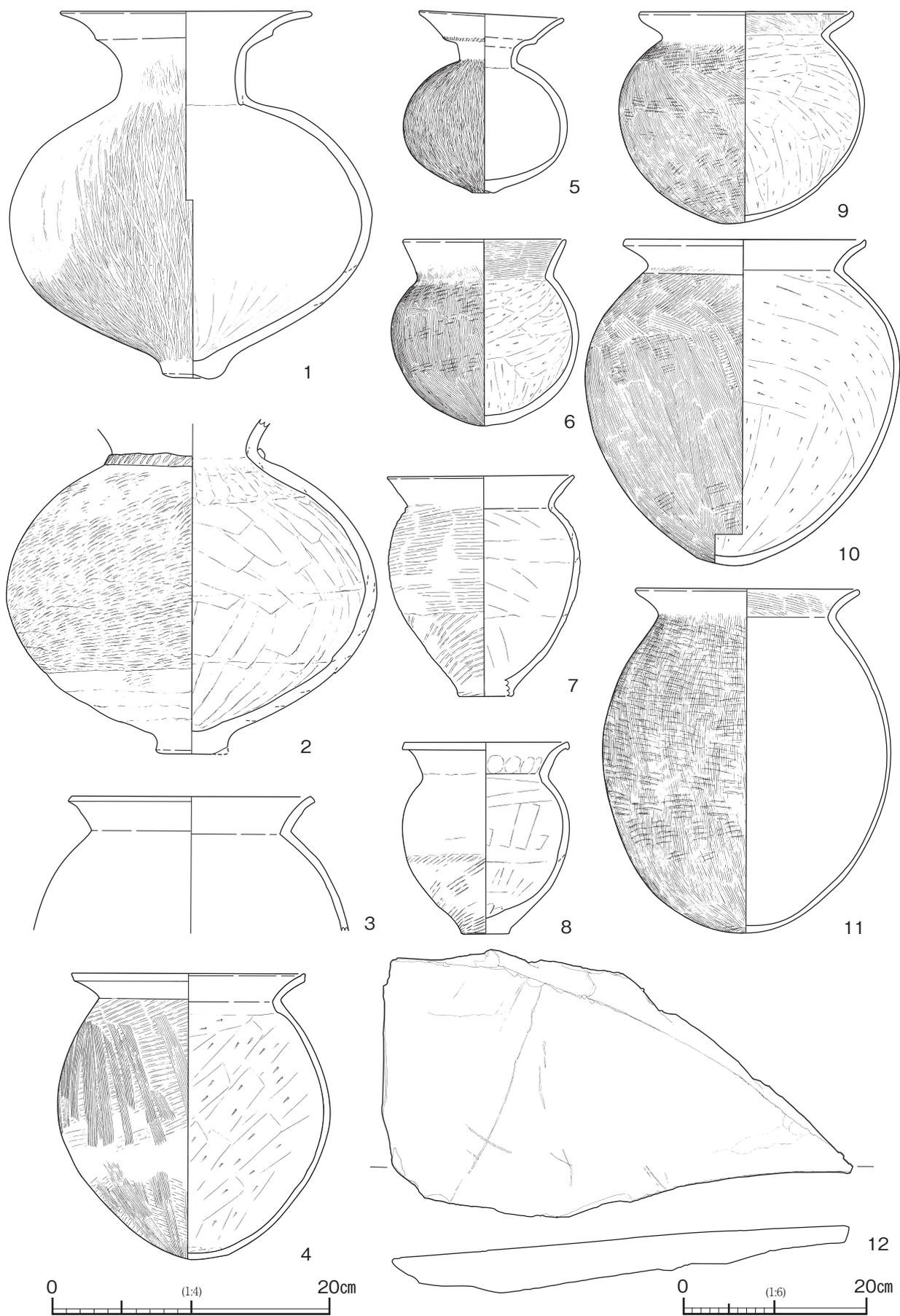


图 304 52号墳 出土遺物 (2)

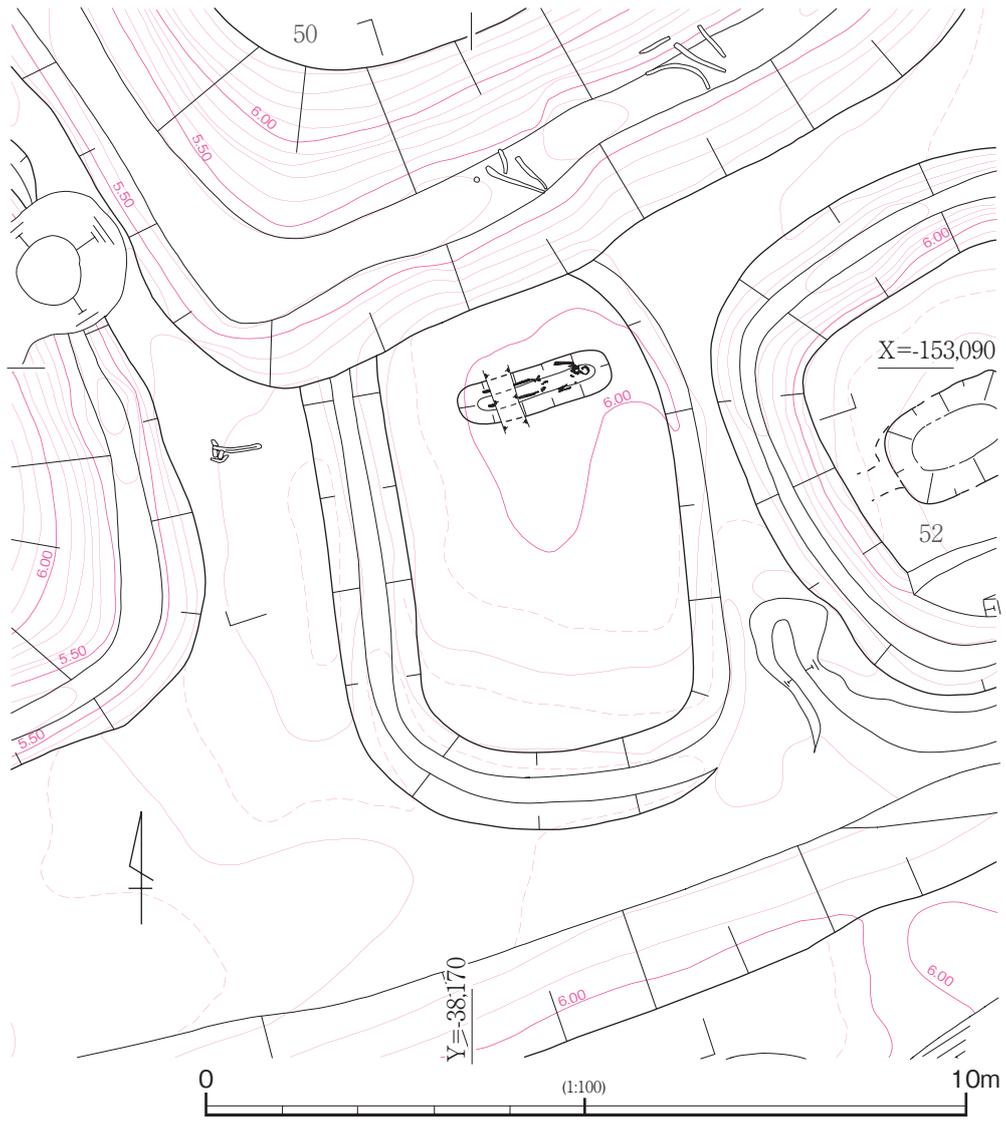


图 305 59号墳 平面

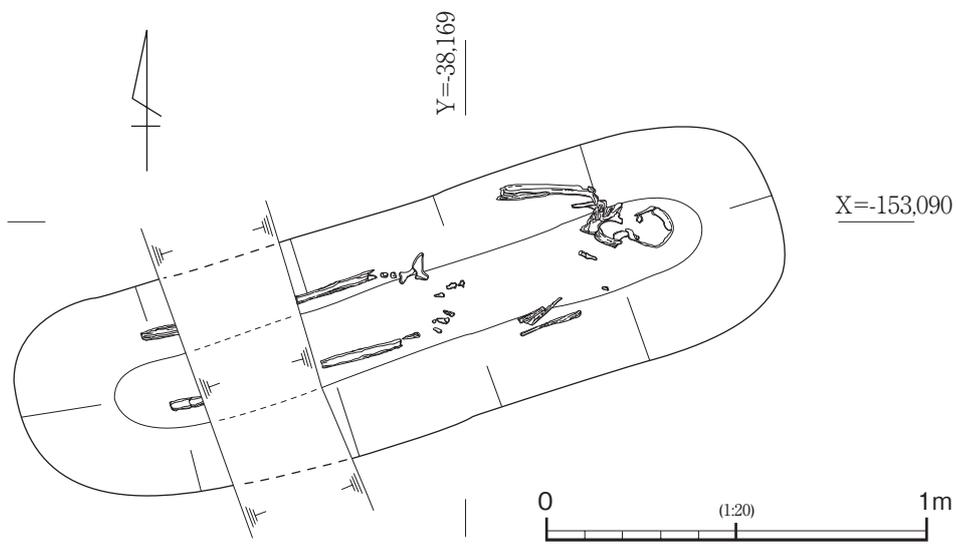


图 306 59号墳 主体部① 平面

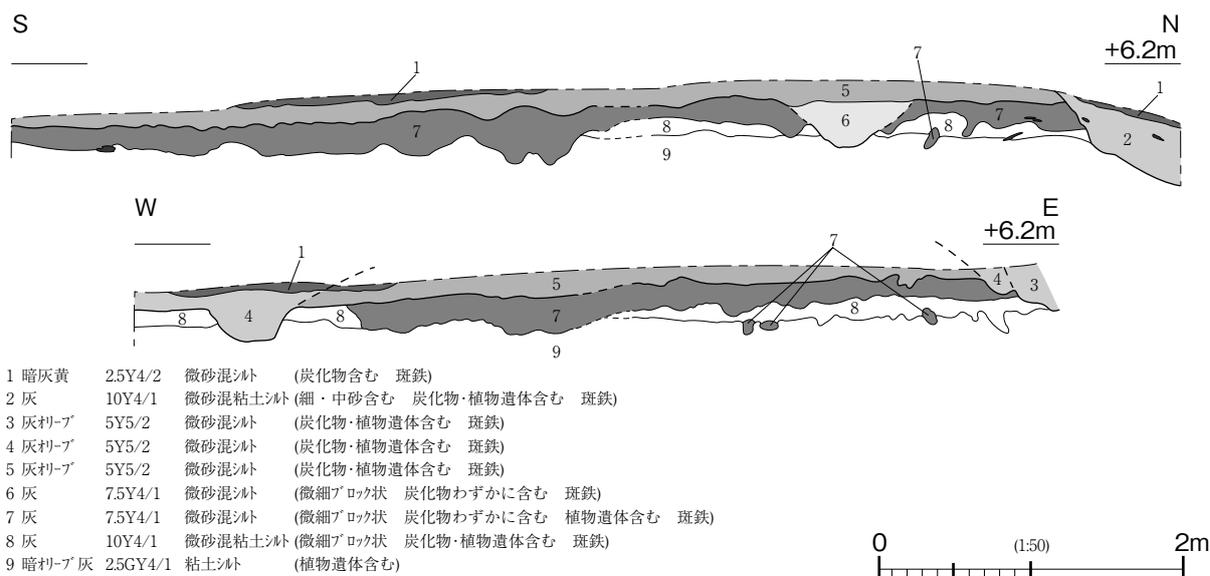


図 307 59号墳 断面

59号墳 52号墳の西側、X = -153,092、Y = -38,170に位置する（図305・307、図版104）。第4層除去時の早い段階から墳丘状の痕跡を検出したものの、周溝の特定が非常に困難な墳墓であった。

墳墓の北側が50号墳の周溝掘削に際して削除されており、残存する平面は隅丸長方形を呈し、長軸約6.3m、短軸約3.7mを測る。墳丘の盛土は1層のみを確認し、墳丘高は約15cmである（図307）。

周溝は明瞭に検出が可能であったのは西側のみであり、南・東側では痕跡程度であった。幅は約60cm、深さ約22cmであり、埋土は墳丘盛土と同一の土質であった。

埋葬施設としては、墳丘北寄りの地点において1基のみを確認した（図306、図版104）。検出位置が墳丘中央から大きく外れるものの、この他に埋葬施設を確認できなかったことから、本遺構を主体部①とした。主体部は墳丘盛土を除去した基盤層上面に検出したことから、遺体埋納後にはじめて墳丘が構築されたものと考えられる。

主体部①の墓坑平面は隅丸長方形を呈し、全長約2.06m、幅約60cm、深さ約30cmを測る。掘削した墓坑の底面は基盤層を貫通し、

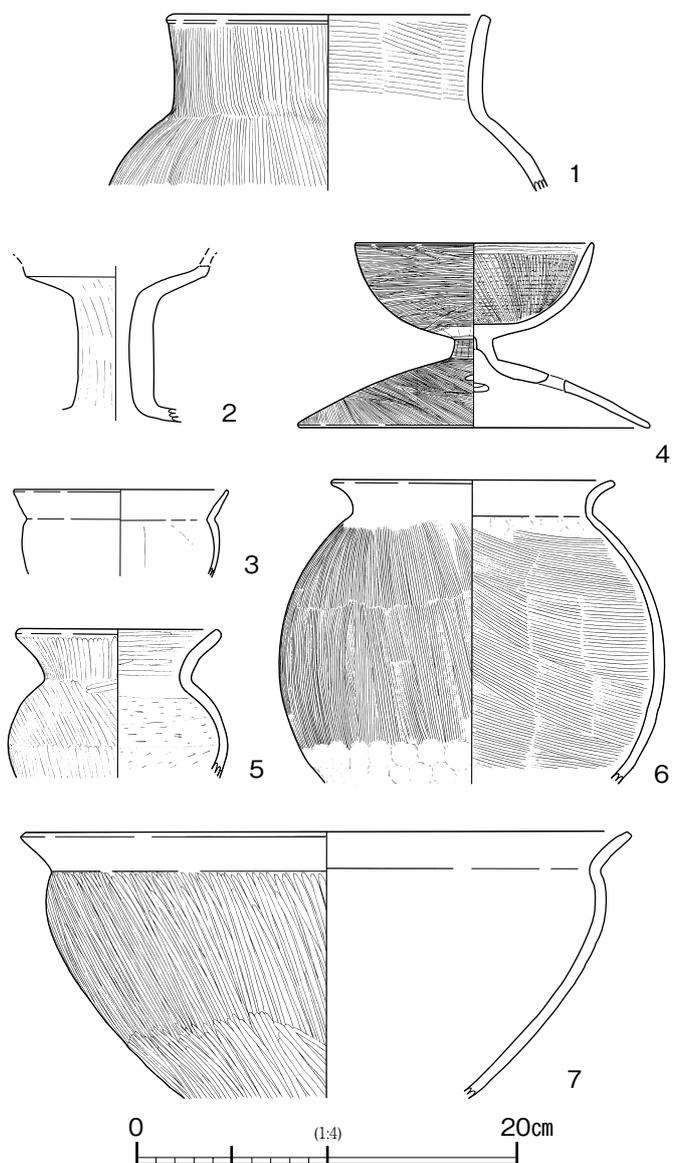


図 308 59号墳 出土遺物

第5 - 2 b層に達する。人骨の出土状況から頭位は東側にあり、真北から東に約72° 振った位置である。墓坑の内部では木棺等の痕跡は確認できなかったが、人骨1体分が出土した。残存状態は良好ではなく、頭骨・上腕骨・骨盤・大腿骨・脛骨の一部が見つかったものの、性別や年齢の鑑定は不可能であった。

遺物は、壺・器台・椀形高杯・小型品・甕・鉢等がみられる（図308、図版388・389）。1は墳丘盛土内から出土した直口壺の破片であるが、他は周溝内からのものである。2は有段器台、3・5は小形丸底鉢・壺である。4は細かい横方向のミガキを外面に、杯部内面には暗文状の放射状ミガキを施す。6はハケ目調整のみの甕である。器台や小型品、椀形高杯から、59号墳は庄内式中段階以降に築造されたと考えられる。50号墳との切り合い関係においても、時間的な齟齬が生じないことは重要なことである。

50号墳 調査区のほぼ中央、 $X = -153,083$ 、 $Y = -38,170$ に位置する（図309、図版103）。同墳墓の周囲に検出された墳墓群の中では最も規模の大きなものであり、50号墳を取り囲むように小墳が配されているようにも見受けられる。50号墳は、全体的には破壊行為の受動が少なく、残存状態は良好である。しかし、部分的に攪乱を受けた場所が要所を占めるため、北側は25号墳、東側は26号墳と、それぞれの前後関係を把握できない点は残念である。

新旧が明確となっているのは、前述のとおり南側の59号墳のみであり、本墳墓が後出する。墳丘の平面は隅丸方形を呈しており、東西方向がわずかに長く設定されている。基底面における墳丘規模は、長

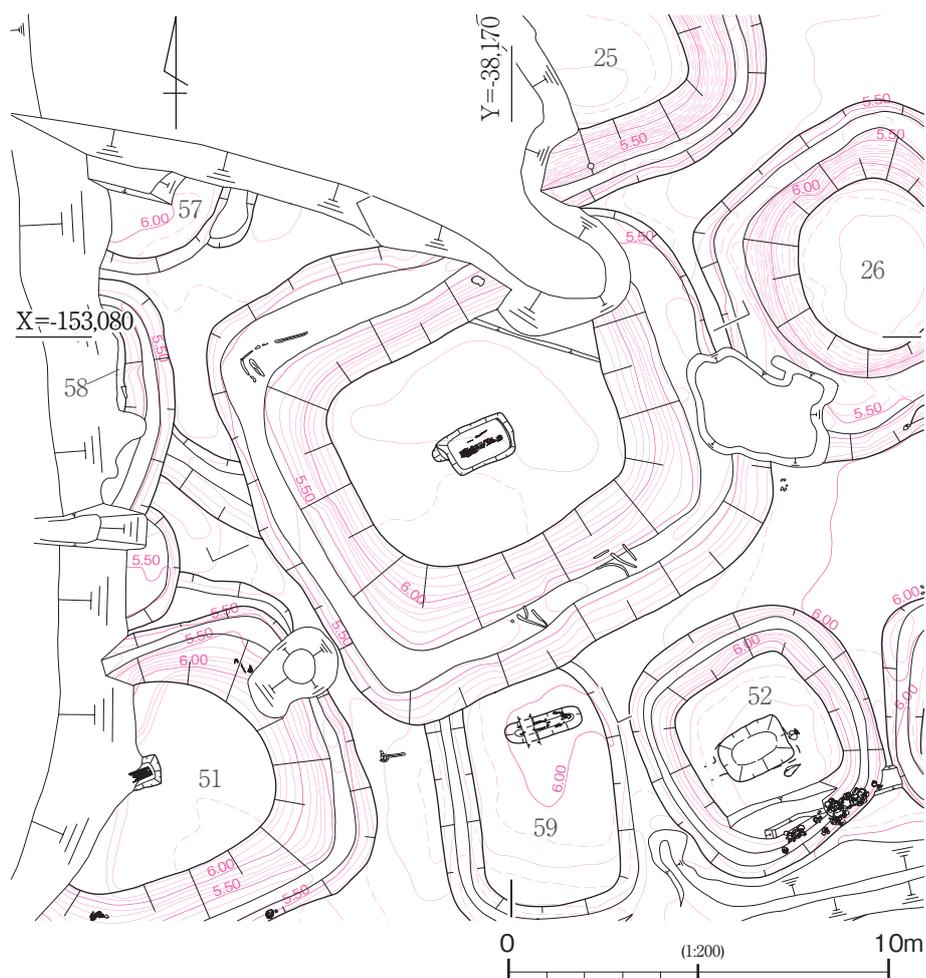


図 309 50号墳 平面

軸が約8.2 m、短軸が約6.4 m、高さが最大で約44cmを測る（図311）。墳丘直下の基盤層には、土壌化した第5 - 2層を確認することができる。周溝外の第5 - 2層直上には第5 - 1層が形成されるという違いはあるものの、同一層位の差は古い段階の墳墓のように明確ではなく、むしろ酷似することから、土壌化の程度そのものからの時間差はほとんどないものと判断できる。このような基盤層の上部において、計13層の墳丘盛土を確認した。盛土層は上部になるほど含まれる砂の粒径が粗くなるものの、古い段階の墳墓のように、ほぼ完全な第5 - 2 b層と化すまでには至らない。盛土層は均質的にシルトを主成分とすることから、墳丘の崩落を防止する目的のために、故意に粘性が強く、流動性の少ない土砂を使用したとも考えられる。また断面の観察により、墳丘の構築方法が明らかとなった。

まず、墳丘位置を設定した範囲の外周部分に墓坑構築面相当の盛土を堤状に行う。次に、凹んで残った内側（中央）部分に土砂を流し込み、頂面の高さを調整しながら平坦に整地する。墓坑を構築した後は、他の墳墓と同様に覆土を行ったものと思われるが、後世の削平により詳細は不明である。

周溝は、断面が浅い椀状を呈し、幅2.6 ~ 3.2 m、深さ44 ~ 60cmを測る。埋土の下半には墳丘からの崩落土が堆積し、その上面は土壌化により第5 - 1層が形成される。上半には第4 - 2 b層である氾濫土砂が堆積しており、これにより周溝は完全に埋没する。なお、流入した氾濫堆積物は粘土 ~ 微砂であることから、水勢はほとんどなかったものと思われる。

埋葬施設は、墳丘のほぼ中央において1基を確認した（図312）。主体部①は墳丘上部の盛土を10cmほど除去すると現れ、平面は隅丸長方形を呈する。西側に浅い突出部や、東辺全体に段が認められるものの、用途等は不明である。突出部や段を含む墓坑全体の長さは約2.20m、内側の方形部分は約1.70m、幅1.10 ~ 1.17m、深さ約25cmを測る。墓坑内からは木質遺物の他に遺骸や副葬品等は出土しなかったが、墓坑の幅が僅かに広いことから、頭位は東側であったと考えられる。墓坑の主軸は墳丘の長軸に一致しており、真北から東に約65°振る。この頭位方向は、周辺に位置する52・59・51号墳とはほぼ一致しており、非常に注意すべき点である。墓坑の埋土は上下に3層を確認したものの、木棺残片が残ることから本来は裏込め土や覆土が区別されるはずであったが、分層はならなかった。墓坑のほぼ中央から木質遺物が出土し、ほとんど元の形状を保っていない残片のみであるが、上下別々の層位からみつかることから、底板と蓋板の組合せから成る木棺と断定する。木質がまとまって分布する範囲は長さ約1.20m、幅約25cmであり、かなり小型の木棺が復元されるものの、墓坑規模に比して不均衡なことは明らかである。北側にも木片が認められることから木棺幅が拡大する可能性はあるものの、少なくとも全長からは成人男性用のものとは考えにくい。また、底板の残片は墓坑の底部直上に出土することから、墓坑内における木棺設置用の整地等は省略されている。

遺物は出土量そのものが極めて少なく、周溝内に散在する程度である。周溝北西隅で見つかった木質遺物はヤマゲワの立木根株であり、周溝の埋積が進行したある段階に根付き、第4 - 2 b層の氾濫堆積物に埋没して枯死したと考えられる。

これに対する北東、攪乱のすぐ際には、破碎した壺1個体が出土した（図310）。壺は墳丘斜面に堆積する崩落土の中にあり、口縁部を墳頂に向けた状態で倒れていた。墳頂より転落した可能性も考えられるが、墳丘北東隅の形状

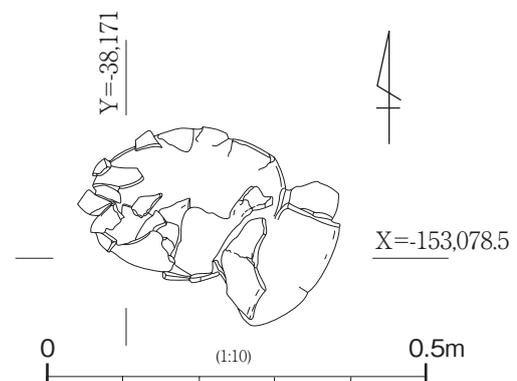


図 310 50号墳 遺物出土状況

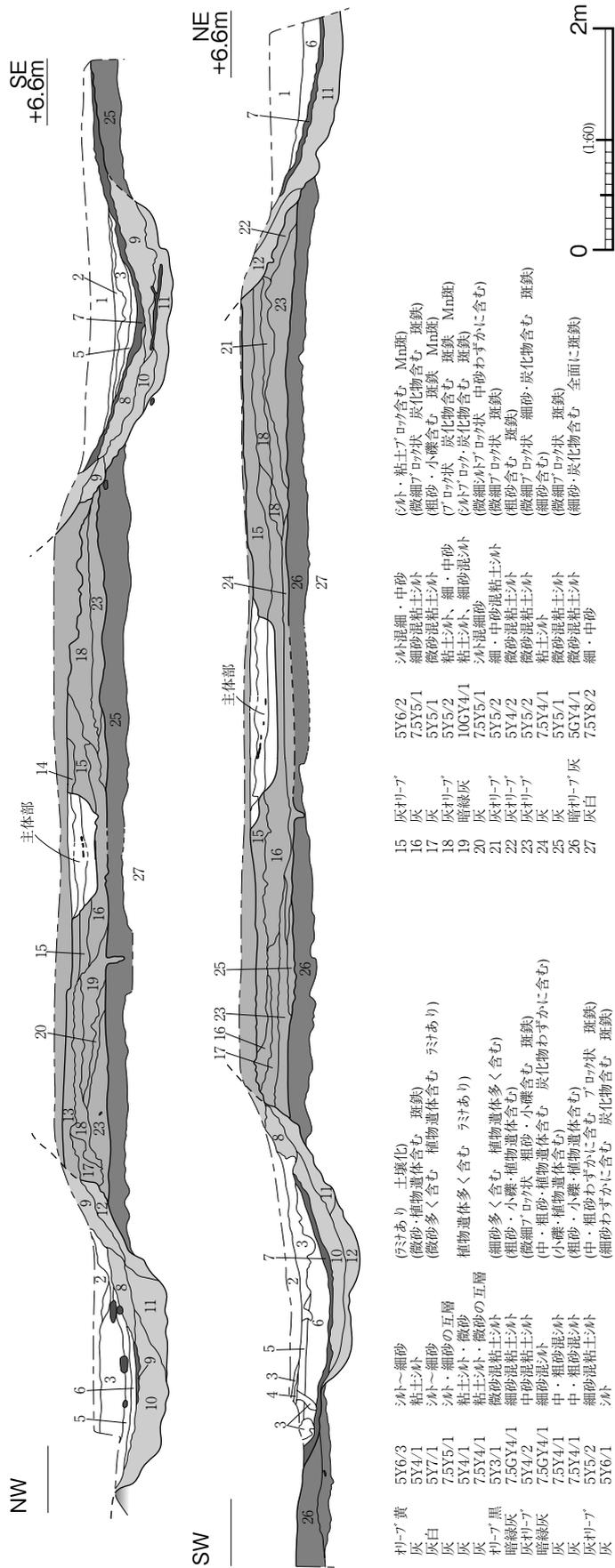


図311 50号墳 断面

- | | | | | | | | |
|----|-----|---------|--------------|-----------------------|---------|--------------|-----------------------|
| 1 | 初ア黄 | 5Y6/3 | シルト・細砂 | (注あり) 土壌(七) | 5Y6/2 | シルト混細・中砂 | (シルト・粘土アロック含む、Mn斑) |
| 2 | 灰白 | 5Y7/1 | 粘土シルト | (微砂・植物遺体含む、斑鉄) | 75Y5/1 | 細砂混粘土シルト | (微細アロック状、炭化物含む、斑鉄) |
| 3 | 灰 | 75Y5/1 | シルト・細砂の互層 | (微砂多く含む、植物遺体含む、注あり) | 5Y5/1 | 微砂混粘土シルト | (組砂・小礫含む、斑鉄、Mn斑) |
| 4 | 灰 | 5Y4/1 | シルト・細砂・微砂 | 植物遺体多く含む、注あり) | 5Y5/2 | 粘土シルト、細・中砂 | (アロック状、炭化物含む、斑鉄、Mn斑) |
| 5 | 灰 | 5Y4/1 | シルト・細砂・微砂の互層 | 植物遺体多く含む、注あり) | 10GY4/1 | 粘土シルト、細砂混シルト | (シルトアロック、炭化物含む、斑鉄) |
| 6 | 灰 | 75Y4/1 | シルト・細砂・微砂 | 植物遺体多く含む、注あり) | 75Y5/1 | シルト混細砂 | (微細アロック状、中砂わずかに含む) |
| 7 | 初ア黒 | 5Y3/1 | 微砂混粘土シルト | (細砂多く含む、植物遺体多く含む) | 5Y5/2 | 細・中砂混粘土シルト | (微細アロック状、斑鉄) |
| 8 | 灰持ア | 75GY4/1 | 細砂混粘土シルト | (細砂・小礫・植物遺体含む) | 5Y4/2 | 微砂混粘土シルト | (微細アロック状、斑鉄) |
| 9 | 暗緑灰 | 5Y4/2 | 中砂混粘土シルト | (微細アロック状、組砂・小礫含む、斑鉄) | 75Y4/1 | 粘土シルト | (微細アロック状、細砂・炭化物含む、斑鉄) |
| 10 | 暗緑灰 | 75GY4/1 | 細砂混シルト | (中・粗砂・植物遺体含む) | 5Y5/1 | 微砂混粘土シルト | (微細アロック状、斑鉄) |
| 11 | 灰 | 75Y4/1 | 中・粗砂混シルト | (小礫・植物遺体含む、炭化物わずかに含む) | 5GY4/1 | 微砂混粘土シルト | (微細アロック状、斑鉄) |
| 12 | 灰 | 75Y4/1 | 中・粗砂混シルト | (中・粗砂わずかに含む、アロック状) | 75Y8/2 | 細・中砂 | (微細アロック状、炭化物含む、斑鉄) |
| 13 | 灰持ア | 5Y5/2 | 細砂混粘土シルト | (細砂わずかに含む、炭化物含む、斑鉄) | | | |
| 14 | 灰 | 5Y6/1 | シルト | | | | |

をみると、墳頂部の土砂が崩落する際に一緒に落ち込んだものと解釈できる。

南側周溝の埋土中位からは木質遺物等がまとまって出土しており、大半は自然遺物であったが、これに混じって加工木や土器片が出土している。出土した遺物の内容としては、不明木製品の他に甕・高杯・壺等の碎片が挙げられ、そのうちの一部を図示した(図313、図版389・390)。1・3は南側周溝から出土した遺物である。3はスギ材による用途不明品であるが、部分的に炭化しており、一部に赤色顔料の付着もみられる。2は墳丘の北側斜面から出土した直口壺である。図版390-写16は、南側周溝から出土したスギの板材である。遺構に伴う様子や組み合わせるものが無いために断定はできないものの、木棺材の可能性が高いと考える。

わずかな出土土器からは50号墳の築造時期は庄内式期の新段階頃と推測する。図示し得なかった碎片遺物を含めても、前述の59号墳よりは明らかに新しい様相が看取されることから、大きくは矛盾しないものと考えられる。

51号墳 X = -153,092、Y = -38,180に位置し、50号墳の南西に隣接する(図314、図版105~107)。墳墓の西側約3分の1を後世の攪乱によって失うものの、墳丘角のうちの3ヶ所を確認することができたため、全体形を把握することは可能である。墳丘の北東部分が丸く広がるような形状を呈するものの、後世の攪乱による崩落で変形したものと考えられ、本来の平面は隅丸長方形であったと推測される。

基盤層を基準とする墳丘規模は、長軸が約8.0m、短軸が約5.7mに復元が可能である。墳丘頂部も削平されているため、検出時は約35cmの墳丘高を確認したに止まっ

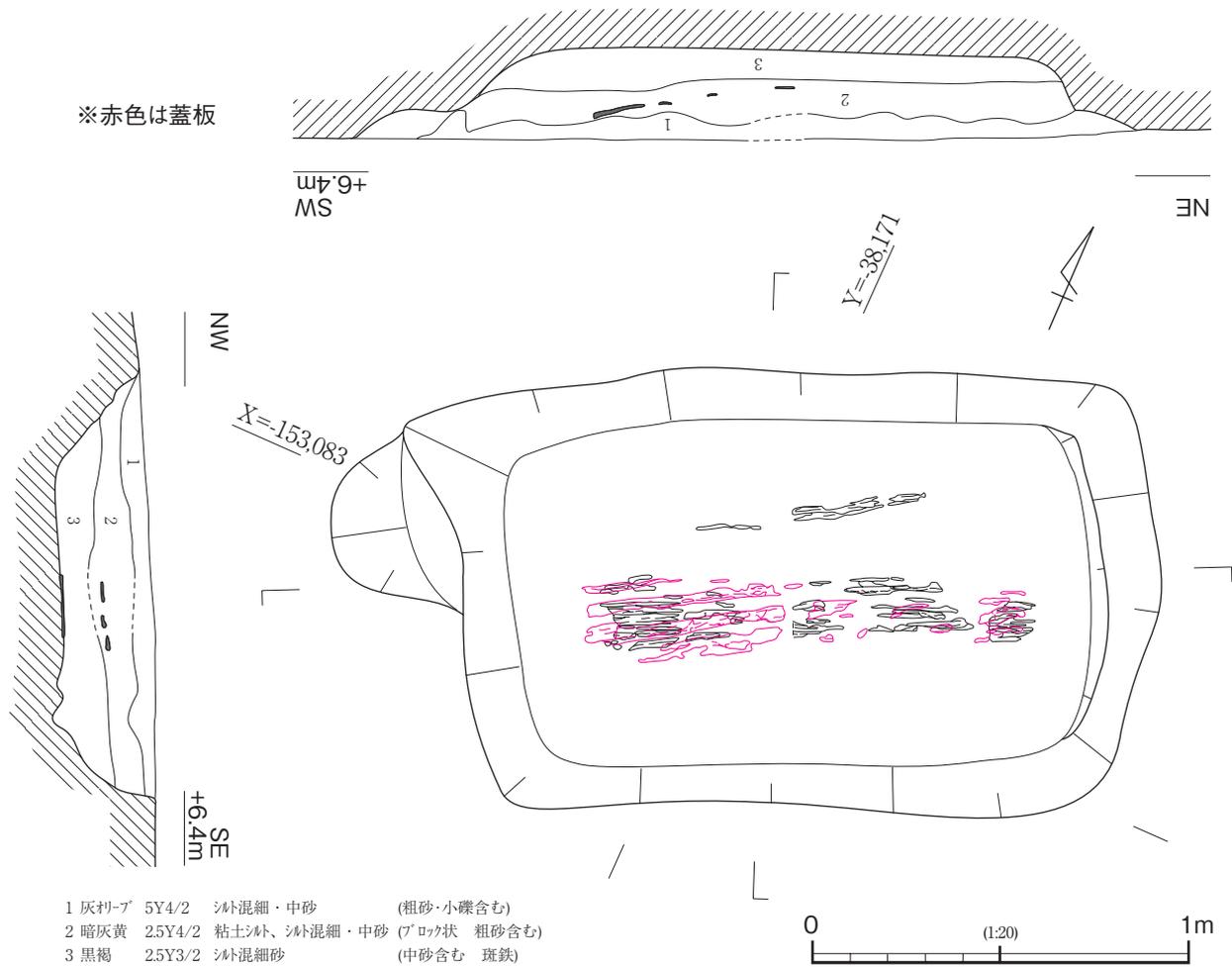


図 312 50号墳 主体部① 平・断面

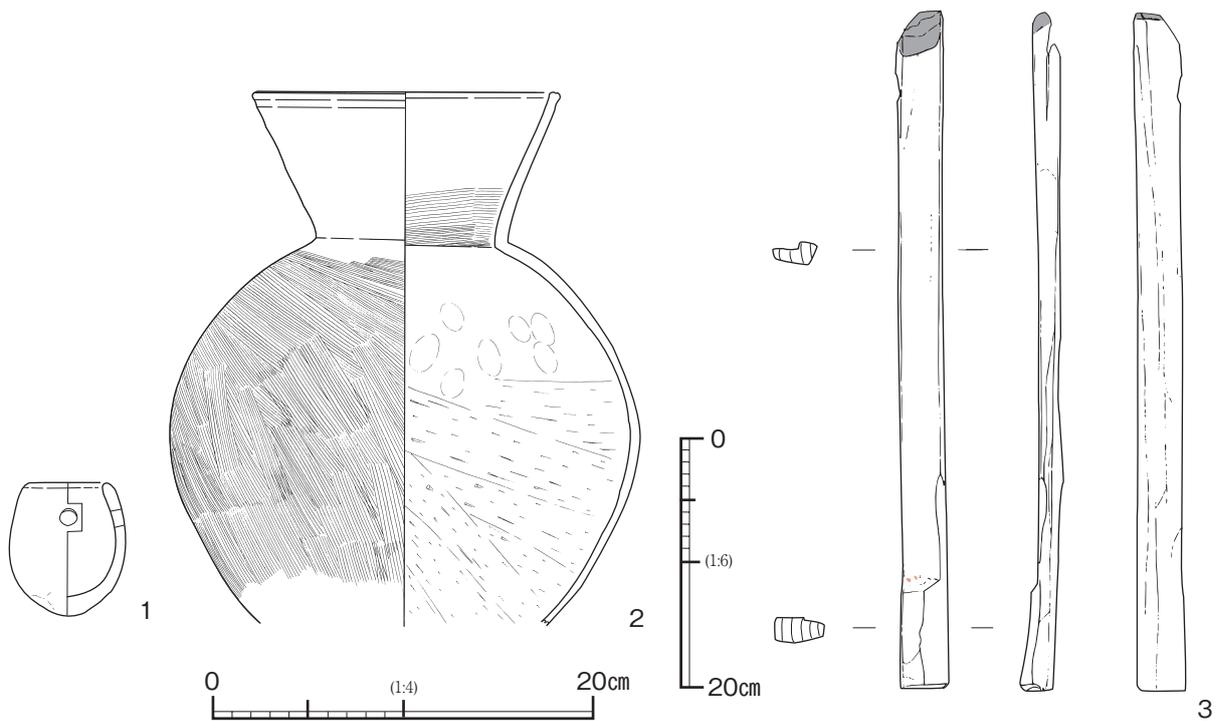


図 313 50号墳 出土遺物

た。墳丘直下には基盤となる第5-2層が検出され、上部に3層前後の盛土層を確認した(図315)。確認する土層は僅かではあるものの、本墳墓については盛土上部ほど粗い砂土が多く含まれることが確認され、周溝掘削に伴う下層の第5-2b層が巻き上げられたことを意味する。上部が削平されているため、埋葬施設構築面も確認することはできなかった。

第5-2層を基準とした周溝の幅は東側で約1.5m、南側で約2.9mを測る。図314の墳丘平面図では、南側周溝の幅はそれほど広くみえないが、これは第5-2層の掘削範囲ではなく、見かけ上の凹みを周溝と認識したための誤差である。その後の断割調査により、墳丘築造時にはかなり広い範囲の地表面を加工したことが明らかとなったものである。同様の例は、後述する22号墳に認められる。

周溝は、すべて墳丘からの崩落土により埋没しており、その上面には第5-1層が形成されている。

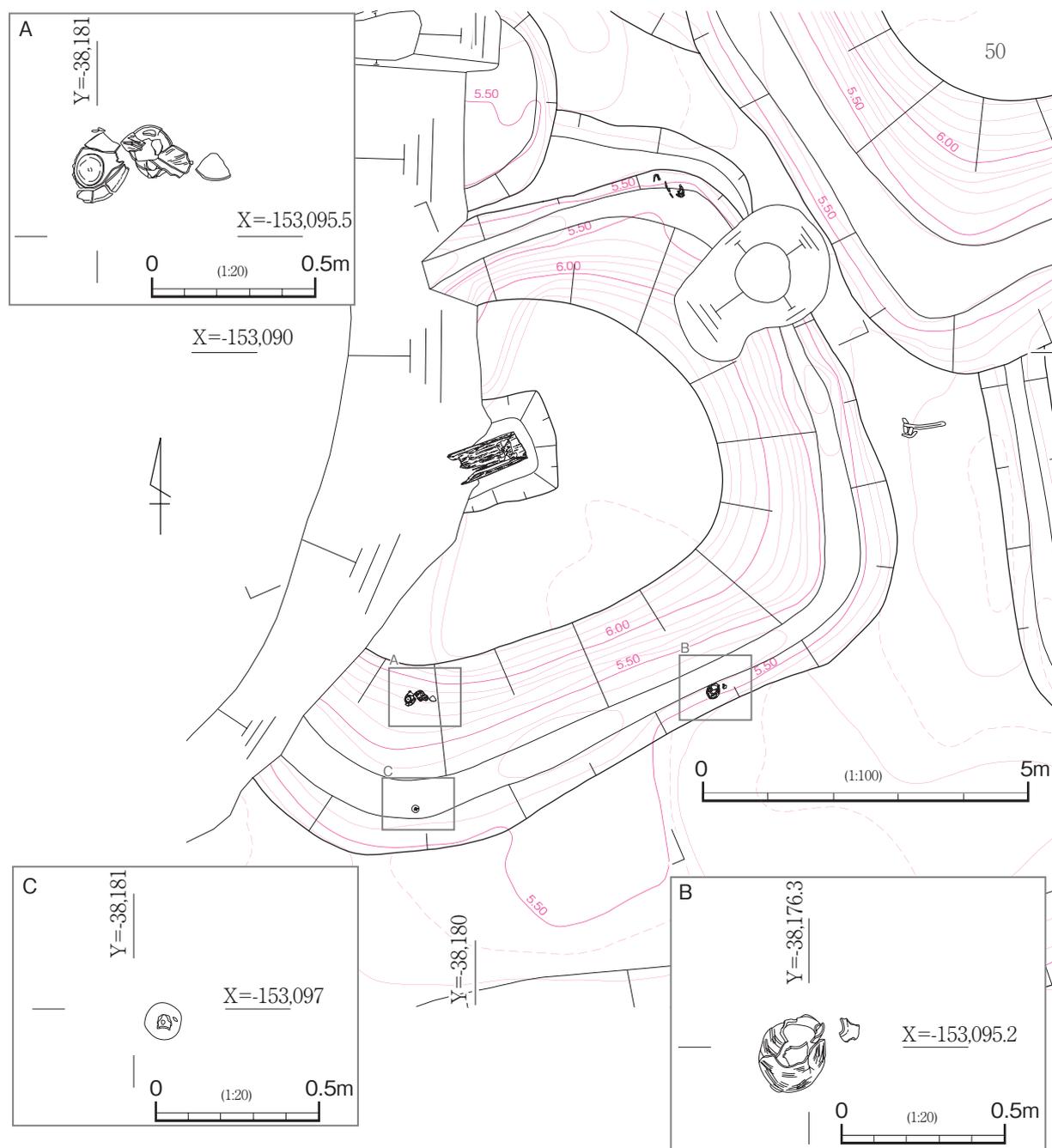


図314 51号墳 平面・遺物出土状況

50号墳の周溝を埋没する第4層の氾濫堆積物は、51号墳にも到達するものの、すでに周溝は埋没していたために周辺一帯に堆積しながら、墳丘に収斂する様子が窺える。

埋葬施設は、墳丘のほぼ中央において木棺1基を確認した(図316)。墳墓の西側を攪乱する第3面の03019池を調査中、遺構法面ではすでに木棺が露頭していた。このことから、少なくとも03019池が存続した期間は風雨に晒されていたことが明らかである。また、その当時、まだ棺内が埋積していなければ棺材は完全に腐朽するか散逸したと考えられ、それ以前に、このような木棺の多くは埋もれていたことがわかる。

墳丘と同様、主体部①も西半部を大きく削り取られており、検出時の規模を明示する。掘形の平面はやや歪んだ長方形を呈し、幅約1.6m、深さ約25cmを測る。棺は底板上に側板・小口板を立てる組合式木棺である。蓋板は消失するものの、側板は当時に近い形態を保たれている。小口板が内側に倒れ込むことから、小口側から棺内に土砂が流入し、結果的に側板の状態が残ったものと考えられる。底板は幅約52cm、長さ約110cmを測り、棺の内寸としては長さ側が約80cmと短くなる。墓坑の断面によると、掘形として加工された最深部に比べ、木棺底面の標高は5cmほど高くなっている。特に横断面では、底板の両側に明らかな凹みが確認できる。この凹みを故意に作り出したかどうかは不明であるが、掘削面より木棺底を高くする意識があったことは間違いないと考える。墓坑底面が盛土層の途中であったため、棺底の整地土と墳丘盛土を同一とみなしてしまった可能性はある。

墓坑や棺内から遺骸・遺物の出土はみられなかったために頭位は不明であるが、前述のように、周辺の50・52・59号墳とはほぼ同一方向に軸を揃えて主体部が配置される点は注目に値する。他の墳墓と同様であれば、頭位は東側と考えられ、真北から東に約68°振った位置にある。

埋葬施設としては確認できなかったものの、北側周溝の北東隅において、人骨がまとまって出土した(図版107)。人骨は周溝埋土の掘削中に出土し、検出後、周囲の精査を行ってみたものの、掘形等の痕跡は認められなかった。これは周溝埋土が自然堆積ではないため、再掘削を行っていたとしても土質

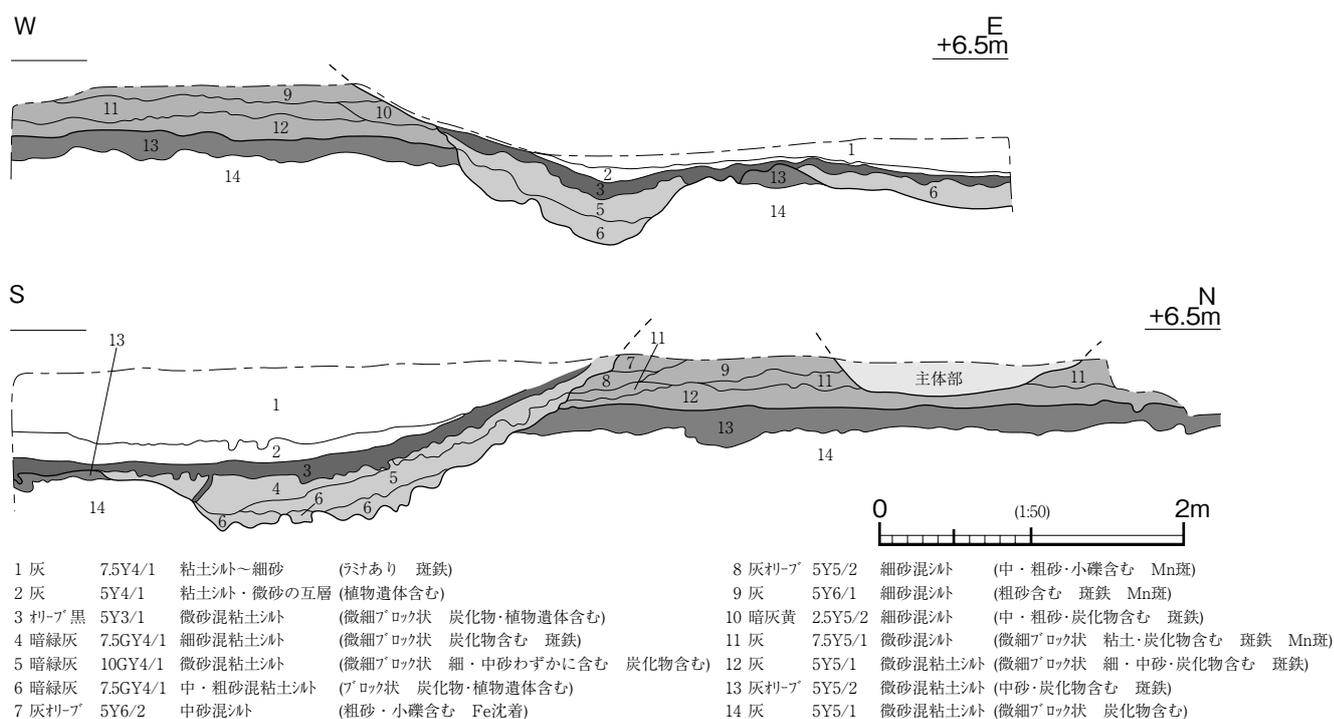


図 315 51号墳 断面

の判別が非常に難しいことによるものかもしれない。残念ながら、周溝底面においても土坑状の痕跡は見つからなかったことから、周溝内埋葬の可能性があるとだけ記すに止める。見つかった人骨は頭骨・下顎骨・長骨であり、鑑定の結果、大臼歯の磨耗から35歳以上の成人であることがわかった。

遺物は、第V様式系甕片が盛土内から出土する以外、大半が周溝内から出土したものである。しかも人骨が出土した北半では皆無であり、南半でも東側に集中してみつまっている。その中には、墳丘斜面から出土する等、墳丘頂部からの転落を窺わせる資料も存在する（図314）。全体的な出土量は、50号墳と同様に非常に少ない。内容としては、鉢・高杯・壺・甕等の土器以外に、用途不明ではあるが、木製品が豊富にみられる（図317、図版389～391）。2・4・5・7は図314 A、3は同図C、8は同図Bから出土した土器である。1は小型の有段鉢、3は出土した椀形高杯であり、いずれも細かな横ミガキと見込みの放射状ミガキが特徴的である。4は口縁部の内外面に櫛描文や刻目による加飾を施す有段高杯である。6は複合口縁をもつ壺であり、口縁部外面や肩部に櫛描文や刻目による加飾を行う。実物では痕跡程度にしか確認できないが、外面全体と口縁部内面に赤彩を施す。内底部にも赤色顔料の付着が認められるものの、これは口縁部のものが雨水に溶融して流れ込み、沈殿したと考えられる。7・8はいずれも乳褐色の胎土をもつ第V様式系甕であり、当墳墓では庄内形や布留式甕は出土していない。図示した木製品はすべてスギ材によるものであった。9・10は3と共に出土した木製品である。9は形

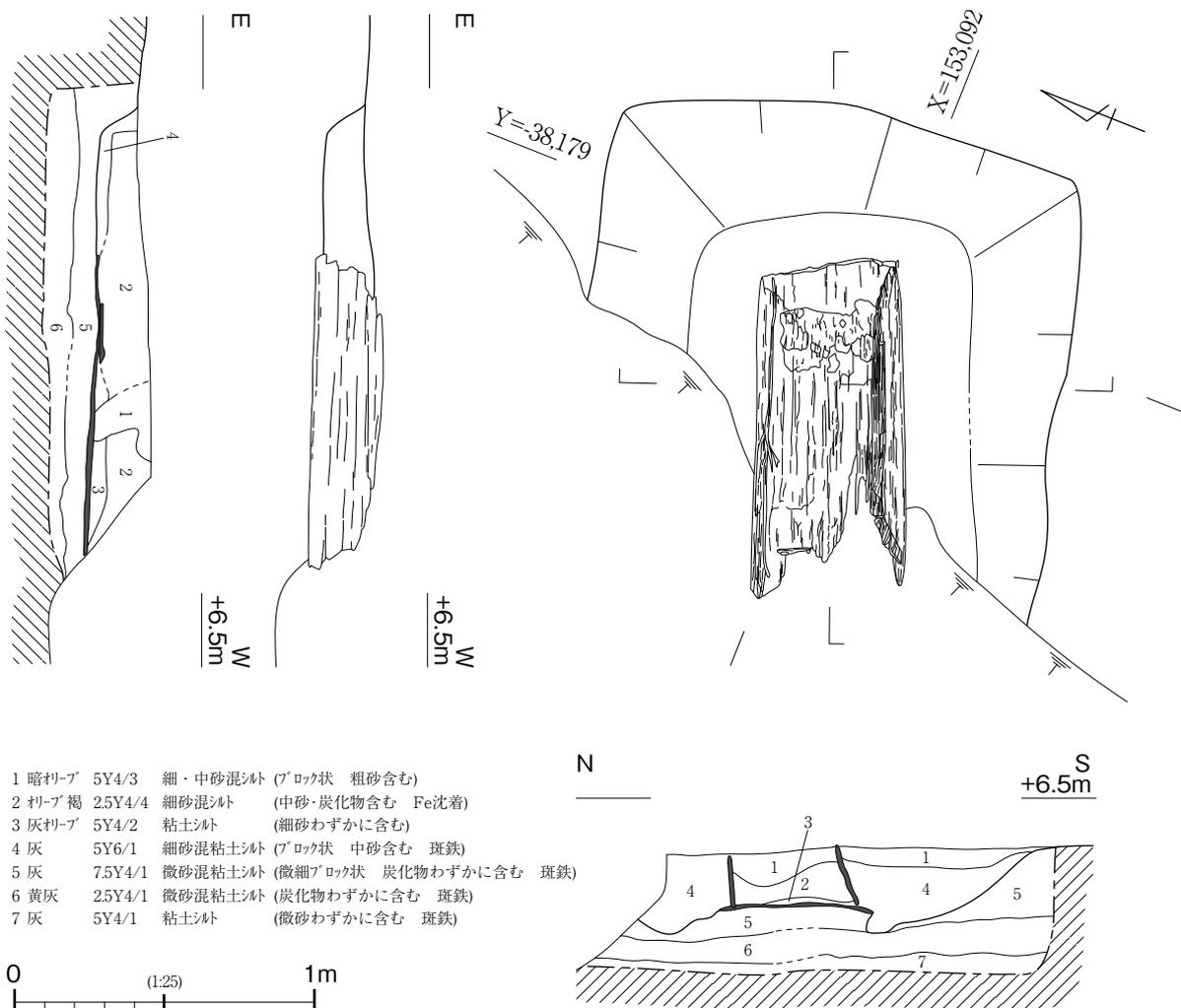


図316 51号墳 主体部① 平・立・断面

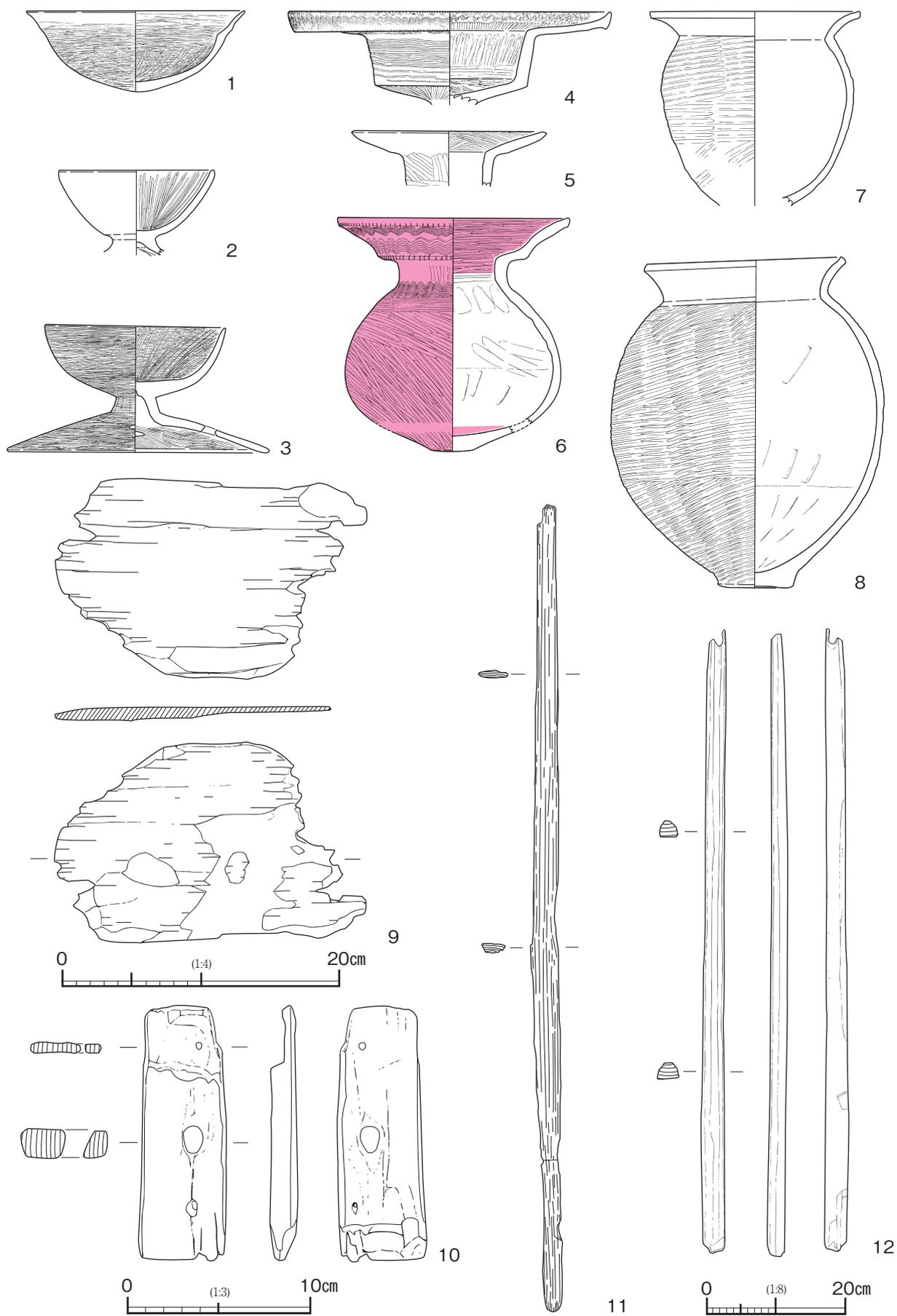


图 317 51号墳 出土遺物

状から木棺の小口板と推測する。10は大小の穿孔をもつ加工した角材である。11は薄くて長い用途不明の角材であるが、表面の多くに被熱による炭化がみられる。12は先端付近に抉りのある棒状木製品である。出土当初は先端が残存し、楕円形の穿孔が確認できたものの、その後、紛失してしまったものである。棒状部分の最大直径は約3.2cmで、先端に向かってわずかに細くなる。先端の孔は、長径約3.5cm、短径約9mmに推定される。形状から、屋根の萱葺きを使用する

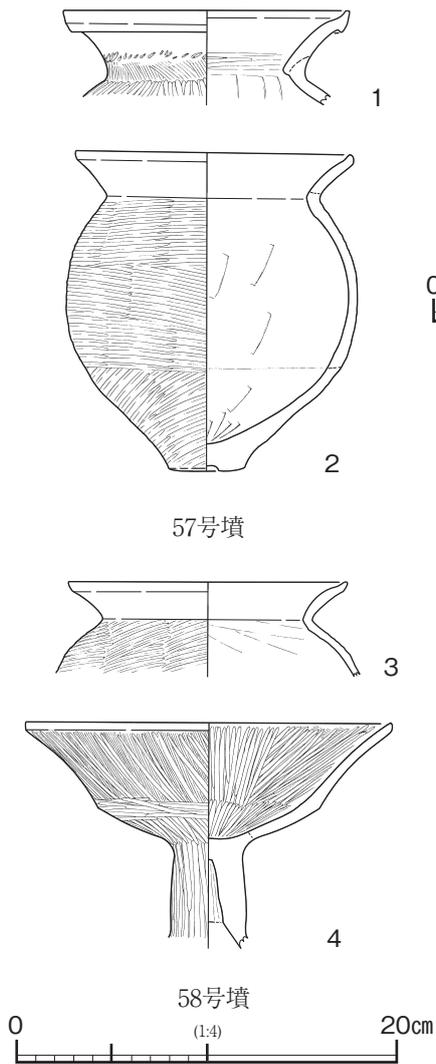


図 319 57号墳・58号墳 出土遺物

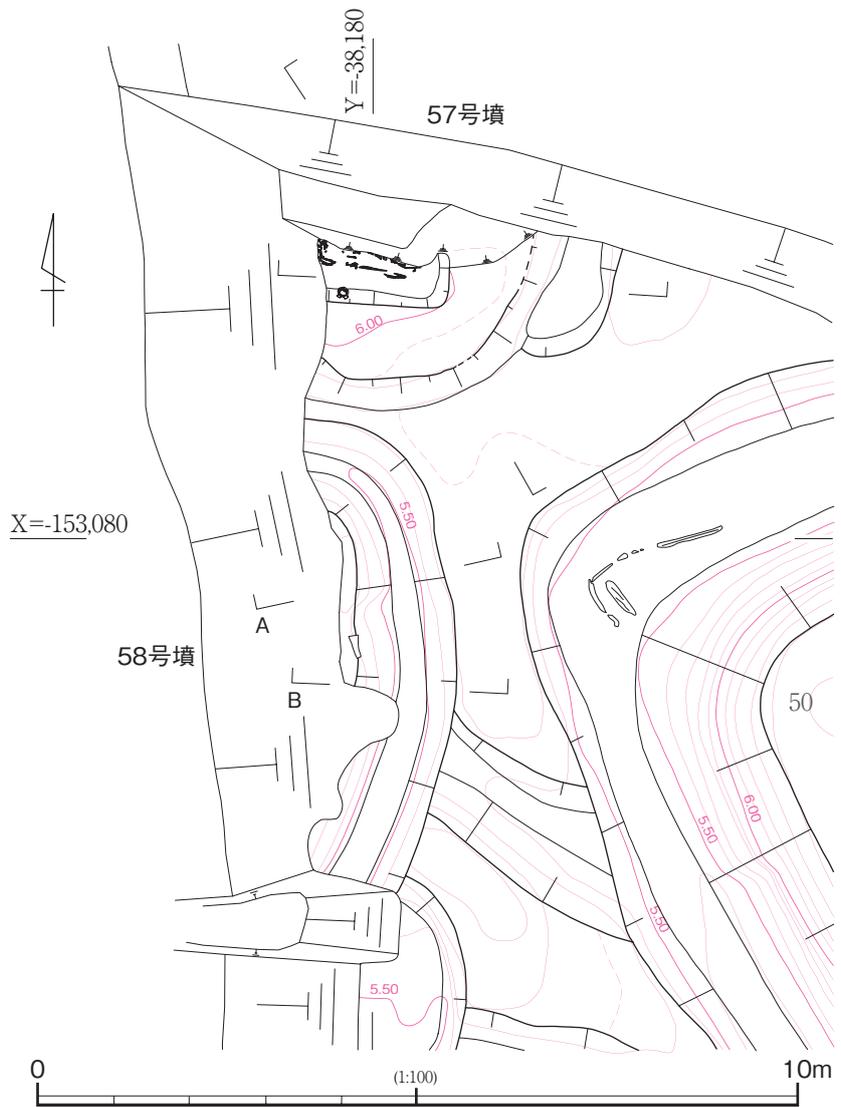


図 318 57号墳・58号墳 平面

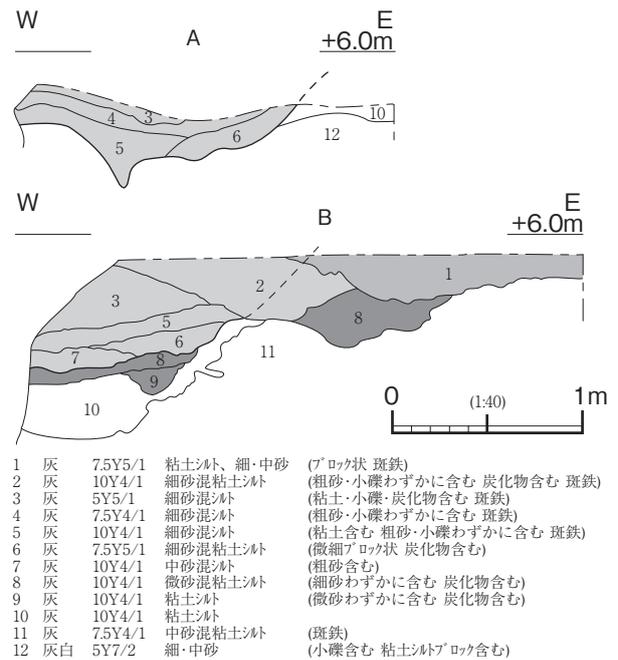


図 320 58号墳 断面

「針」ではないかという指摘がなされている。

出土土器から、全体的には庄内式期新段階頃を比定するが、1は通常、布留式期以降に現れるとされており、若干の型式差が生じてしまう。上層からの混入である可能性が最も高いと思われるが、後世に供献された可能性や、帰属型式が遡る場合も考えられる。

58号墳 57・58号墳は、調査区のはぼ中央、50号墳の西側に南北に並んで位置するが、遺構の大半を古代の池等により攪乱されるため、全形は把握できない。

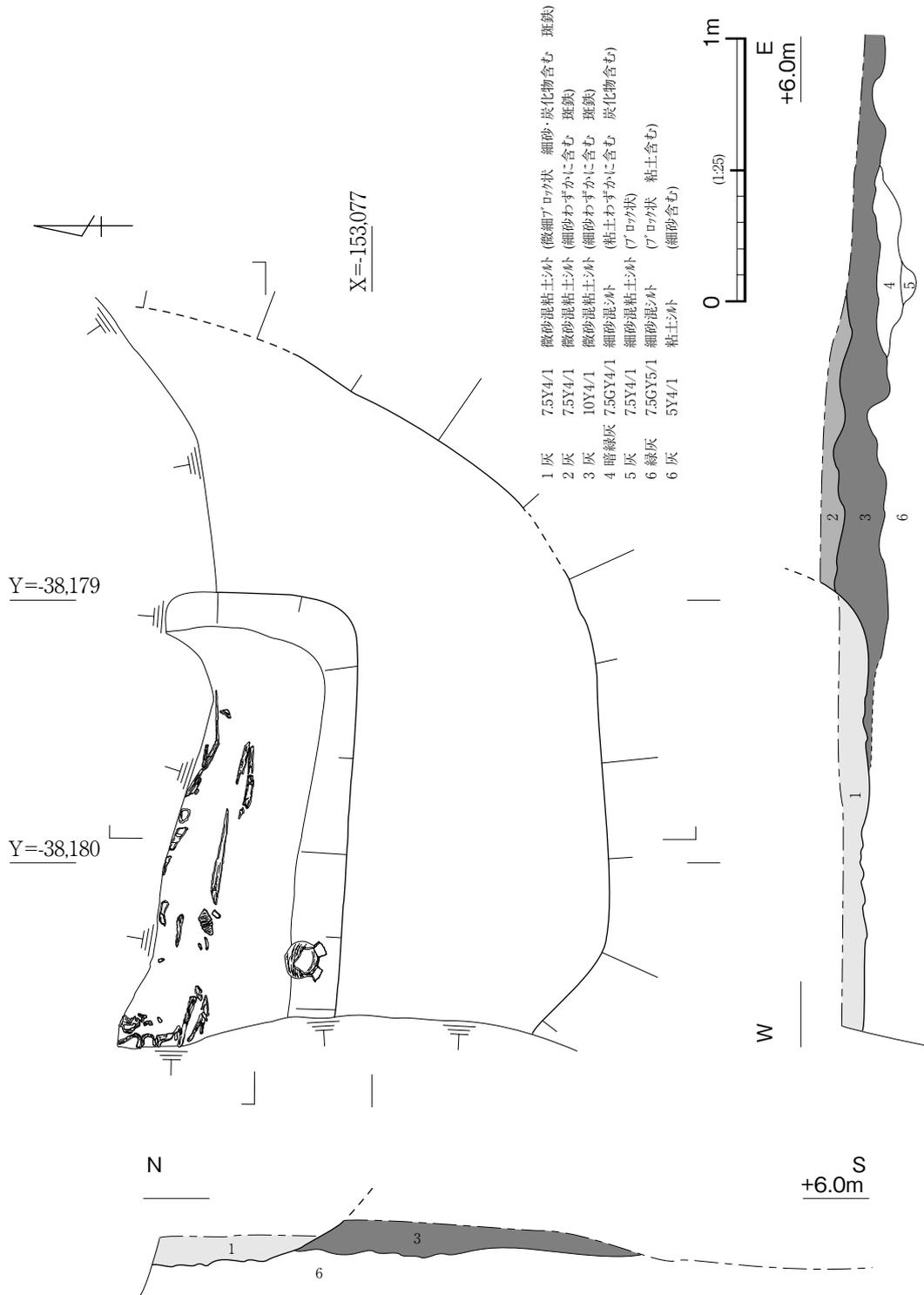


図 321 57号墳 主体部① 平・断面

58号墳は2基のうちの南側に位置し、西に屈曲する東側周溝の北東角と、旧地表面と異なる高まりを同溝の内側に検出したことから、墳墓と断定した（図318、図版104）。

残存状態では、周溝幅約1.3 m、深さ25～35cmを測り、推定される墳丘一辺の長さは約6.0 mである（図320）。なお、断面Bの層2は、50号墳の周溝からのびる後世の溝の埋土であり、詳細は不明である。本墳墓に関する埋葬施設はまったく確認できなかった。

遺物は周溝から出土した甕・高杯が挙げられる（図319、図版390）。おそらく庄内式期古段階に築造されたと考えられる。

57号墳 58号墳の北側に位置し、西を古代の池、北を現代の攪乱により消失する（図318、図版105）。辛うじて墳丘の南東部と、周溝の一部らしき溝を検出した。

墳丘は第5－2層上に異なる土質が残存していたものであり、基盤層からわずか6 cmの高さしかない（図321）。この周辺を精査したものの、墳丘裾を巡る溝は検出できず、東側に浅い凹みを確認するに止まった。周溝や墳丘はほとんど残存しなかったが、基盤となる第5－2層が緩やかに上昇する頂部付近において、埋葬施設を1基検出した。残存する規模は、長軸で約1.7 m、幅約80cm、深さ約10cmである。断面は浅い皿状を呈し、埋土が1層残るのみである。墓坑内に木棺の設置された形跡は認められず、墓坑底面付近からは人骨と、南側のやや浮いた位置から土器1個体が出土した。人骨は、分布する状態から下半身に相当すると考えられ、鑑定の結果でも大腿骨を含むことが分かっている。しかし、それ以

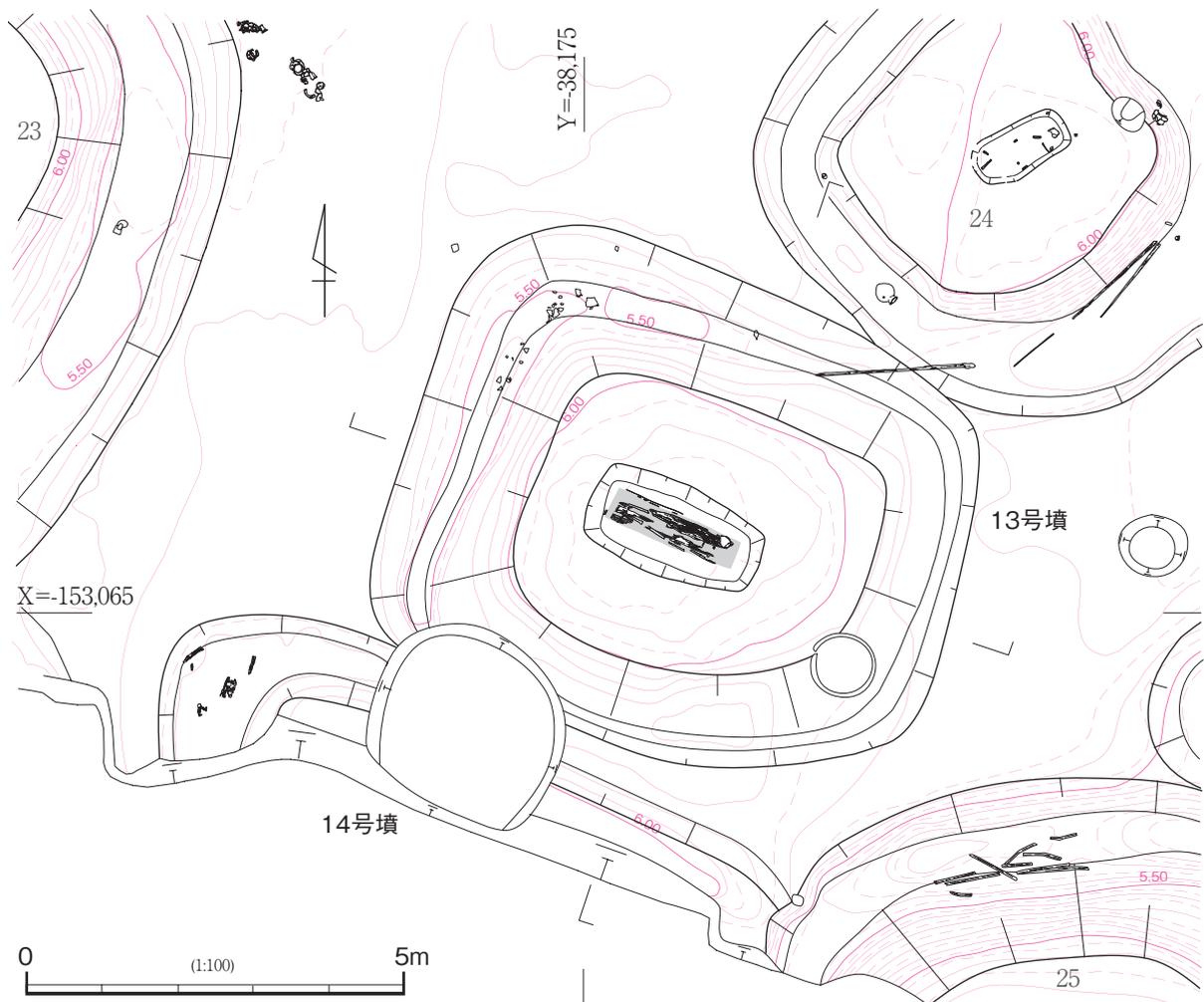


図 322 13号墳・14号墳 平面

外は原形を止めないものが多く、部位も状態も判然としない。ただ、頭位は隣接する50号墳等と異なり、西側に位置することが明らかである。墓坑軸とはやや異なるものの、人骨の中心軸から推定される頭位は真北から西に約77°の位置にある。

土器は人骨よりやや高い位置から出土するものの、墓坑埋土内であることは確かである。ただし、覆土上面に置かれたものから、遺体と共に埋納されたとまでは言及できない。土器は第V様式系の叩き甕であり、ほぼ完形に復元された(図319、図版150)。口縁の打ち欠きや穿孔は認められない。遺物としては、この他に、墳丘肩口から出土した壺の口縁部片がある。資料が少ないため正確ではないものの、58号墳と同様、57号墳の築造も庄内式期古段階頃と推測する。

13号墳 調査区の中央、X = -153,064、Y = -38,174付近に位置する(図322・323、図版109・110)。墳墓の南西と南東に現代の攪乱がみられる以外は、残存状態が良好である。墳墓を検出した当初は、基底となる旧地表面が東に向かって下降するため、地形に惑わされて東側の周溝を認識できずにいた(付図9)。実際には、他の墳墓と同様、四周に溝の巡ることが明らかとなった。また、北側の24号墳に対し、若干後出することも分かった。

13号墳の平面は隅丸長方形を呈し、基盤層を基準とする墳丘規模は、短軸が約3.9m、長軸が約4.6m、墳丘高が最大約30cmである(図323)。墳丘の直下には、基盤となった第5-2層の残存状況を確認することができる。盛土層は、墓坑構築面を基準に下部に2層、上部に3層の計5層を確認した。土質等において、各盛土層に明確

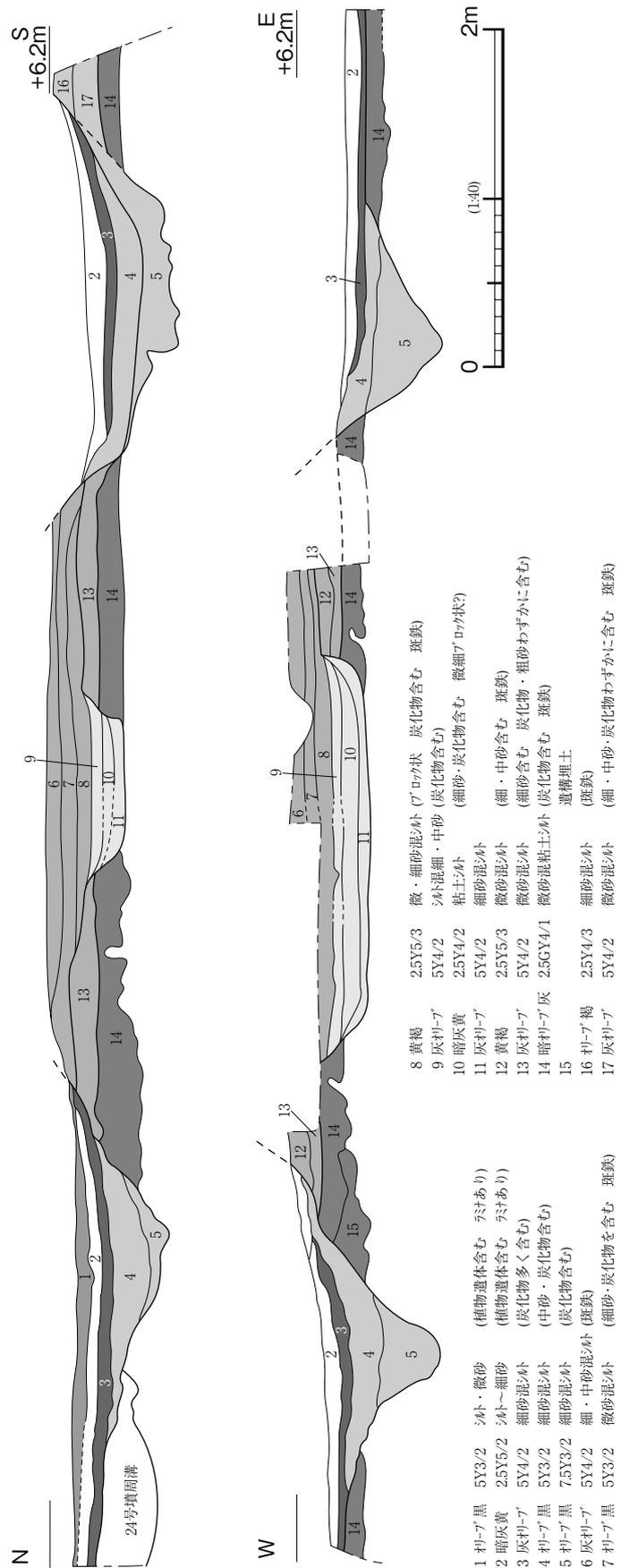


図 323 13号墳 断面

な違いは認められなかった。

墳墓の築造方法を推測すると、まず周溝掘削による排土を利用して厚さ15cm前後の厚みで整地を行い、墓坑を基盤層下の第5-2層上部まで掘削する。遺体を埋葬した後に覆土を行い、その後、墳丘全体に少なくとも3層の盛土を行う。本墳墓では、埋葬施設上部の盛土層が良好に残存しており、他の墳墓も本来はこれと同等の盛土が行われたものと推測する。

周溝は幅1.4~1.8m、深さ30~50cmを測る。周溝南側の幅が極端に広いのは、隣接する14号墳のものと重複するためであり、実際にはこの一部と考える。断面の形状は、南北がU字状であるのに対し、東西がV字状を呈し、やや深く掘削される。原因は不明であるが、南北には14・24号墳が接するのに対し

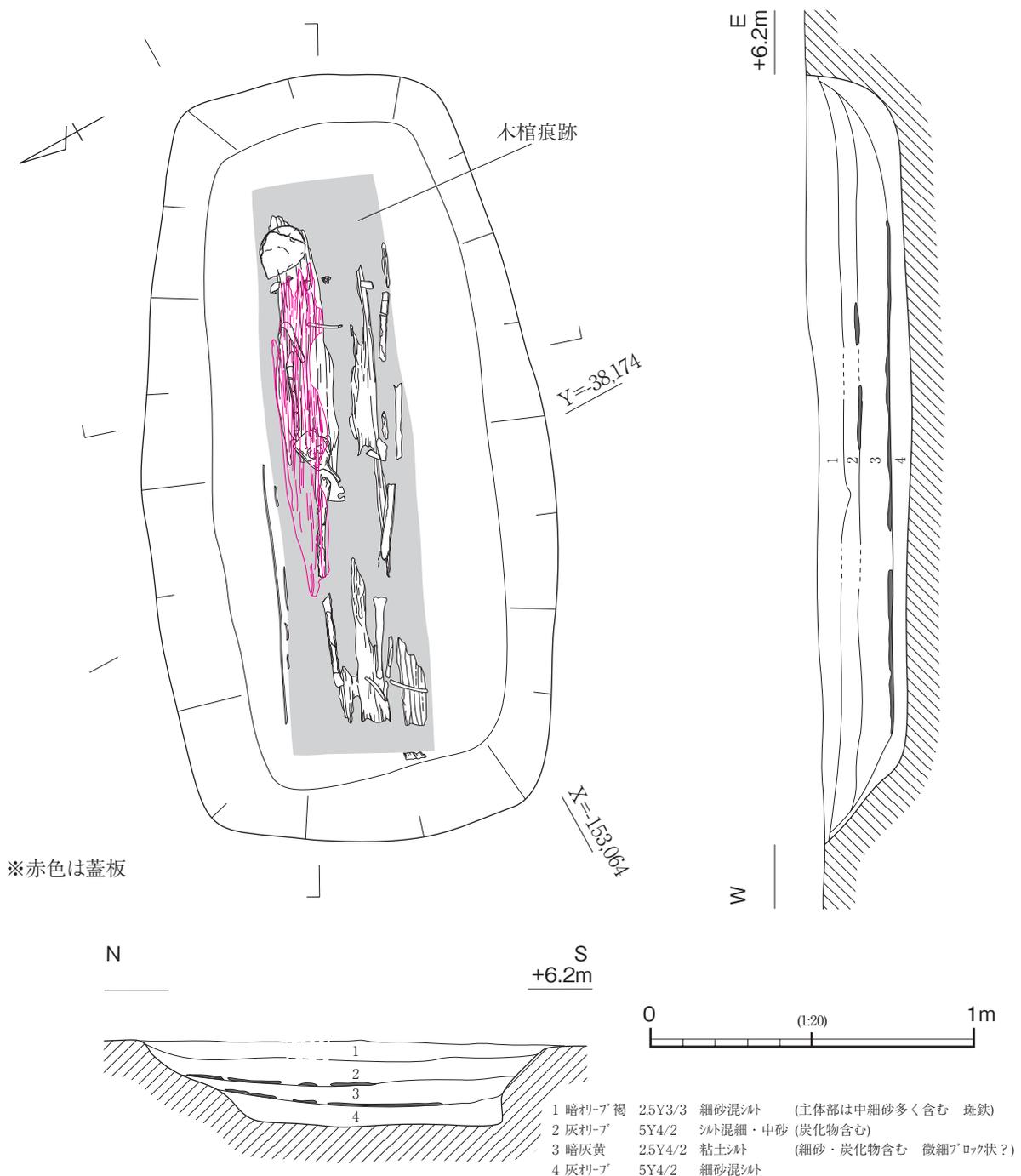


図 324 13号墳 主体部① 平・断面

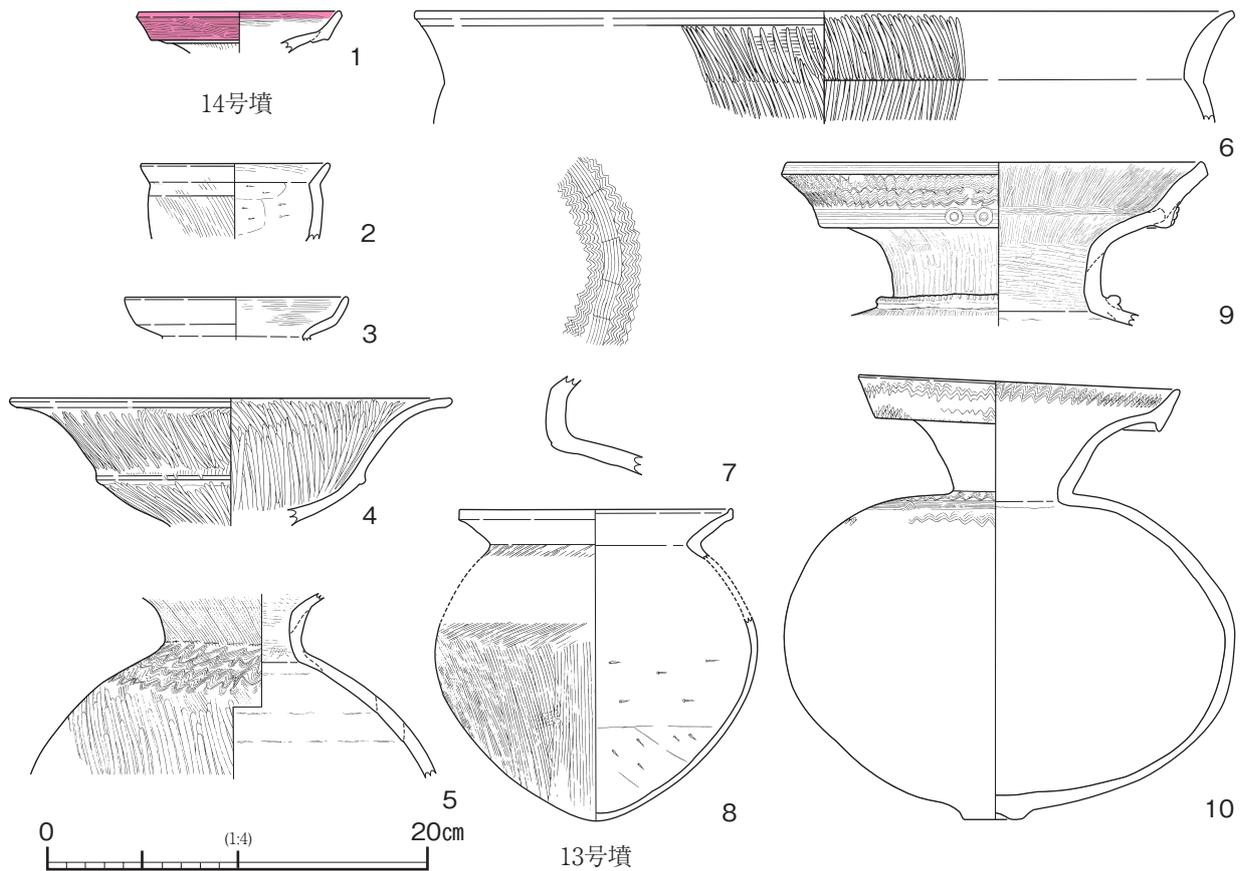


図 325 13号墳・14号墳 出土遺物

し、東西には墳墓が存在しないために空間が存在しており、これとの区別を明確にするためのものかもしれない。

埋土は、すべて墳丘からの崩落土によるものであり、水成堆積物は認められない。埋土上面に土壌化が見られることから、第5-1面までに完全に埋没したことが明らかである。

埋葬施設は、墳丘の中央部において主体部①を検出した(図324、図版110)。墓坑の幅は最大約1.47m、全長約2.4mの隅丸長方形を呈し、西半部がやや幅広である。人骨の出土状態によると西半部は下半身側であることから、

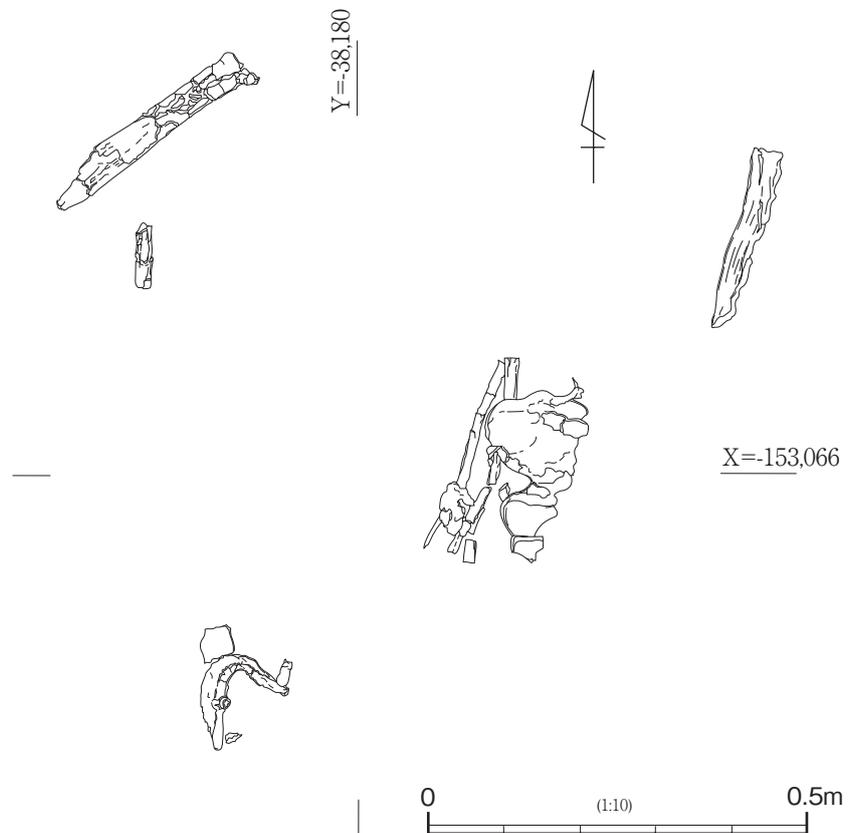


図 326 14号墳 人骨出土状況

通例とは異なる点に、今後注意が必要である。断面は逆台形を呈し、深さ約30cmの中に4層の埋土を確認した。木棺や人骨の出土層位から、棺設置用の整地土、棺内に流入した裏込土、木棺上部の覆土が2層、に区別が可能である。墓坑内部からは木棺の残骸と人骨が出土し、木棺の痕跡から、全長約1.8 m、幅約45cmの組合式の箱形木棺であったと推測する。なお、棺材はスギである。頭位は墳丘の軸にほぼ一致しており、真北から約113° 東に振る。人骨は頭骨・骨盤・大腿骨等が見つかったものの、あまり

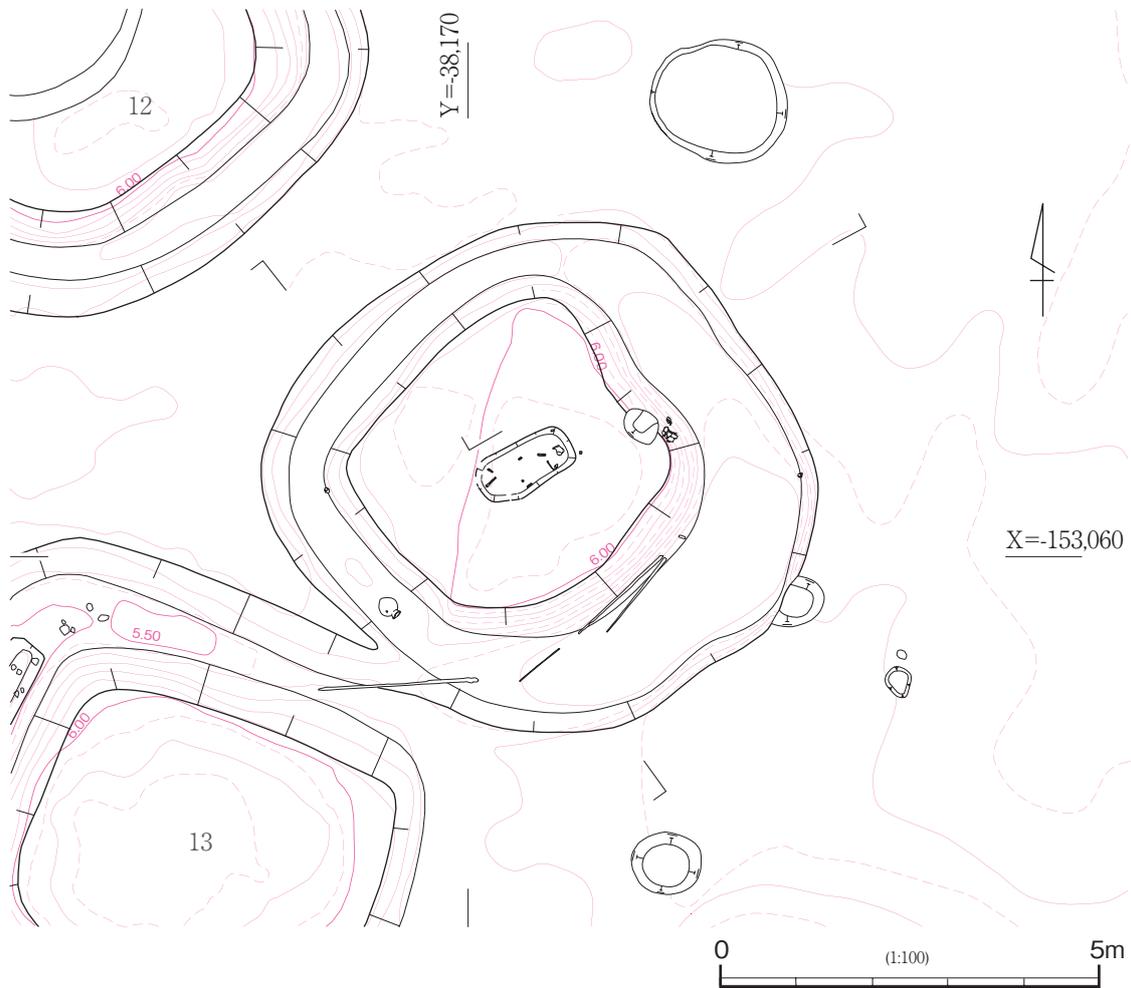
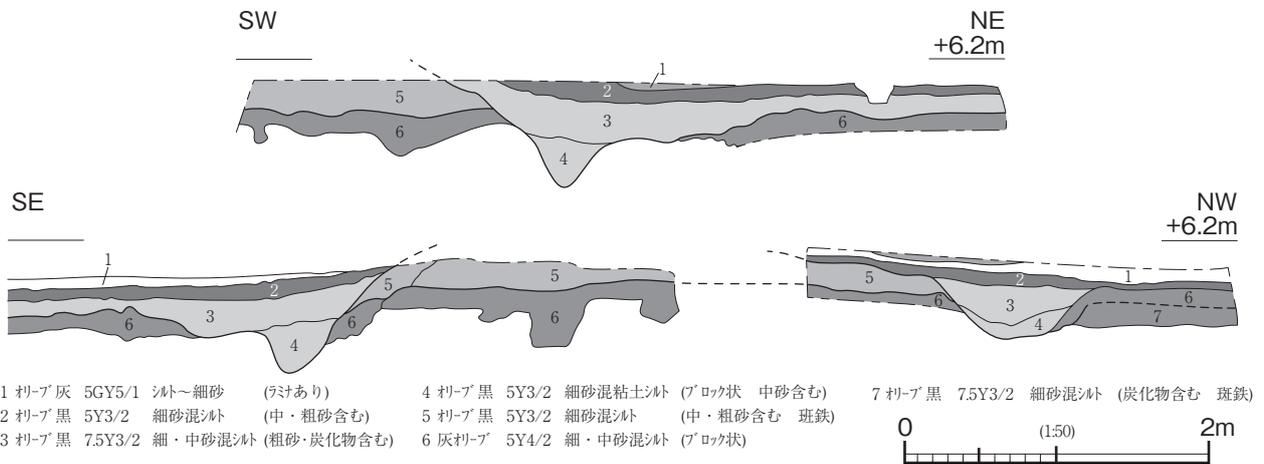


図 327 24号墳 平面



- | | | |
|------------------------------------|------------------------------------|----------------------------------|
| 1 赤-ブ 灰 5GY5/1 シト-細砂 (アケあり) | 4 赤-ブ 黒 5Y3/2 細砂混粘土シト (ブロック状 中砂含む) | 7 赤-ブ 黒 7.5Y3/2 細砂混シト (炭化物含む 斑鉄) |
| 2 赤-ブ 黒 5Y3/2 細砂混シト (中・粗砂含む) | 5 赤-ブ 黒 5Y3/2 細砂混シト (中・粗砂含む 斑鉄) | |
| 3 赤-ブ 黒 7.5Y3/2 細・中砂混シト (粗砂・炭化物含む) | 6 灰-赤-ブ 5Y4/2 細・中砂混シト (ブロック状) | |

図 328 24号墳 断面

遺存状況は良好ではない。他に歯片が多数出土しており、鑑定により被葬者は成人であることが明らかとなった。

遺物は墳丘の頂部と周溝内から出土した。墳頂部の土器は、記録を行う前に誤って取り上げてしまったため、平面に図示できない。写真から、墳丘の北西角と、主体部①頭部付近から出土したものとみられる。北西側の壺は口縁を墳丘外側に向け、明らかに盛土内に埋もれていることから、既知の1号墳と同様、横転した状態で埋納された可能性が高い。主体部上の甕や壺は、口縁を内側に向けた状態で横転したように見受けられる。土器の内容としては、高杯・鉢・壺・甕が挙げられる（図325、図版392・393）。3・10が墳丘北西部、8が主体部上から出土した土器であり、それ以外は周溝の北西部から集中して見つかった。櫛描文による加飾の複合口縁壺が多く認められる。墳丘上の庄内式甕や壺から、当墳墓の築造時期は庄内式期古段階に比定することができる。

14号墳 13号墳の南側に位置する（図322、図版111）。墳墓の大半を現代の攪乱により消失しており、辛うじて北側の周溝と墳丘の立上りを検出したものである。東側が25号墳の周溝により削られるものの、墳丘規模としては、一辺が約7mであったと推測する。図323上段の南側が14号墳の断面であり、2層の墳丘盛土を確認できる。

周溝は、断面上では13号墳のものと区別することが出来なかったものの、平面上では西側に南へと屈曲する異なる溝を検出することができた。残存部分で幅約1.0～1.5m、深さ約30cmを測る。この周溝の北西角から、人骨がまとまって出土した（図326）。掘形等は確認できなかったものの、他の出土例から周溝内埋葬の可能性が高いと判断する。人骨には下顎骨・長骨等が含まれており、骨と共に遺存した大白歯片の鑑定により成人が葬られたことがわかっている。出土遺物は少ないものの、同じ周溝内から口縁部内外面に赤彩のある複合口縁壺片が出土した（図325、図版393）。

24号墳 調査区の中央、 $X = -153,058$ 、 $Y = -38,169$ 付近に位置する（図327、図版108）。南側に13号墳が接する以外、24号墳の周辺には近接する墳墓がないため、空地が広がっている。

墳丘の平面は隅丸方形を呈し、基底面における規模は一辺約3.9mを測る。墳墓の直下には基底面となる第5-2層が明瞭に残存する一方、墳丘盛土としては1層を確認したのみである（図328）。

墳丘の検出と同時に埋葬施設と人骨が出土したことから、上部が削平されていることは明らかである。しかし、残存する墳丘盛土上の一部に土壌化した第5-1層が認められることから、墳丘が削平されたのは墳墓築造からあまり時間が経っていないと推測される。あるいは、通有の墳丘形状ではなく、部分的に土盛りをしたようなものであったのかもしれないが、可能性は低いと考える。

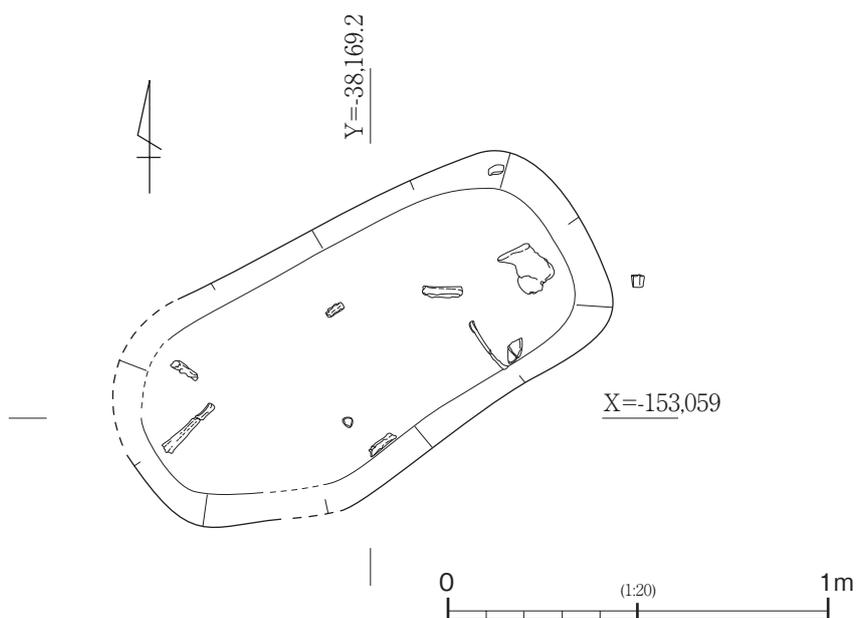


図 329 24号墳 主体部① 平面

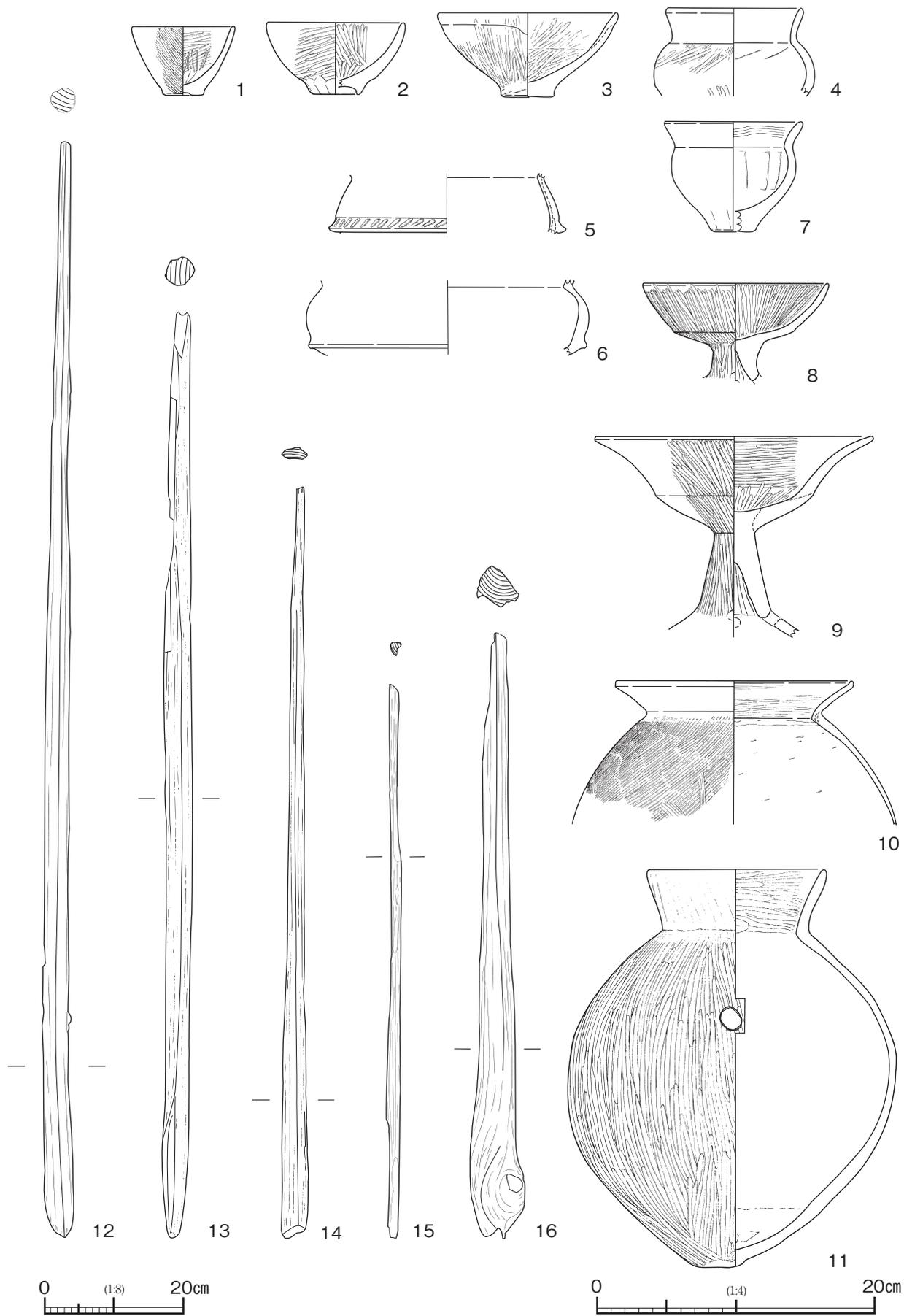


图 330 24号墳 出土遺物

周溝は幅1.0～1.7 m、深さ35～50cmを測り、断面は西側の細い部分がU字形、東側の広い部分がV字形を呈する。周溝内の埋土は2層を確認したが、いずれも墳丘盛土と同質であることから、周溝は墳丘からの崩落土により埋没したものである。13号墳と同様、墳墓の東側は緩やかに下降しており、周囲より低位な地形であったが、墳丘からの崩落土とする土砂は周溝外の低地部分にも堆積が広がっている。その上面は一様に土壌化し、第5-1層と化すことから、前述との関連から、築造後の早い段階に墳丘が削平される状況が発生し、それによる崩落土は周溝を中心とする地形的に低い東側に向かって堆積したとされる。

埋葬施設は、墳丘のほぼ中央において主体部1基を検出した(図329)。墓坑は隅丸長方形を呈し、全長1.85m、幅は東側で約60cm、西側で約70cmを測る。断面図を作成できないほど浅く凹み状の痕跡程度しか残存しておらず、人骨は底面に張り付くよう出土した。頭骨・長骨等がみられるものの、残存状態があまり良好ではないため、詳細は不明である。なお、頭位は北東であり、真北から約61°東に振る。

遺物には壺・甕・高杯・手焙形・ミニチュア・木製品等が含まれるものの、周溝や墳頂部から出土した土器は非常に少ない(図330、図版393～395)。1～9は、墳丘内の盛土および基底面付近から出土した土器である。ミニチュアはいわゆる精製品ではなく、平底鉢・甕である。高杯や手焙形土器と合

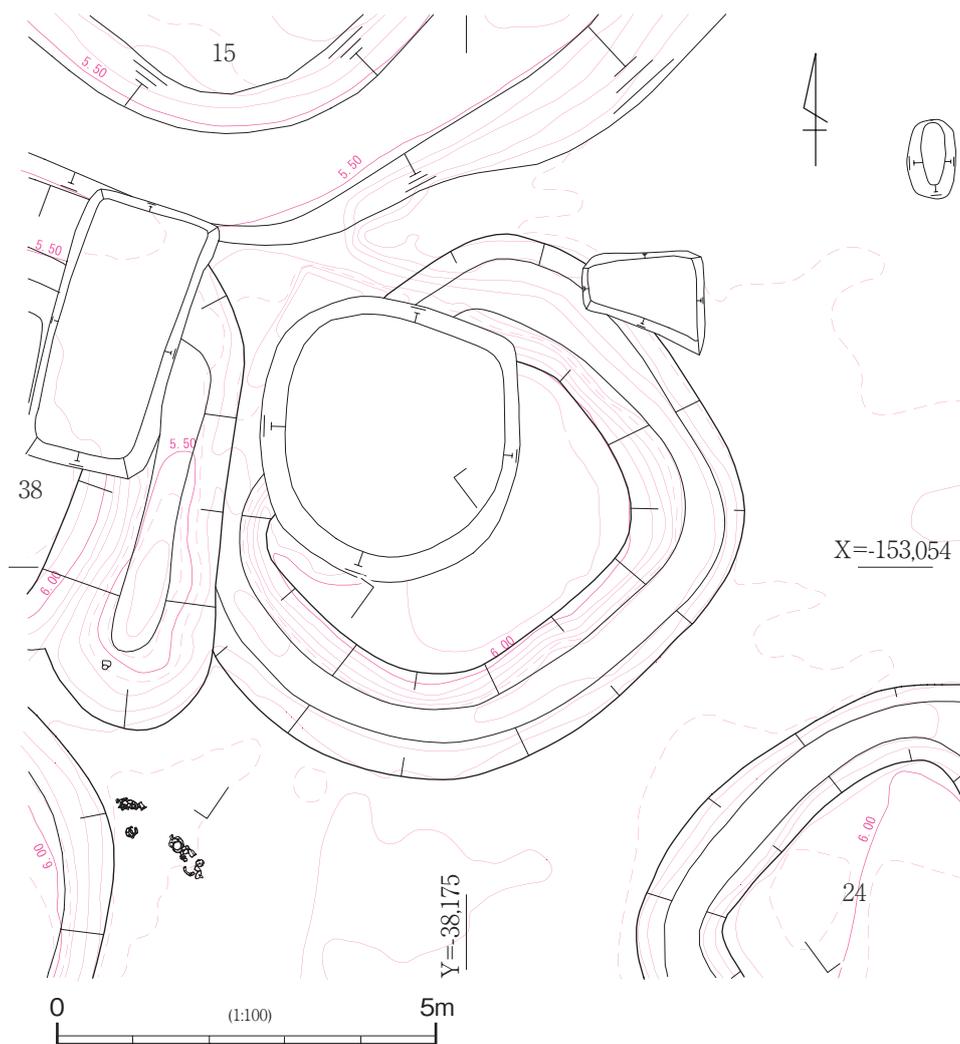


図 331 12号墳 平面

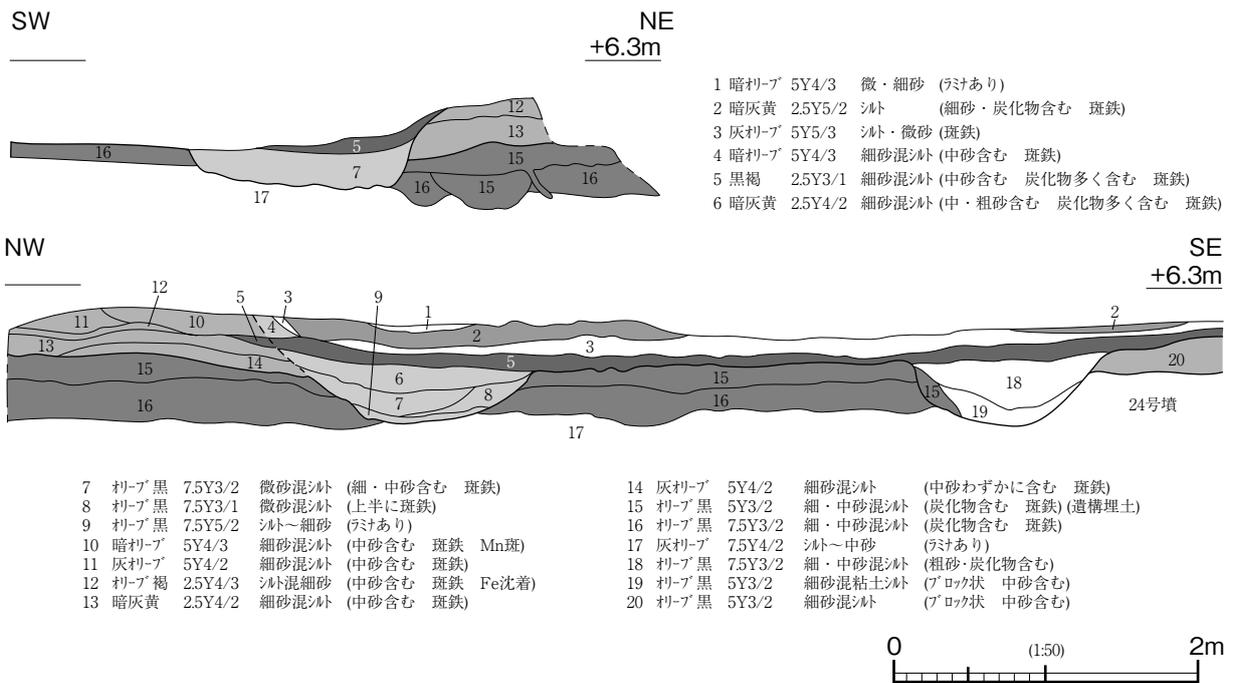


図 332 12号墳 断面

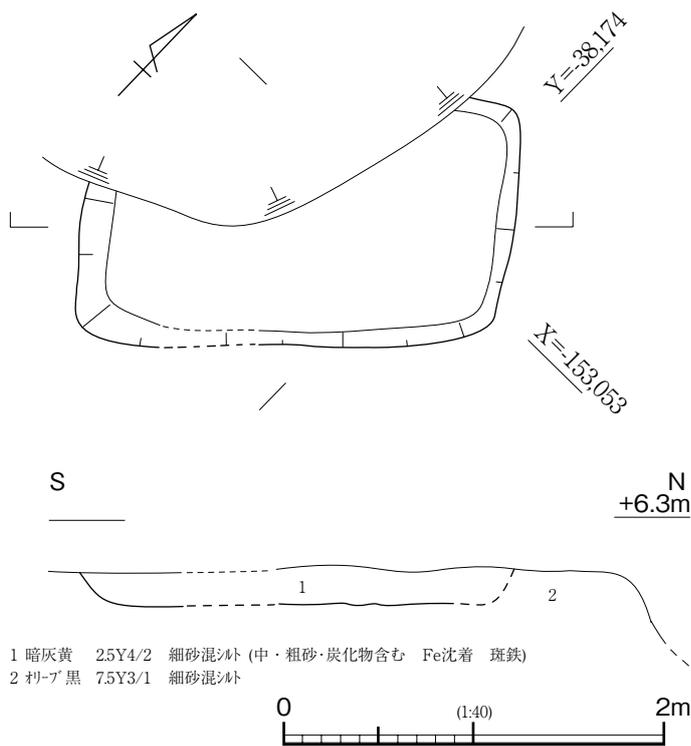


図 333 12号墳 主体部① 平・断面

わせ、弥生時代終末期の所産と考える。一方、10の庄内式甕、11の直口壺が24号墳の周溝から出土した土器である。定型化した甕や平底の鈍化から、庄内式期新段階に比定できる。

この他、周溝の南側を中心に棒状木製品が多数出土した。コウヤマキ・スギ・ヒノキといった棺材と同じ樹種の芯去り材を使用する。直径4cm前後、全長80~160cmを測り、明確な加工痕は認められないものの、片方の先端が細くなっているのが特徴である。関連する資料はみつからないが、葬送に際する儀礼用具であったと推測する。

12号墳 調査区中央よりやや北寄り、X = -153,054、Y = -38,175付近に位置する (図331、図版111)。西側には他の墳墓が隣接するが、一方の東側はやや離れて24号墳がみられるのみであり、位置関係から

は同墳墓を境に異なる小群が形成されているように見える。墳墓の西半が大きく攪乱されるものの、墳丘は長軸約4.7m、短軸4m弱の隅丸方形を呈することがわかった。墳丘内には2層に分かれる第5-2層と、4つに分化する盛土層を確認した (図332)。

なお、層10は第5-1層上にみられることから、後世の墳丘崩落土と考える。西側の一部が不明であるものの、周溝は幅約1.5m、深さ20~30cmで断面形が皿状を呈し、四周を巡ると考えられる。墳丘の

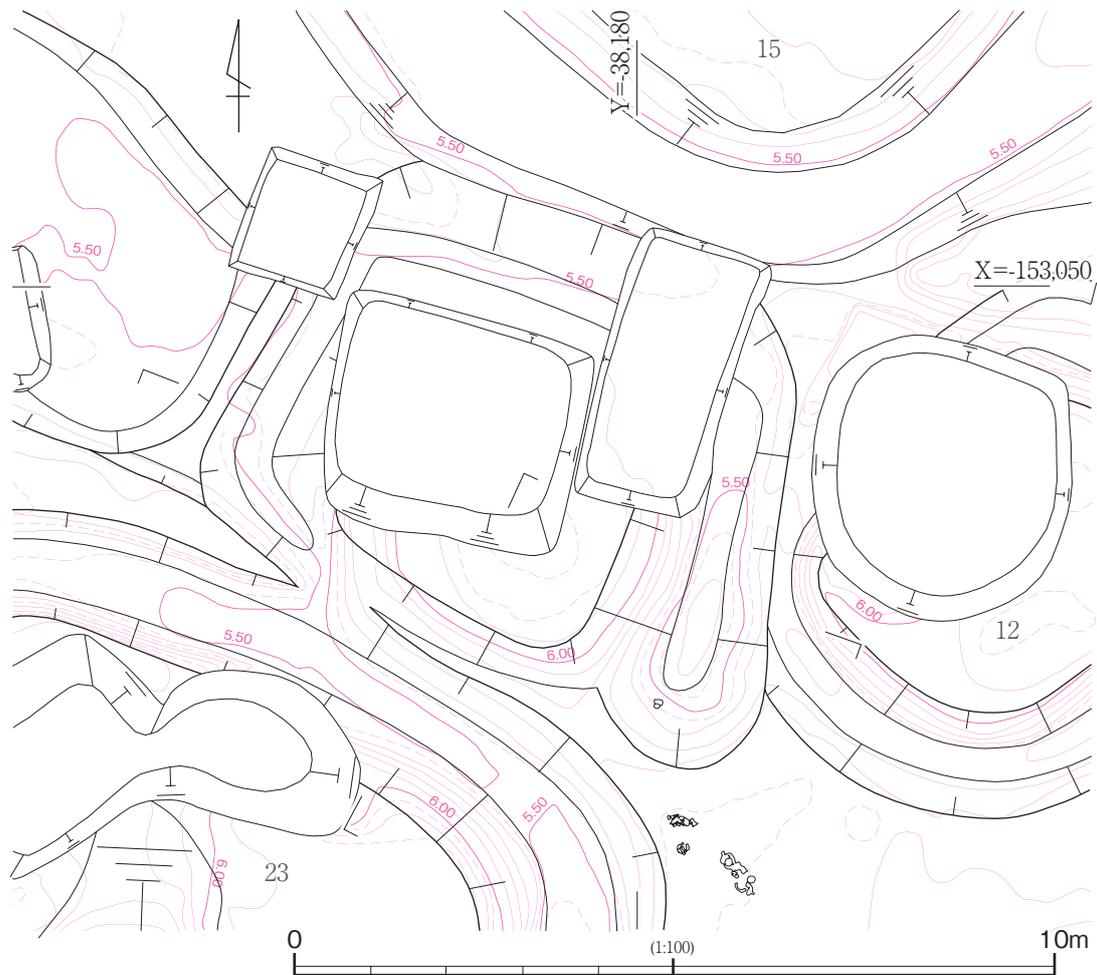


図 334 38号墳 平面

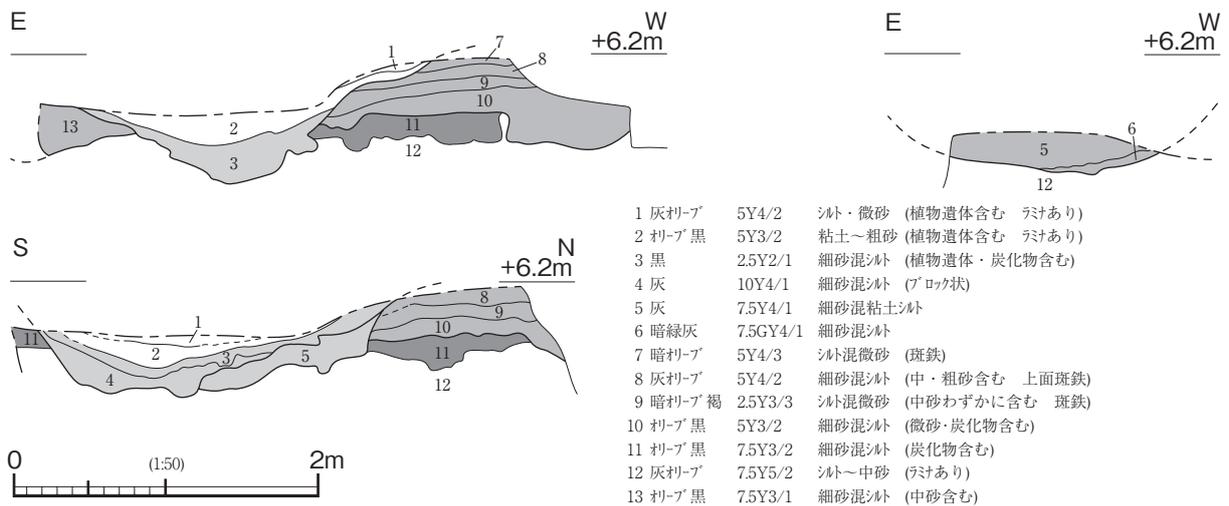


図 335 38号墳 断面

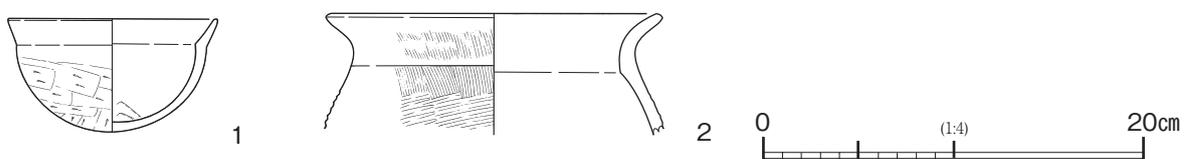


図 336 38号墳 出土遺物

崩落土により埋没しており、埋土の上部は土壌化して第5-1層が形成される。前述の24号墳から連続する断面によると、切り合い関係は不明であるが、埋積状況の酷似する様子がよくわかる。

墳丘のほぼ中央、攪乱の南東側において浅い凹み状に残る主体部①を検出した(図333)。全体の3分の1を失っており、内部からは何もみつからなかった。残存する墓坑は全長約2.3m、幅約1.35mを測る。

38号墳 X = -153,052、Y = -38,182、12号墳の西側に位置する(図334、図版114)。墳墓の大半を現代の攪乱により失う。墳丘は周溝の形状から一辺約4mの隅丸方形であったと考えられる。墳丘内には、基盤層と盛土層を確認することができる(図335)。残存する墳丘高は約35cmであり、4層の盛土を検出した。

周溝は幅約1.5m、深さ約40cmを測り、断面形が挿鉢状を呈する。埋土は下半に墳丘崩落土が堆積するものの、第5-1層相当は確認できず、上半には氾濫による土砂が堆積する。南側周溝は23号墳の周溝により平面的には検出できなかったものの、断面では墳丘崩落土を埋土とする凹みを確認した。東側周溝の南端は縁が切れているが、周溝検出時に氾濫堆積物を基準としたために周溝内の崩落土を土壌化

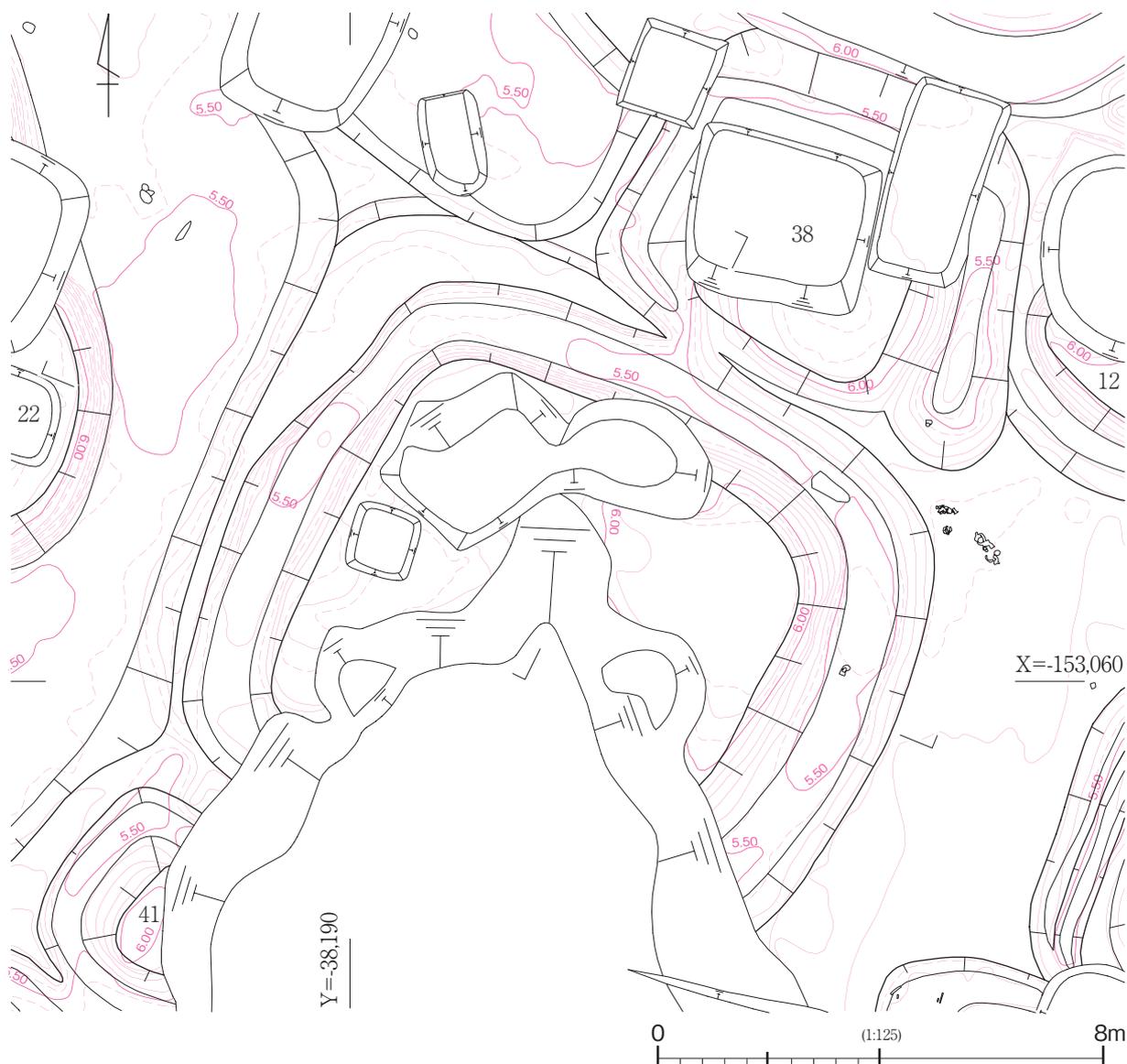


図 337 23号墳 平面

層と誤認した可能性がある。

埋葬施設は残念ながら確認できなかった。しかし、墳丘の断面において、東西方向では攪乱の東側、南北方向では攪乱の南側に、盛土層を埋土とする第5-2層を掘り込む凹みが認められる(図335)。平面では何もみつからなかったが、位置的には主体部の掘形南端であった可能性が高いと考える。

遺物としては、南側墳丘の崩落土から出土した小形丸底鉢と、周溝内からみつかった弥生形甕がある(図336、図版394・395)。これらの遺物から、築造時期は庄内式期新段階の範疇であったと考えられる。38号墳は周溝の切り合い関係から、12号墳に後出し、23・15号墳より先行することが明らかであり、墳墓群における築造時期の比定にとって貴重な資料といえよう。

23号墳 調査区のほぼ中央、X = -153,060、Y = -38,187に位置する(図337、図版115)。墳墓の南側を中心に古代の03019池により大きく攪乱されるものの、全体的な形状を確認することは可能であった。墳丘の平面は隅丸方形を呈し、基底面における規模は一辺約11m、高さ約40cmを測る。墳丘下面には基盤層である第5-2層を検出し、その上部に4層の盛土を確認した(図338)。これらの盛土の土質に差異はほとんどみられない。基盤層の第5-2層については、西側周溝肩では2層を確認し、東側でも墳丘内より標高の高い状況を看取できることから、盛土とする内の下層部分が基盤層であった可能性も考えられる。周溝は幅1.3~1.9m、深さ約30cmを測り、断面が浅い鉢状を呈する。周溝底面は第5-2層内に止まっており、他の同規模の墳墓に比して深度が浅い。

墳丘築造には周溝を掘削した排土を利用すると考えるが、23号墳の場合、盛土と周溝の均衡が取れていない。この点からも、基盤層の設定を下位にし過ぎた可能性が考えられる。周溝の埋土は3つに大別することが可能であり、下層が墳丘からの崩落土、中層が第5-1層に相当する土壌化層、上層が氾濫堆積物となる。

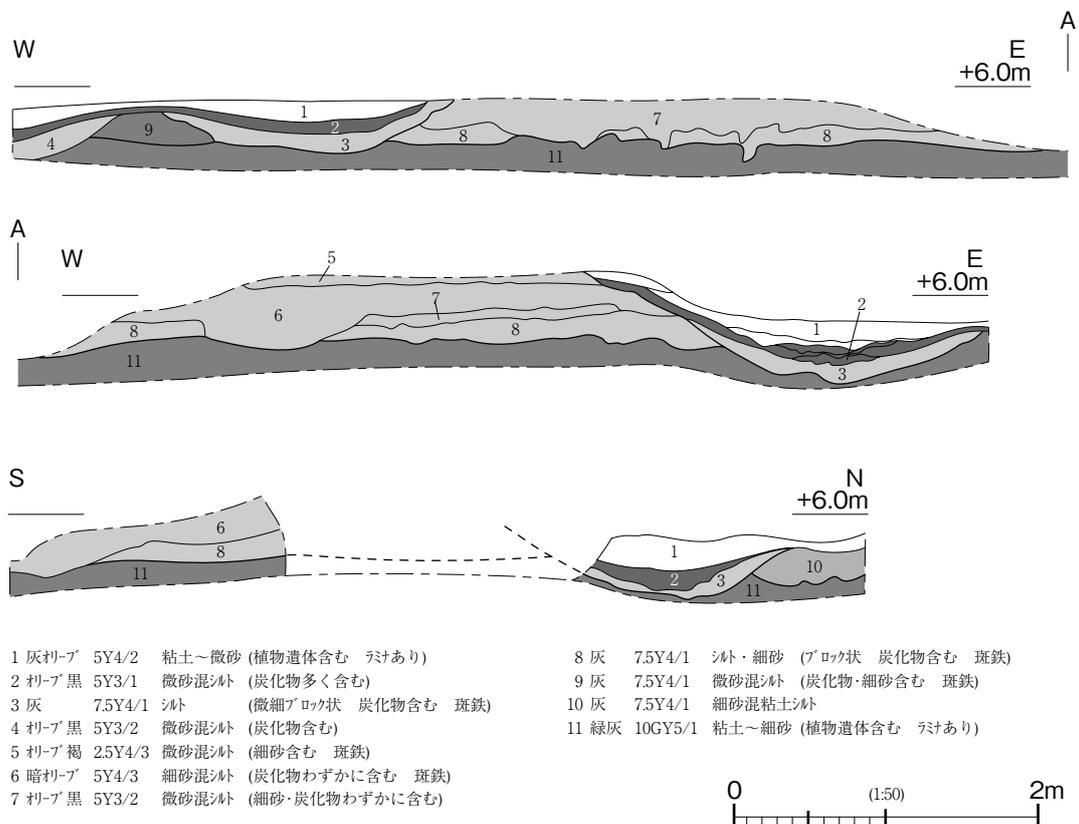


図 338 23号墳 断面

周溝は墳丘崩落土によって埋没することはなかったようであり、浅くはなるものの、残った凹み部分に第4層の氾濫による土砂が堆積する。なお、断面の一部に、分層線を記すものの層名を分けていない箇所があるが、同じ土質（分類）の中での細分とを考えていただきたい。

墳丘内外を問わず、埋葬施設は確認できなかった。墳丘の東西断面において層6を埋土とする凹みが認められるものの、調査では平面の確認に至らなかった。この他、03019池による攪乱の東西法面の途中に、平坦部を検出した。西側は墳丘の南寄りに位置するが、東側はほぼ中央にあり、平坦面の高さが基盤層付近であることから、埋葬施設の掘形の一部ではないかと推測する。両者の間隔は7mに達することから、同一の掘形の両端であったとは考え難い。

出土した遺物は墳墓の東側に集中しており、西側からはほとんど見つかっていない。周溝から出土した土器は、南東部分の底面に点在してみつかったものである。最も土器が集中する地点は北東の周溝外であり、旧地表面上に土器が正置された様子が看取される（図版115-4）。ただし、当地点は、前述した12・38号墳の周溝が接する交点であり、いずれの墳墓にとっても同じ周溝外肩部に相当することか

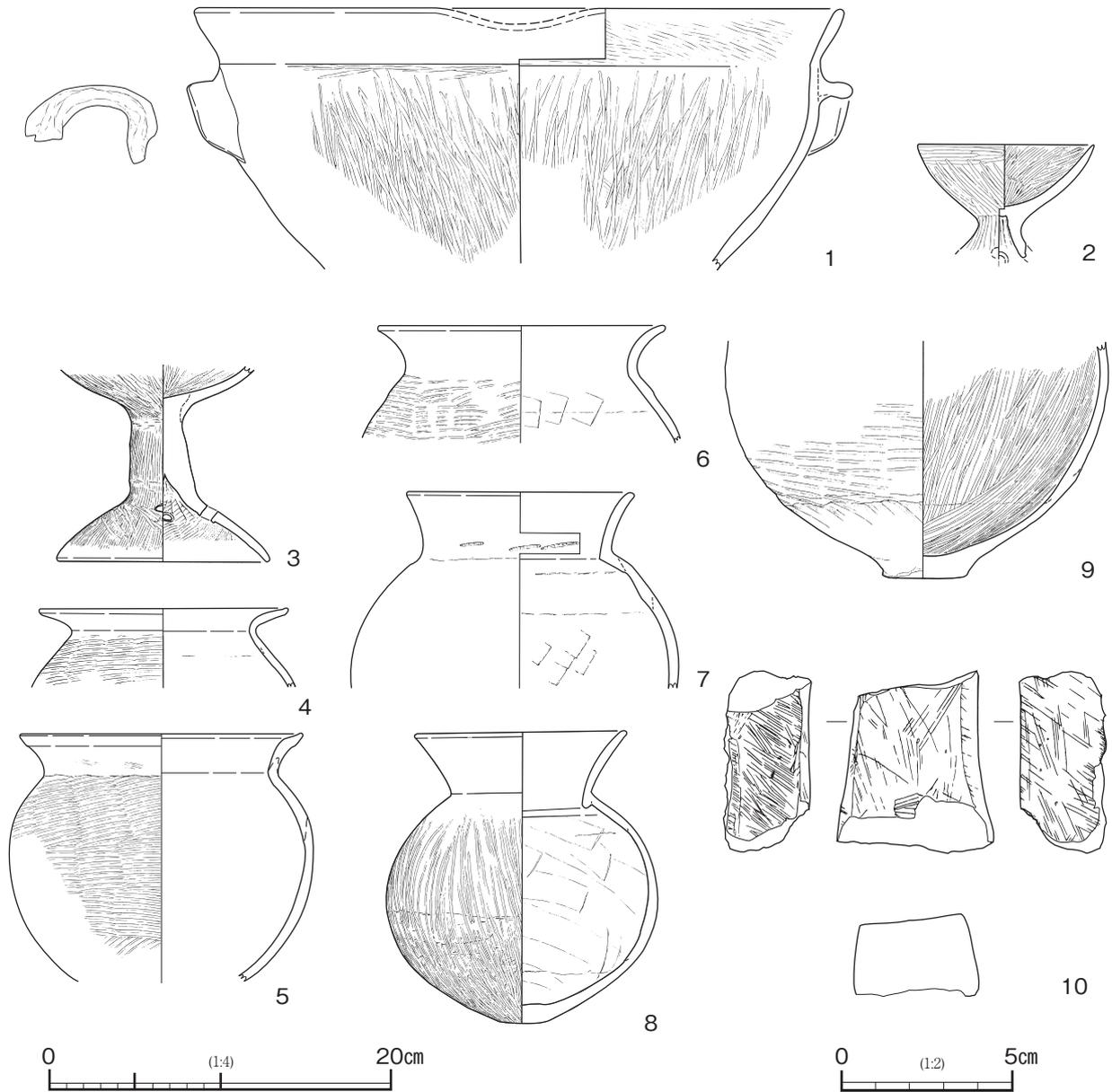


図 339 23号墳 出土遺物

ら、必ずしも23号墳に帰属するものではないかもしれない。

遺物の内容としては、高杯・鉢・甕・壺といった土器の他、石製品がみられる（図339、図版396・397）。1・8～10が周溝の南東部、2～7が北東の周溝外から出土した遺物である。1は両横に把手の付く大型片口鉢である。3の高杯では、脚部外面にハケ目調整が顕著に残る。7は内外面ともナデ調整による壺である。頸部の3箇所刺突文を施す。8は小型の直口壺であり、わずかに平底の傾向が残っている。9は内面に丁寧なミガキ調整がみられる壺であるが、平底が明瞭に残る。10は流紋岩製の砥石である。上下は欠損する。遺物量が少ないため、単純に比較はできないものの、周溝内と北東周溝外では若干様相が異なるように思われる。

周溝内から出土した直口壺は、管見では庄内式期新段階以降に現れると思うが、一方、周溝外の土器は総じて庄内式期古段階に比定が可能であり、やや時期が遡るものと考えられる。周辺の墳墓との切り合い関係から推察すると、23号墳としては周溝内の土器に拠るところが妥当であり、築造時期は庄内式期新段階と推測する。

15号墳 調査区中央の北寄り、 $X = -153,040$ 、 $Y = -38,178$ に位置する（図340、図版112・113）。15号墳は、当初に北半部分の調査を先行して行ったため、墳丘に高低差が生じてしまった。その後、調査区を拡張して全体的な調査を開始したものの、断面位置等が不連続なものとなっている。南側には38・12号墳が隣接するものの、それ以外の東西では墳墓は認められず、北側は調査区外のため不明である。

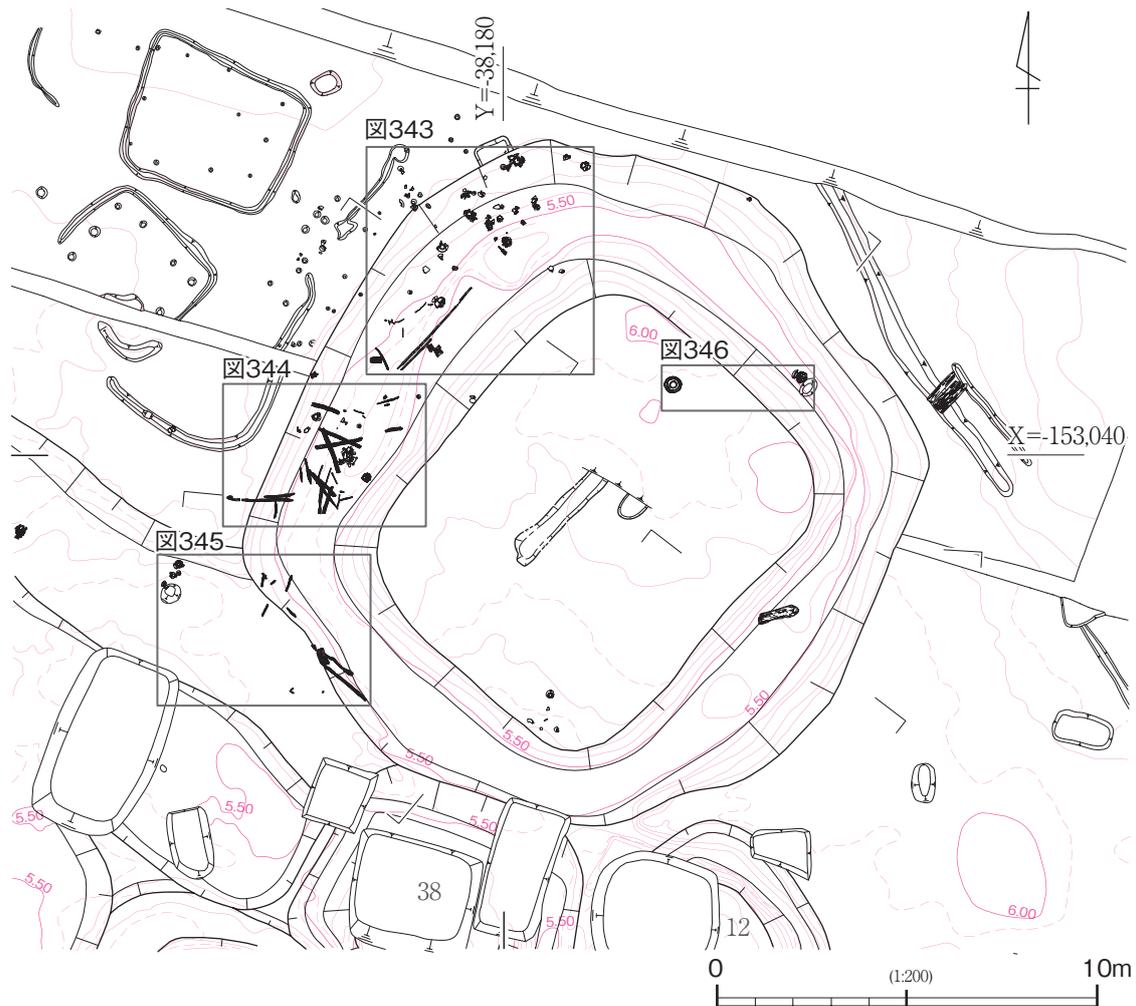


図 340 15号墳 平面

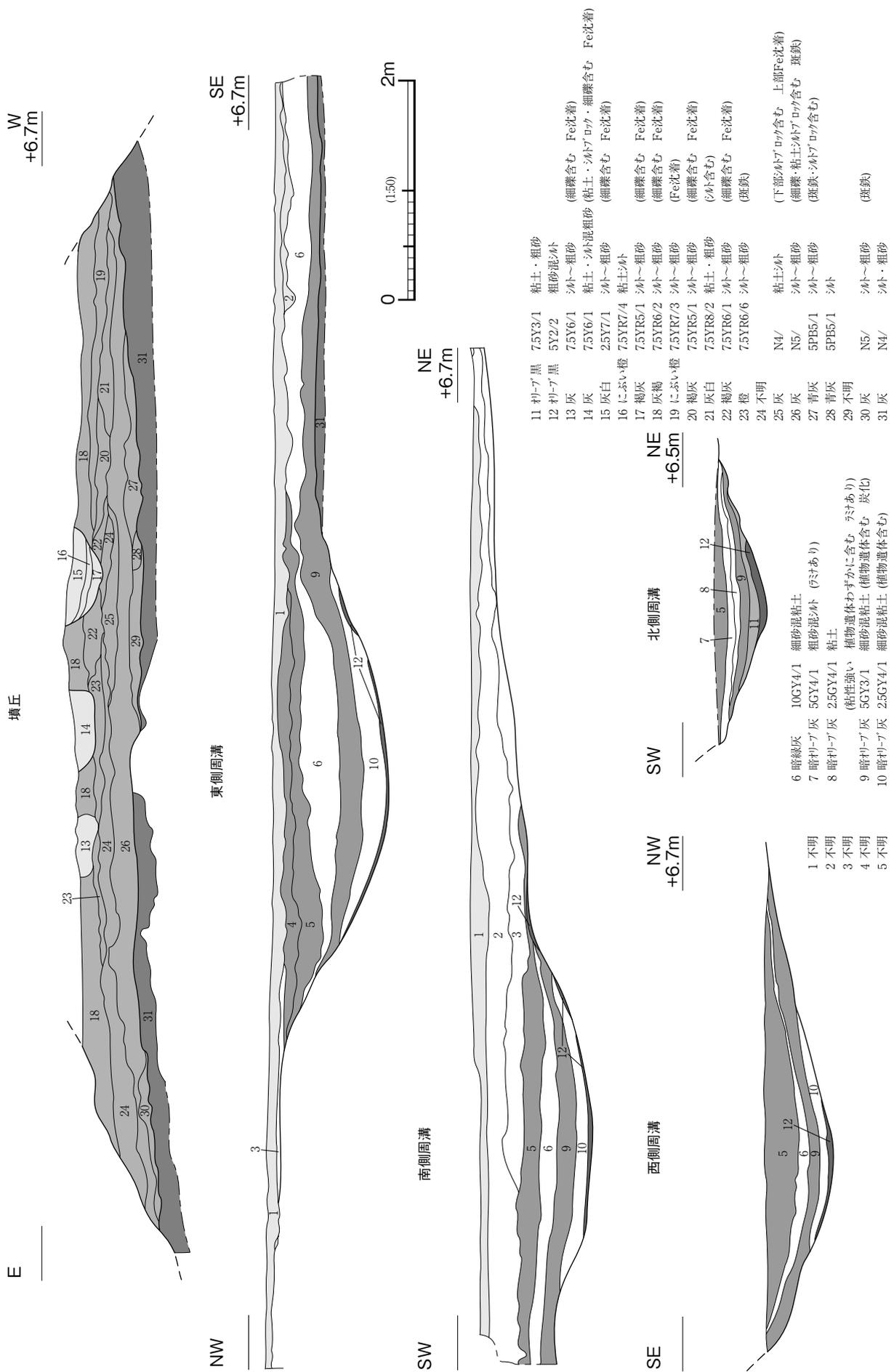


図 341 15号墳 断面

なお、調査時期が異なるため、南側に位置する墳墓との切り合い関係は不明である。図340の周辺平面図では、15号墳の西側に、付図では省略した第5-1(2)面の竪穴建物を図示している。これは後述する出土遺物との関連から故意に表示したものであり、本遺構面では攪乱として捉えられる。

墳墓の平面は均整の取れた隅丸方形を呈し、基底面における墳丘規模は長軸約12m、短軸約10m、残存する墳丘高は最大で約70cmを測る。墳丘の上部は後世の耕作に伴う攪拌のために削平されており、墳丘の検出とほぼ同時に埋葬施設の輪郭が露頭する。墳丘の下面では基底面となる明瞭な第5-2層を検出した(図341)。墳丘断面によると、15号墳における基底面の標高は、東側がT.P.+5.65m、西側がT.P.+6.05mとかなり傾斜していたことがわかる。

墳丘内には13層に細分の可能な盛土を確認したが、墳丘の東側は厚く土を積み上げ、相対的に西側へ向かって収斂する状況が看取され、地形に合わせて盛土の成されたことが明らかとなった。墳丘の東側では盛土の単位が小さくなっているのも、西側に対して高くなり過ぎないように調節しながら盛土を行った結果と推察される。15号墳断面上において、一部に土質の不明なものが存在しており、記録は欠落するものの、写真や周辺の堆積状況から相当する基本層序に合わせた塗り分けを行っている。周溝は、幅2~4mと場所によって広狭の差が顕著であり、平面的な形状が変化に富んでいる。断面形は弧を描く鉢状を呈し、深さ50~60cmを測る。埋土には墳丘からの崩落土がほとんど認められず、周溝底面に第5-1層に相当する植物遺体・土壌化層を検出した。また、その上層には第4層の自然堆積土砂はわずかに堆積しておらず、周溝埋土の内に複数の土壌化層を確認した。このことから、本墳墓の周辺には周

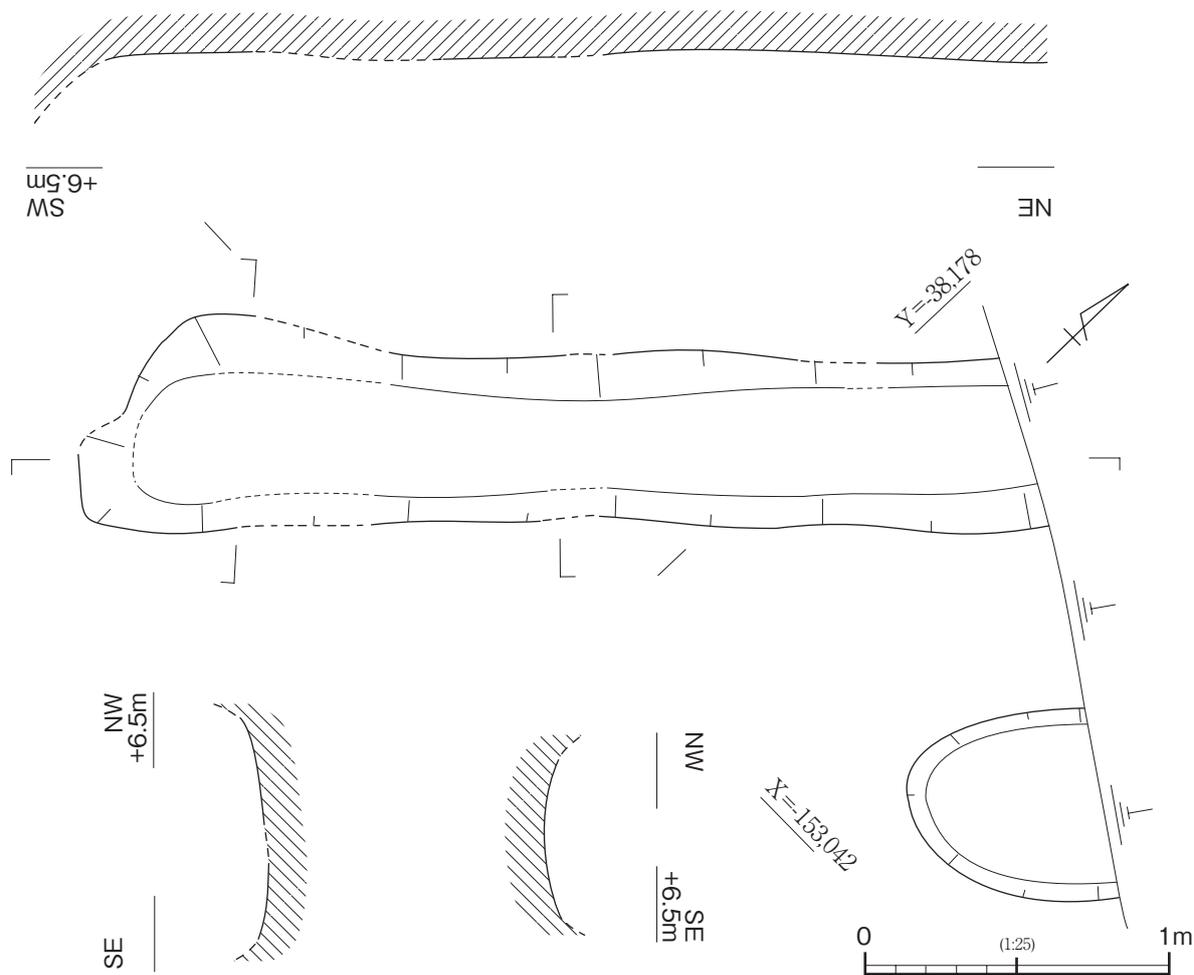


図 342 15号墳 主体部① 平・断面

溝を埋没させるほどの土砂は到達しなかったことがわかる。周溝が完全に埋没するのは第4-1面であるが、第4-2面ではすでに外縁の段差に高まりを設けており、周辺地の再利用を行っていた可能性がある。

埋葬施設は墳丘の中央に1基を検出した(図342)。上部を著しく削平されており、残存部分の長さ約3.1m、幅55~80cm、深さ約30cmの溝状を呈する。この東側に長さ約65cm、幅約65cm、深さ約15cmの土坑状の凹みを検出するものの、詳細が不明のため、上記と合わせ、1基の主体部①として報告する。検出した溝状の部分は断面形が浅い弧状を呈し、その形状や規模から、墓坑ではなく棺床の可能性が高いと考える。図341の墳丘断面によると、検出した凹みの周辺に掘形のようなものは確認されない。本来の墳丘高が残存の倍以上であれば別であるが、検出状況からは無墓坑であったと推測する。なお、これらの凹み部分からは遺骸や遺物は出土しなかった。

遺物は墳丘上面および周溝内から大量に出土した。周溝から出土した遺物の大半は西側に集中してみられる。墳墓の周溝から出土する遺物については、埋土毎に正確に分層発掘し、詳細な記録を残してい

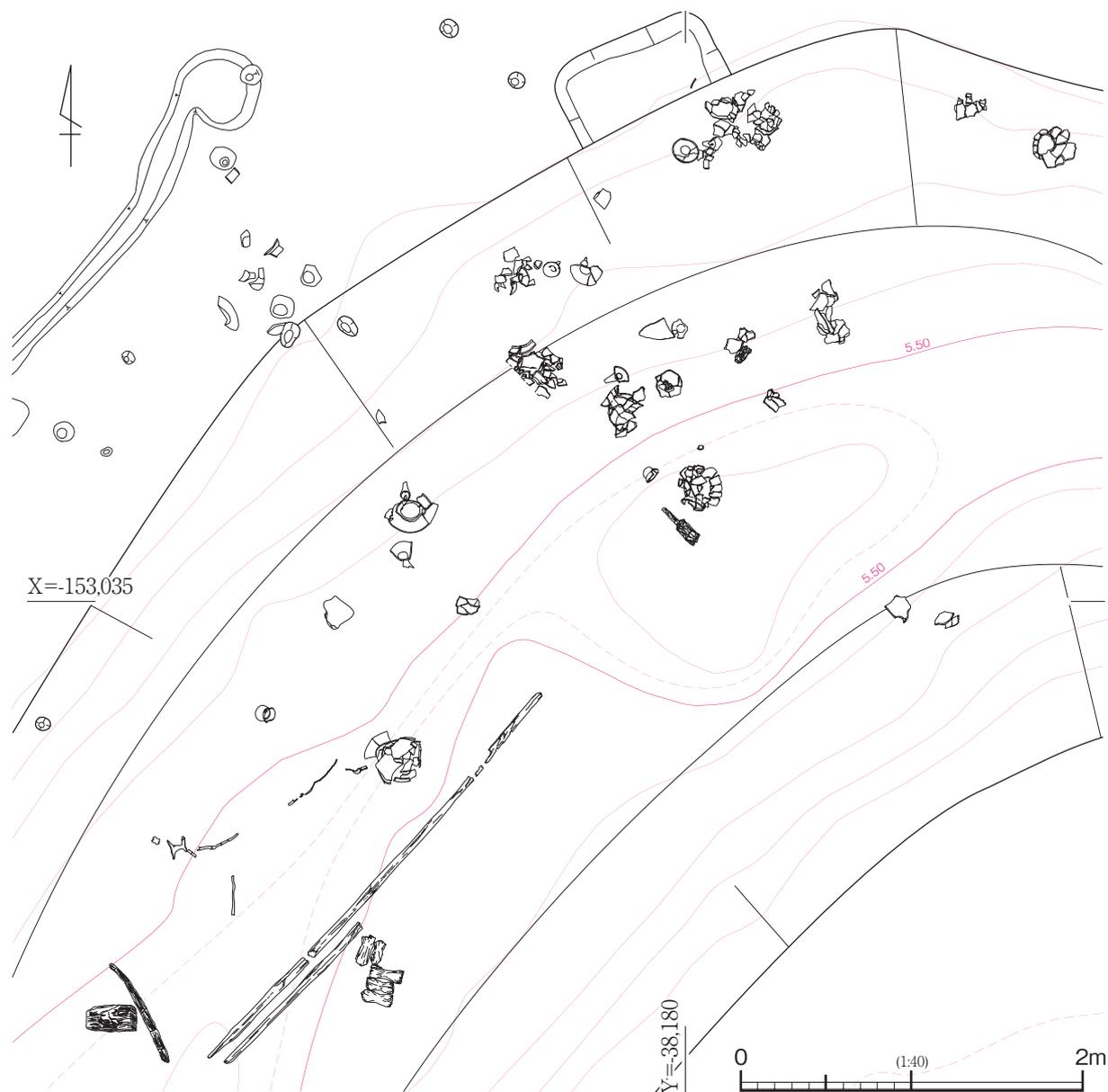


図 343 15号墳 遺物出土状況 (1)

たとしても、葬送時に周溝内へ投棄されたもの以外に、墳丘からの転落や後世の廃棄遺物が混入する可能性があり、厳密的にはそれらを区別することは非常に困難である。15号墳の出土遺物はその典型的な例であり、墳墓の築造後に、西側に隣接して作られた竪穴建物に関連する遺物が混入したことは明らかである。問題は、出土遺物内での分類の可能性を意識しても、それを検証する情報がないことであり、やはり、可能な限り正確で詳細な記録の必要性を思い知ることとなった。

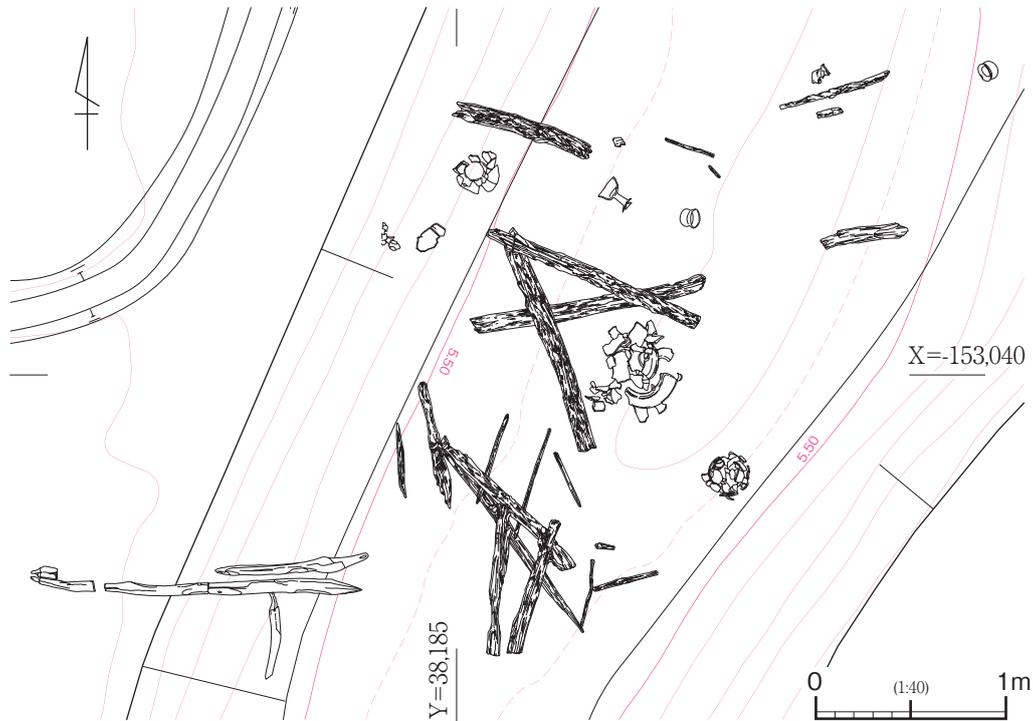


図 344 15号墳 遺物出土状況 (2)

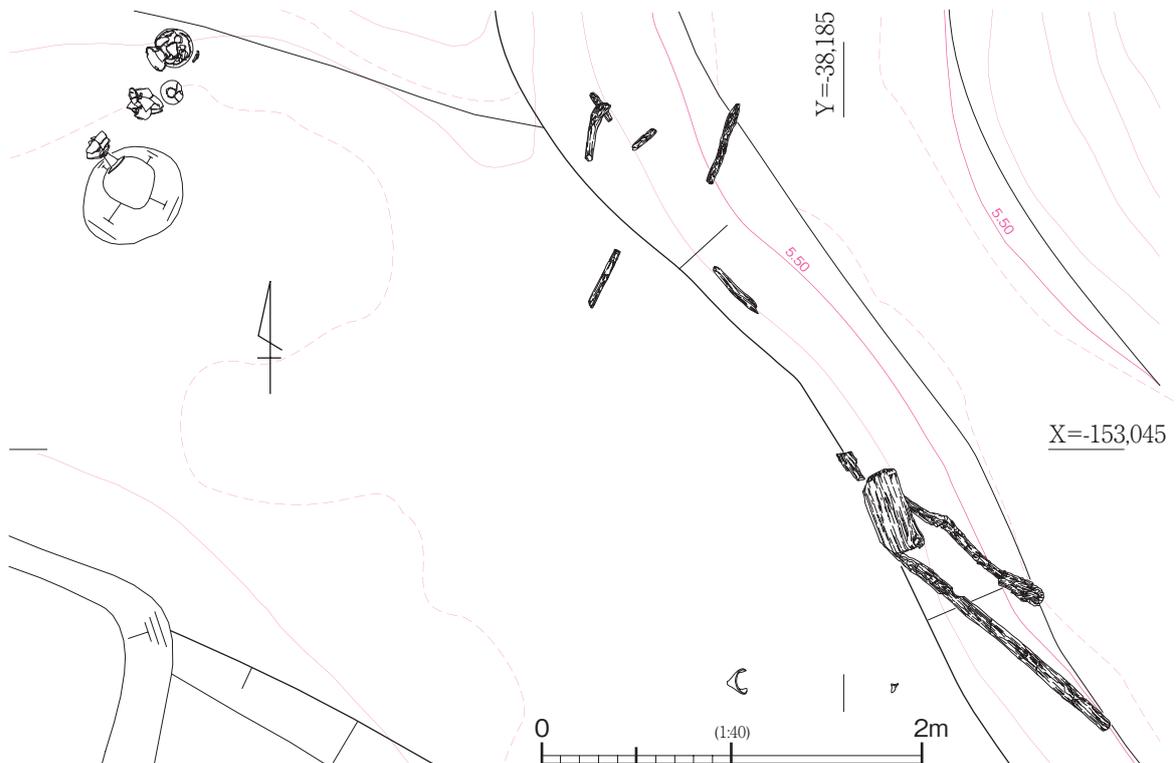


図 345 15号墳 遺物出土状況 (3)

西側周溝の出土遺物に関しては状況図が残されている（図343～346）。出土地点と遺物との対照が不明ではあるが、これによると、周溝内とはいっても外側の法面に集中することがわかる。土器は北側周溝を中心とする外側の斜面に張り付くように出土する（図343、図版112-4・5、同113-6）。いずれの土器も細かく破砕した状態でみつかった。一方、周溝の中央付近や墳丘側の斜面から出土する土器は、点数は少ないものの、ほぼ元の形状を保ったままでみつかる例が多い（図版112-2・3）。この他、西側周溝では南側を中心に木質遺物が多数出土した（図344・345、図版113-4・5・7）。幅・径が10cm程度、長さ1m以上のものが多く含まれており、中には全長が3mに達する材も出土している。ほとんどの遺物に明瞭な加工痕が見当たらないことから、資料として一部のみを持ち帰った。

製品として認識される遺物の場合、特に出土地点がまとまっているわけではなく、周溝内に点在するのが特徴である。一方、用途不明の木材は、図344のように集中して出土する状況が看取される。しかし、それらは、大小の木質遺物が混在しながらも決まった方向性にみられないことから、水勢に流されたものではないと考える。木質遺物の出土配置には不自然なものが感じられる点では、既知の久宝寺1号墳の墳丘北側斜面から出土した木質遺物群に類似する。1号墳では葬送儀礼に伴って建てられた木製の壇状施設等ではないかという推測がなされたものの、今回の調査では、これを積極的に立証できるようなものは残念ながらみつからなかった。一方では、これらの木質遺物が土器と同様、西側に位置する第5-1（2）面の竪穴建物に関連する遺物であった可能性も考えられる。竪穴建物については、土器以外に構造材もみつかっていないことから、廃絶に際しては何らかの方法により片付けられたことは間違いない。また、出土した木質遺物の多くは特に加工された形跡がみられなかった点も、建物の構造材としては自然なことである。樹種鑑定や年代測定等、他の方法を含めた検証を行えるよう対処しなかったことが残念である。図345のうちの木製品は15号墳の周溝外縁から出土したものであるが、西側の土器は、南西周溝外に位置する西へとのびる段状平坦面から出土した遺物である（図340）。この平坦面は、22号墳の北側に配する05309落込に向かって段状に下る幅約2.5m、長さ約20mの遺構であるが、性格については不明である。

落込については22号墳にて後述するが、図示した以外には遺構や遺物の出土がみられないことから、構造物を伴うような遺構ではないと考えられる。ただし、出土した遺物はいずれも完形品が圧砕された状態であり、廃棄されたものではないと思われる。墳墓の築造や葬送に伴う祭祀に関係する可能性があり、やや15号墳とは離れた位置にあるものの、紹介を行っておく。

墳丘の北東部から周溝にかけて出土した遺物が図346である。周溝内から出土した二重口縁壺は、完形のまま墳丘から転落した後に壊れたものと思われる。墳丘上にみつかった遺物は、口径約40cmと大型の加飾複合口縁壺の口縁部である。墳丘盛土内において逆様の状態で出土し、頸部以下の破片が周辺か

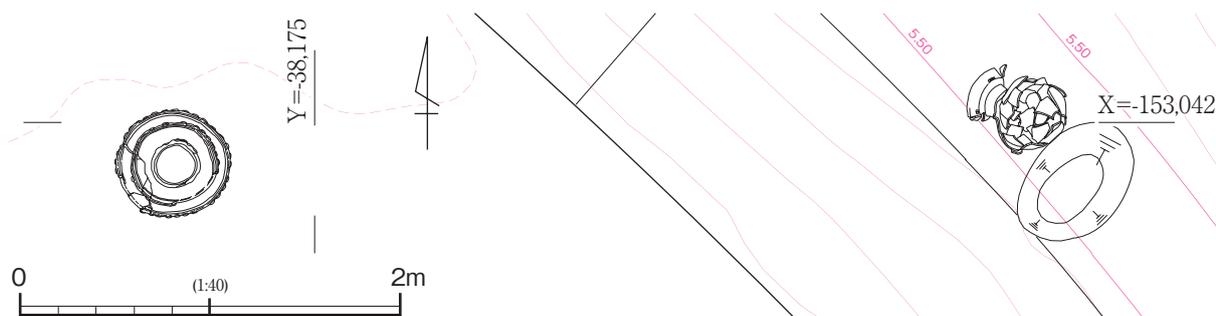


図 346 15号墳 遺物出土状況（4）

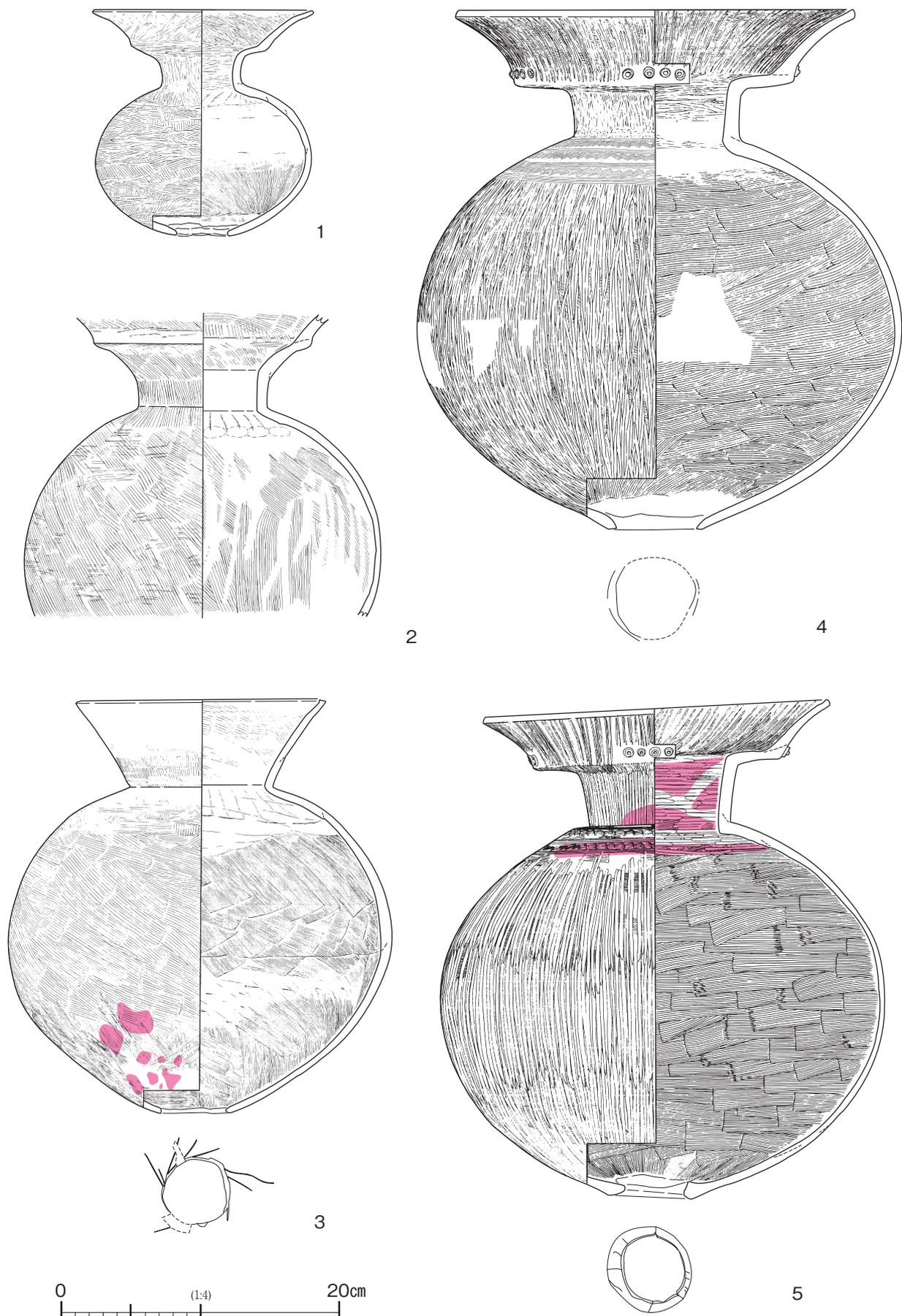


图 347 15号填 出土遗物 (1)

らまったくみつからなかった。遺物自体に他の土器との型式的な不整合はみられないものの、出土状況や残存状態に疑問点が多く、判断に迷う資料である。可能性があるものとしては、土坑墓等の底面に置かれていたものの上部が削平されてそれだけが残ったか、本来は完形であった壺が逆様に転倒し、その部分の埋積が進んだある段階に体部だけを破壊して持ち去られたか等である。いずれも実証方法のない

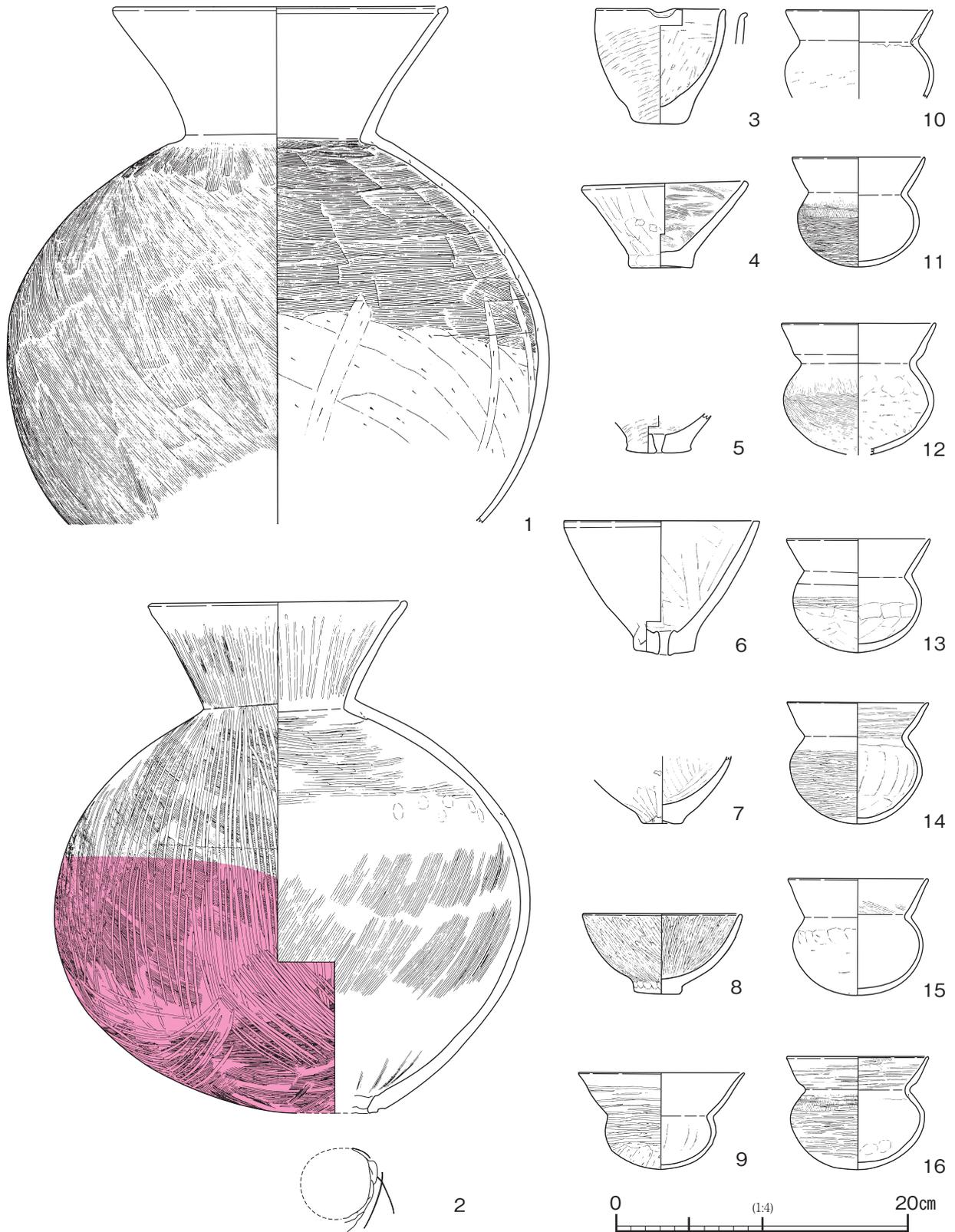


図 348 15号墳 出土遺物 (2)

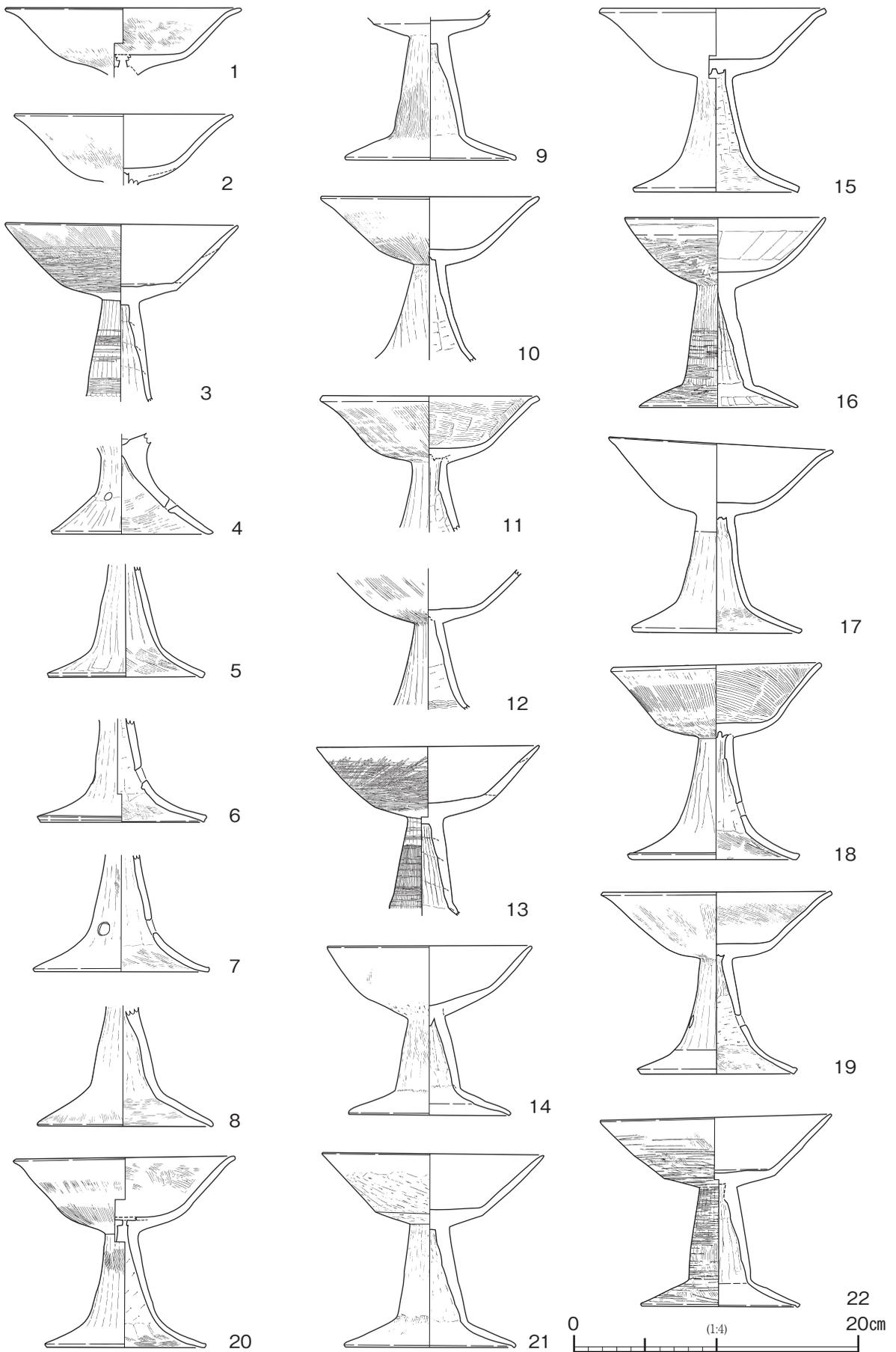


图 349 15号墳 出土遺物 (3)

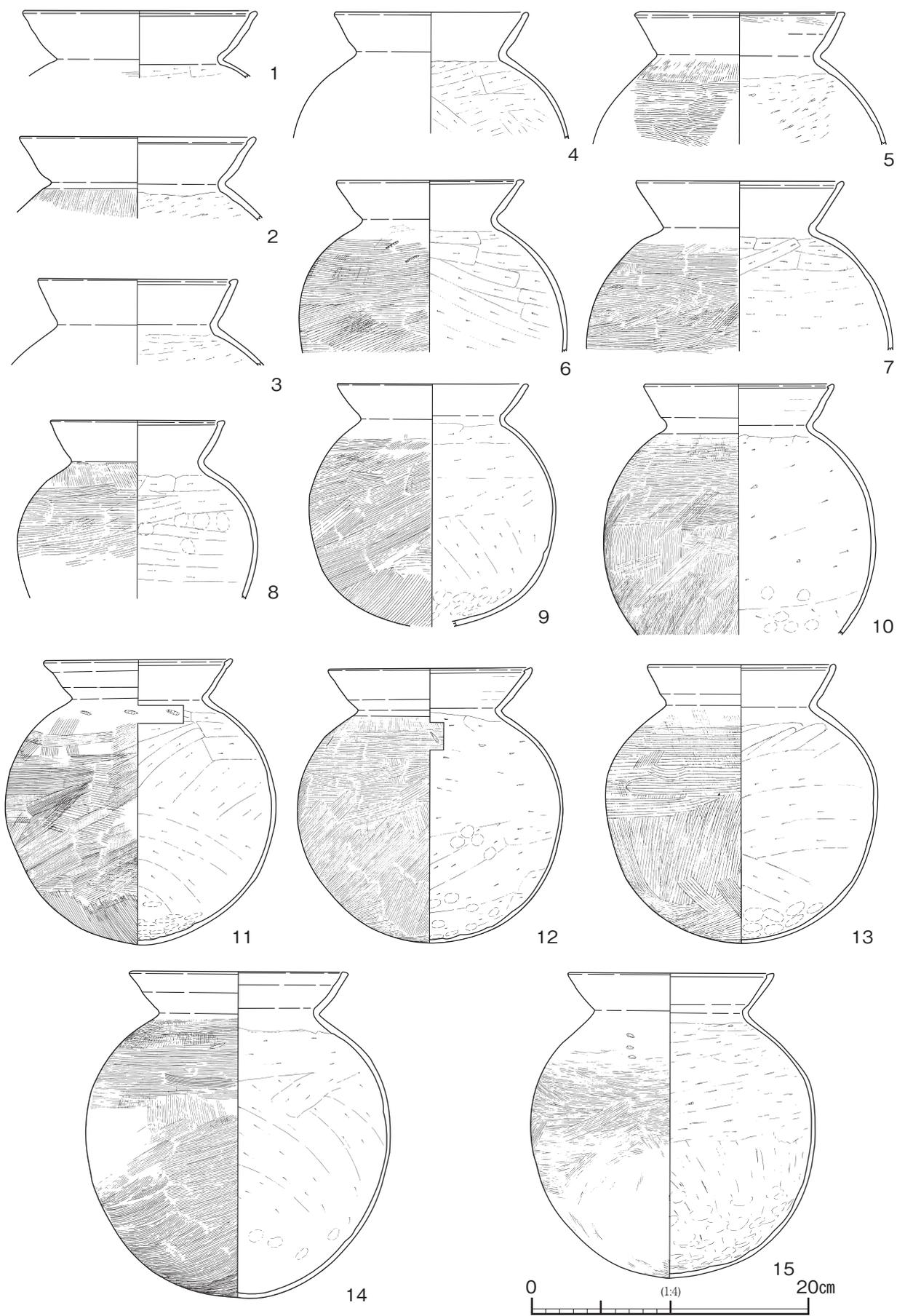


图 350 15号墳 出土遺物 (4)

想像のみであるが、これほど大型の壺であることから、土器棺として埋葬施設に用いられた可能性が強いと考える。

遺物としては、土器に二重口縁壺・直口壺・鉢・小形丸底土器・高杯・甕、石製品に摺石、木製品に刀子鞘・木錘・横槌・棒状品・扉板等が出土した（図347～354、図版397～409）。二重口縁壺と直口壺については、完形に復元できなかった2個体を除くと、すべて底部に焼成後の穿孔が認められる。図347-1は小型の二重口縁壺である。2は最終がハケ調整のみで、ミガキ調整の認められない二重口縁壺である。3の直口壺は、底部穿孔の周縁に加工時の工具痕が明瞭に残存し、その周辺に赤色顔料が部分的に付着する様子が確認される。4・5は微細な部分では異なるものの、外面を縦方向のミガキ調整し、肩部に櫛描直線・波状文、口縁屈曲部に竹管円形浮文、口縁部内外面に放射状の暗文を施す等、意匠としては全く同一の二重口縁壺である。5のみ、頸部から肩部にかけての内外面に赤色顔料の付着と、底部穿孔部分には工具痕が認められる。図348-1・2は直口壺であり、1は内面の下半にケズリを行う。2の外面にはハケ調整後に縦方向の粗いミガキを暗文状に行い、下半に赤色顔料を塗布する。また、口縁部内外面に放射状のミガキを施す点や、内面の頸部から肩部にかけて横ミガキを行う点等は二重口縁壺の影響であろうか。なお、図347-3・4は西側周溝の最下層である第5-1層から、5は北側周溝から出土したものである。図348-3～16は小形品である。鉢は弥生時代的な平底のものしか見られない一方、いわゆる定型化した精製の小形丸底壺がまとまって出土している。1は口縁部に弱い片口がつけられており、5・6は有孔鉢である。これらの小形品のうち、3・5は北東側周溝の外側から、7は北側周溝の上層、8は北東側周溝の最下層、10は西側周溝の上層から出土した以外は、6・9・11・13～16が西側周溝付近からみつかったことがわかるのみである。図349は高杯である。杯部の屈曲部に稜線の入る有稜型式と、緩やかに連続する型式の2つに分かれ、椀形や有段のものはまったくみ

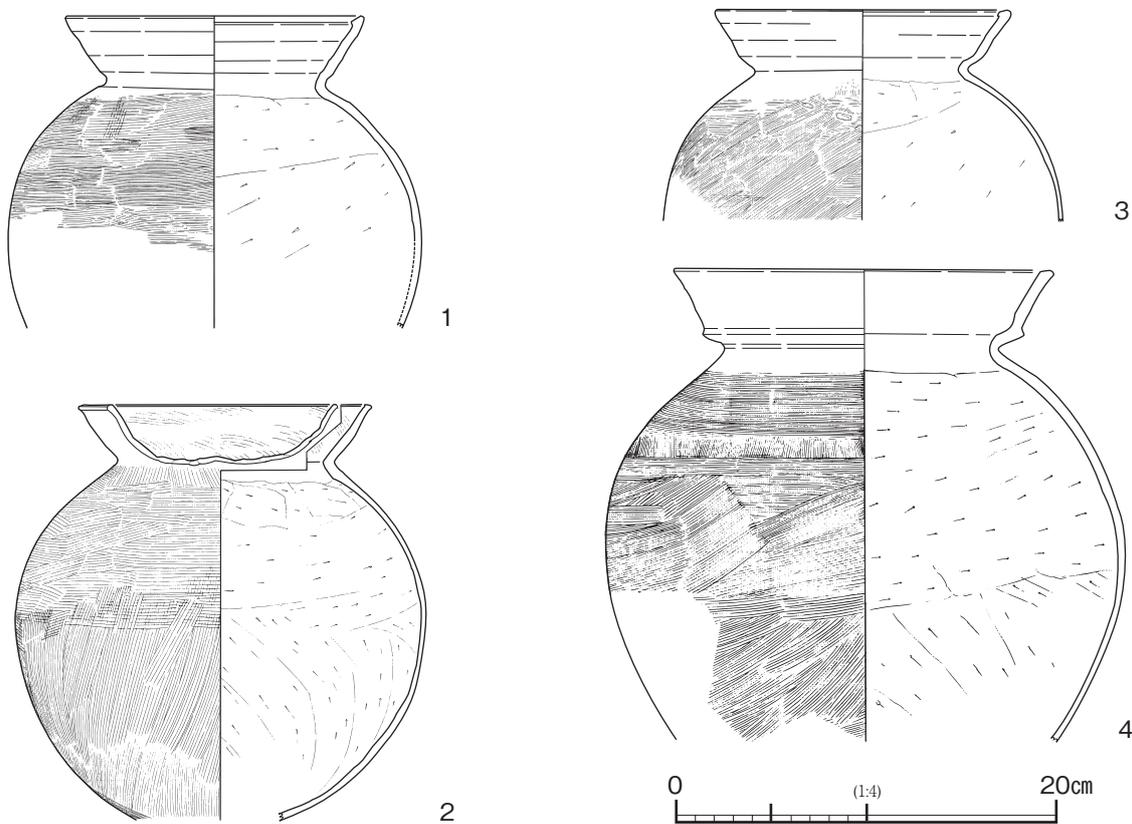


図 351 15号墳 出土遺物 (5)

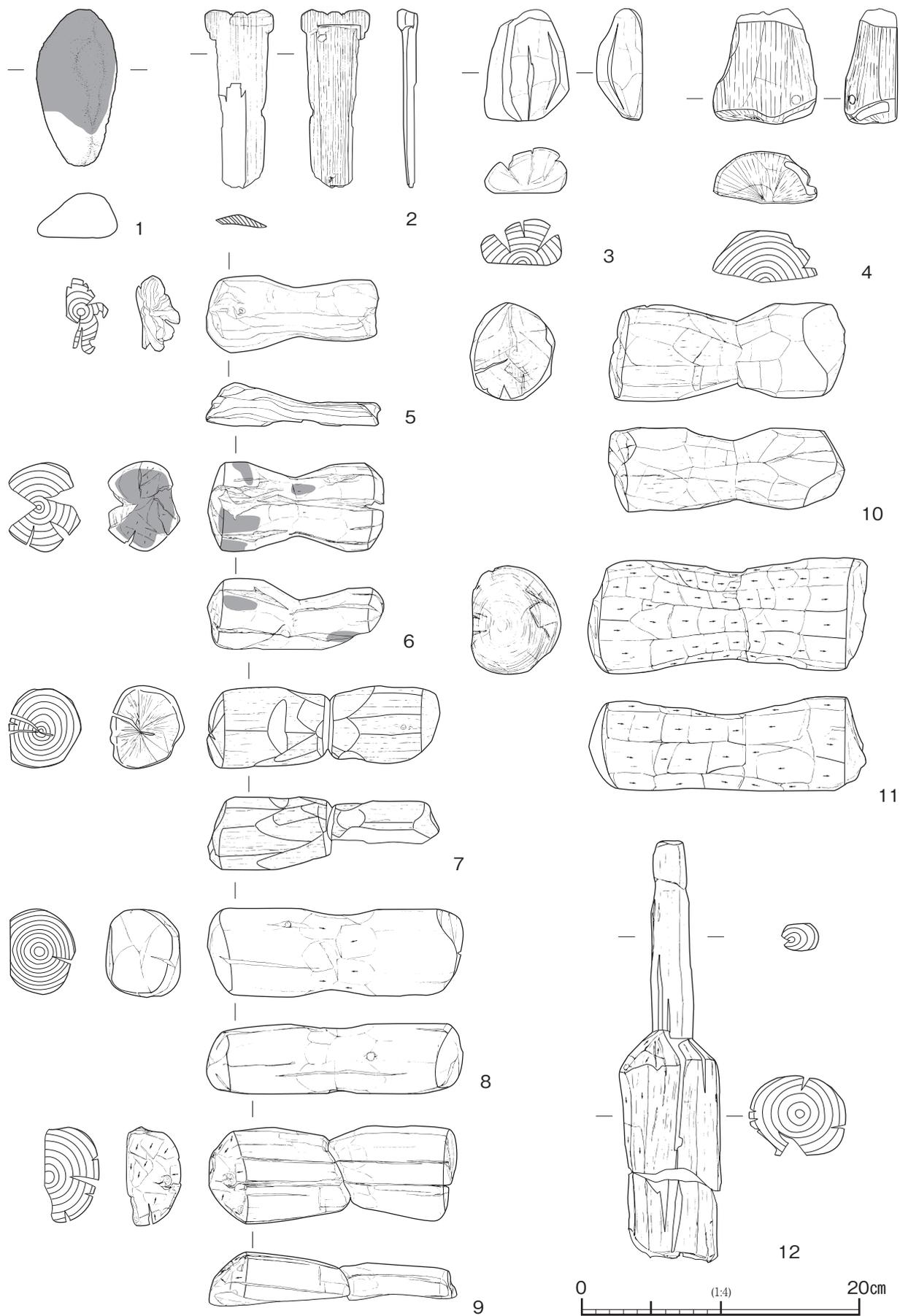


图 352 15号墳 出土遺物 (6)

られなかった。3・9・13・21・22は有稜であり、21を除くと、外面に細かな横ミガキが顕著にみられる。21は杯部外面をケズリにより整形する。上記以外は無稜のいわゆる布留系とされるものであり、16以外はナデとハケにより整形する。16はやや丸味を持つ杯部を呈し、有稜高杯と同様の細かな横ミガキが顕著に認められる。なお、1・2・10～12・15・17・18・20では、脚部内側の杯部底面に棒状工具痕が明瞭に観察される。また、多くは脚部に円孔を持たないが、4・7では3方向、18・19では2方向に認められる。図350・351は甕であり、図351-4以外は、いわゆる布留式甕と呼ばれるものである。このうち図350-6・11・12・14・15の肩部には刺突文が施される。図351-4は山陰系の影響を受けた複合口縁甕である。布留式甕の口縁端部の肥厚や肩部の横ハケはすでに定型化した様相を示しており、布留式期の所産であると考えられる。なお、完形に復元可能なものについて、底部を含むいずれにも穿孔の痕跡を見ることはなかった。

石製品は図352-1に図示する砂岩製摺石が出土し

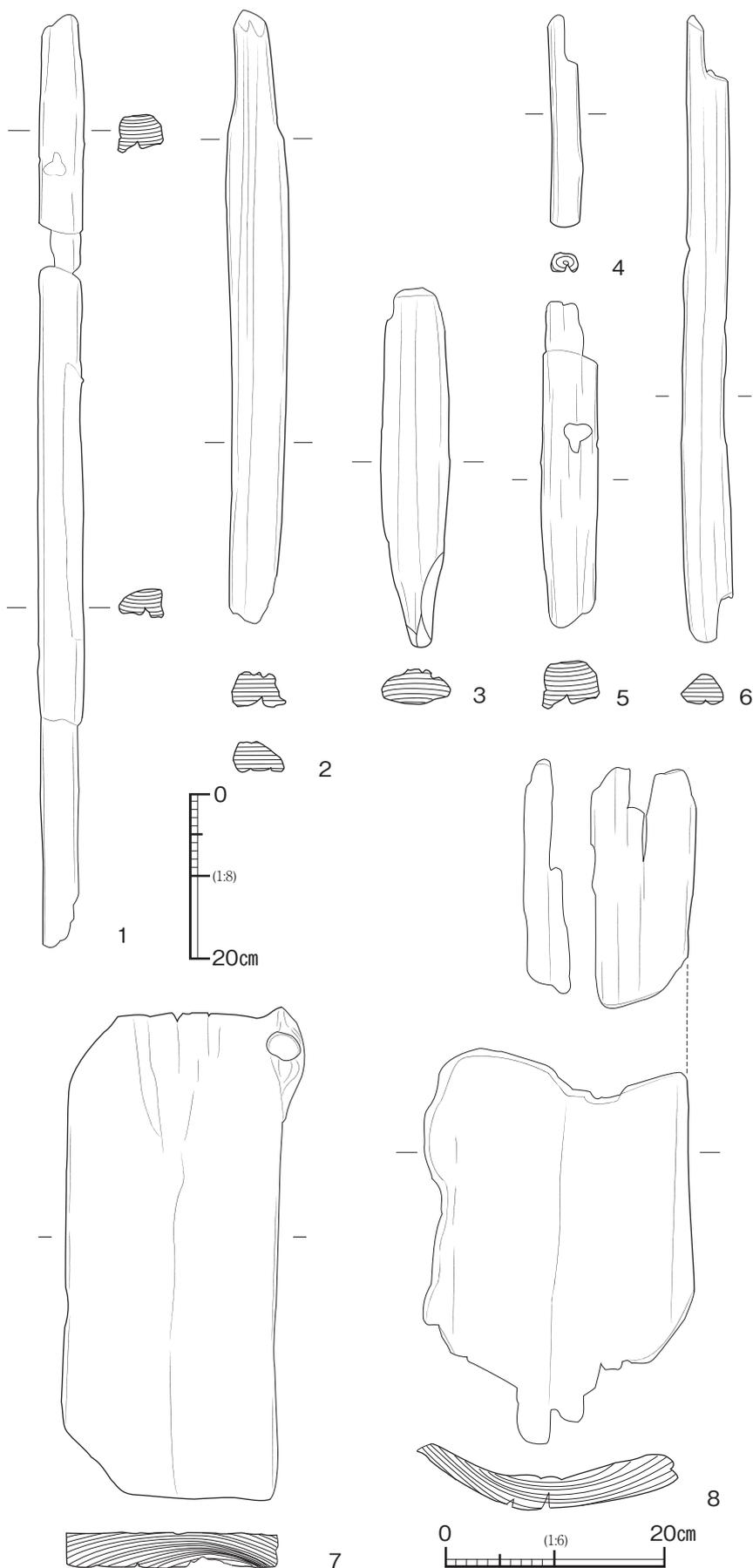


図353 15号墳 出土遺物(7)

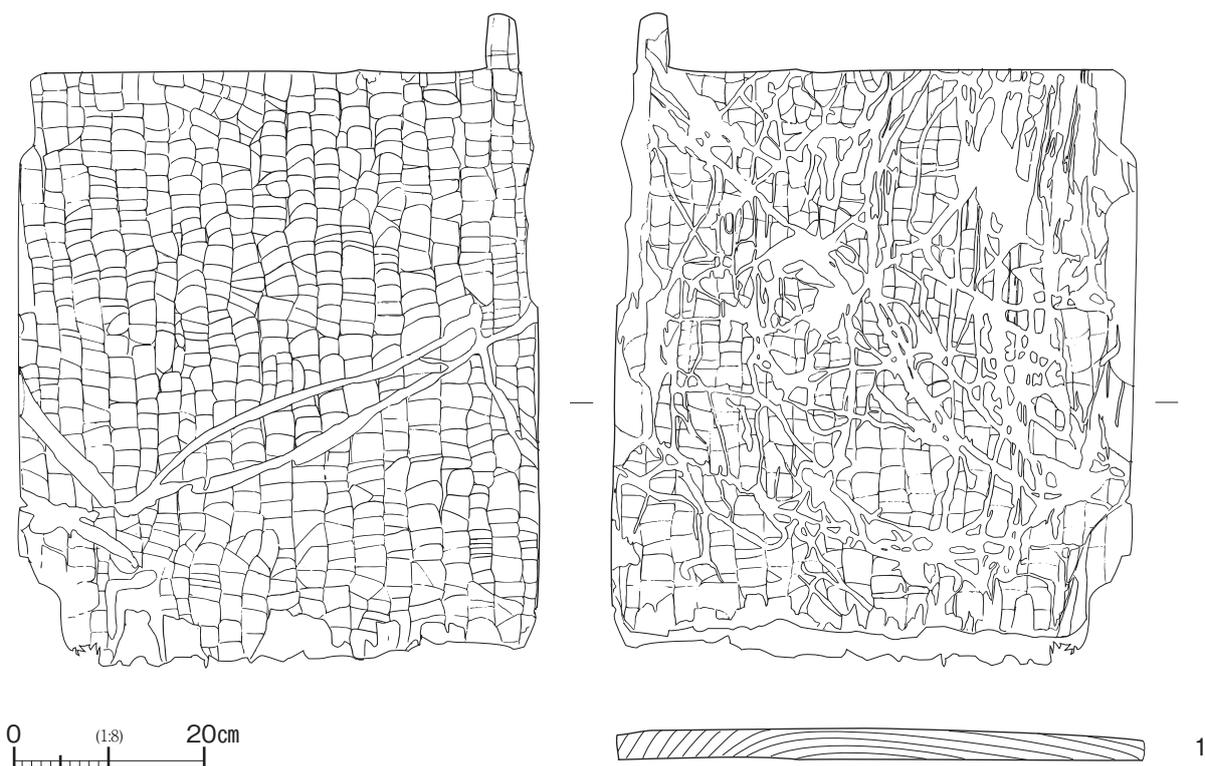


図354 15号墳 出土遺物(8)

た。後述する49号墳では赤色顔料の付着する石柁が出土するものの、本例ではそのような痕跡は認められず、代わりに煤が広範囲に付着する様子を看取した。

木質遺物の大半は棒状自然木であったため、確認後に廃棄し、加工痕の残るもののみを図示した(図352~354)。2はヒノキ材を用いた鞘状製品である。2枚合せの片側と思われ、内側に1mm程の削り込みと、上端に結び目状の陽刻が認められる。3~11は木錘であり、図343の南端において一括して出土した。樹種はムクノキ・コナラ亜属・サカキを使用し、縦や横に半裁したものがみられる。また、6は被熱により部分的に炭化する。12はアカガシ亜属による横槌である。図353-1~6は棒状木製品のうち、先端等に加工の残るものである。これによると、径は4cm前後を測り、丸太材以外に割材を使用する。7は用途不明の板状製品である。スギ材を使用し、2ヶ所に隅切りを行う。なお、1角に残る孔は節によるものであるが、ちょうど半切した中心線上に位置することから、故意に残されたものの可能性も考えられる。8はマツ材による用途不明の木製品である。芯側に向かって緩やかに湾曲するが、収縮によるものではないことから、棺材等の可能性を考える。図354は北西周溝付近から出土した扉板の一部である。カヤ材を使用し、厚さ3.5cmの板材の両面に整然と並ぶ削り痕が明瞭に残る。軸部の片側が残存しており、摩滅がほとんどみられないことから、上部側のもと考えられる(図版407)。なお、右図の蜘蛛巣状の傷痕は、接地した面にできた生痕であり、廃棄後のしばらくは地表面にあったことを示している。

22号墳 調査区の中央からやや西寄り、 $X = -153,053$ 、 $Y = -38,203$ に位置する(図355、図版115~118)。墳丘上には操車場当時の攪乱が多数存在し、上面も後世の攪拌により削平されている。しかし、墳丘の形状や周溝の範囲等、全体的な景観としては比較的残りの良好な墳墓である。

墳丘は隅丸方形を呈し、基底面における規模は、東西が約14m、南北が約12.5mを測る。確認した墳丘の高さは45~60cmである。墳丘盛土の直下では、全面において明瞭な第5-2層が残存するのを確認

した(図356)。この土壌化層の上部に、18に細分が可能な墳丘盛土層を検出した。盛土の層厚は薄いものの、広範囲に堆積するために単位としては大きくなっており、墳丘の中央部に向かって斜めに積み上げられる。盛土の上下において、土質には特に差異が認められないことから、墳丘構築に際する土砂の確保のために周溝を深く掘削し、第5-2層を盛土として大量に使用するというはなかつたようである。

周溝は南側に操車場時の大規模な攪乱が存在するものの、墳丘の四周に巡る様子を確認した。断面形は皿状を呈し、周溝の幅は2.5~10mと場所によって変化が激しく、深さは基底面から約40cmを測る。

埋土は、北・西側周溝の底部にわずかな崩落土を検出する以外、多くは第5-1層が形成されるのみ

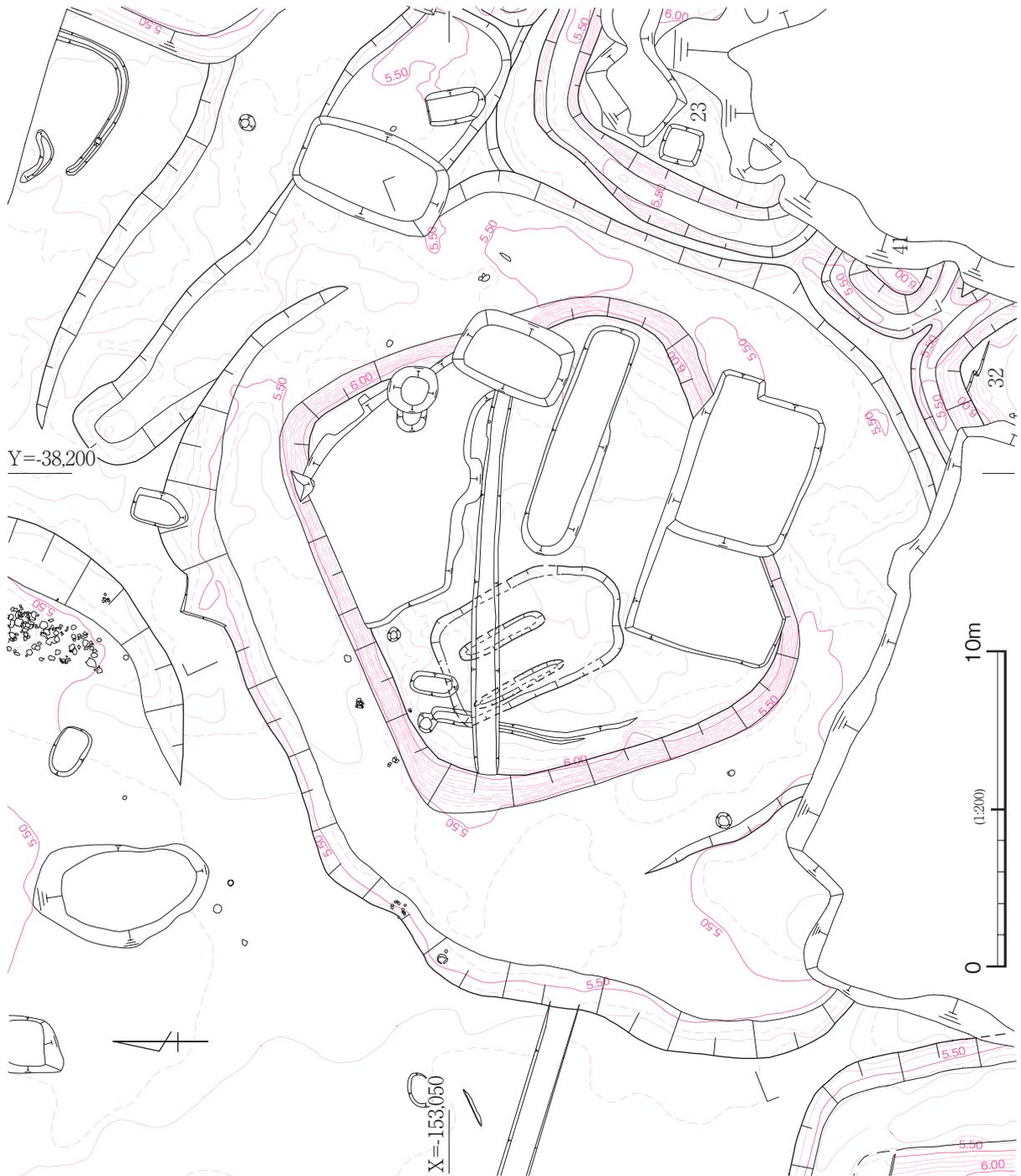
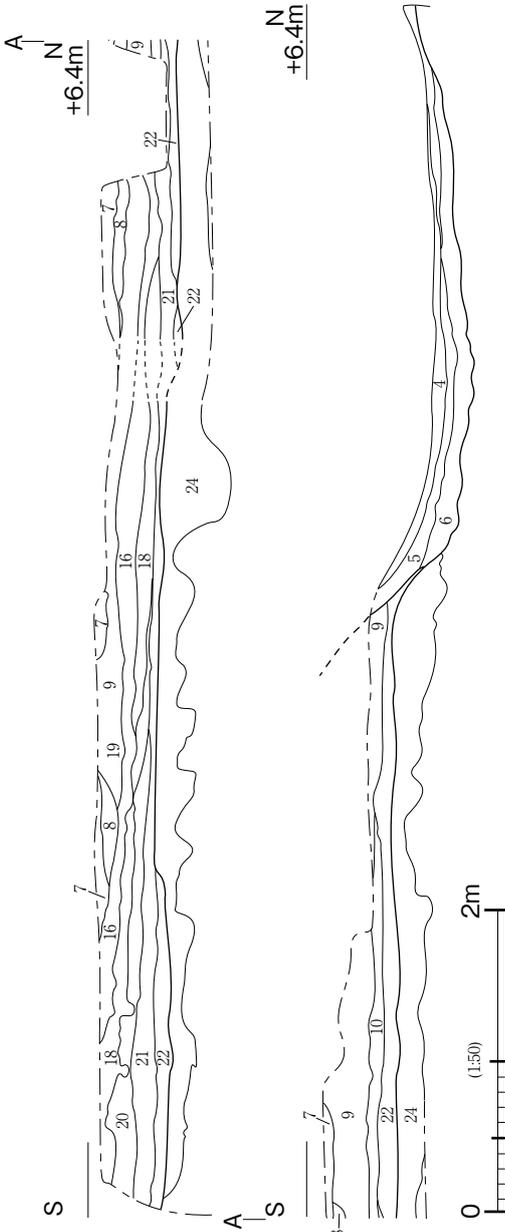
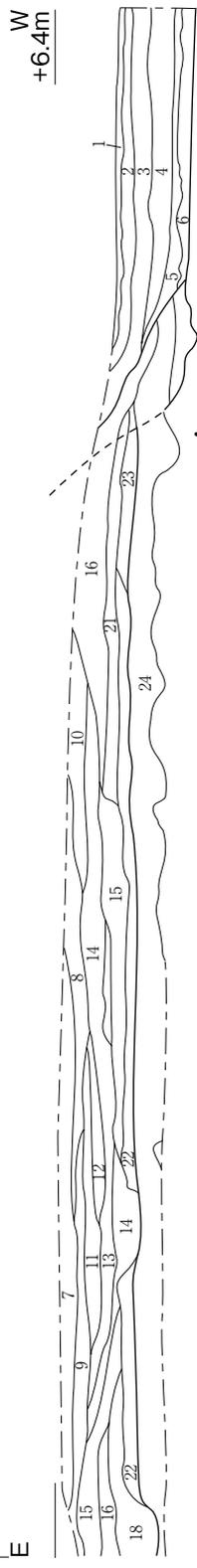
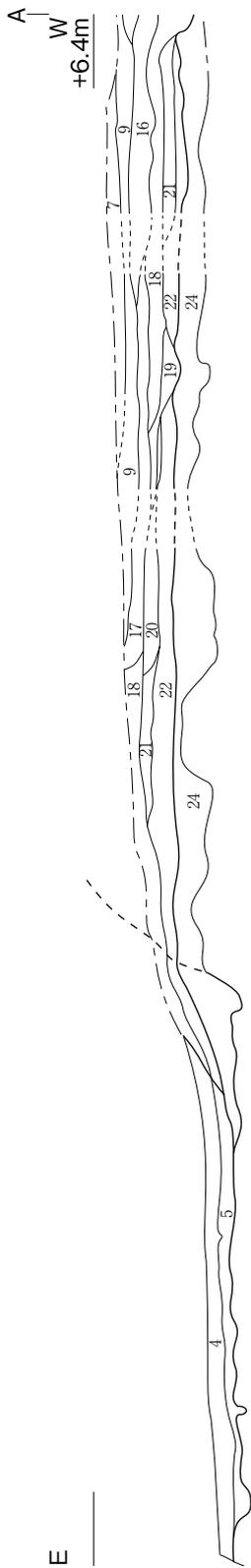


図 355 22号墳 平面



- | | | | | | |
|----|------|---|----------|--------|--------------------------|
| 1 | 初-ア | 褐 | 25Y4/3 | 細砂混粘土外 | (斑鉄) |
| 2 | 灰初-ア | | 5Y4/2 | 外-細砂 | (植物遺体含む, 灰沈着) |
| 3 | 初-ア | 黒 | 5Y3/2 | 外-微砂 | (植物遺体含む, 灰沈着) |
| 4 | 暗初-ア | | 5Y4/3 | 粘土-外 | (植物遺体含む, 灰沈着) |
| 5 | 初-ア | 黒 | 5Y2/2 | 粘土-外 | (微細アロパ状, 炭化物多く含む) |
| 6 | 暗緑灰 | | 7.5GY4/1 | 細砂混粘土外 | (中砂含む, Fe沈着) |
| 7 | 暗緑黄 | | 2.5Y5/3 | 細砂混粘土外 | (中砂含む, Fe沈着, 斑鉄, Mn斑) |
| 8 | 暗初-ア | 褐 | 2.5Y4/2 | 細砂混粘土外 | (炭化物わすかに含む, 斑鉄, Mn斑) |
| 9 | 暗初-ア | | 2.5Y3/3 | 細砂混粘土外 | (斑鉄) |
| 10 | 灰初-ア | | 5Y5/3 | 細砂混粘土外 | (中砂含む, 斑鉄, Mn斑) |
| 11 | 初-ア | 黒 | 5Y3/2 | 細砂混粘土外 | (炭化物含む, 斑鉄) |
| 12 | 暗灰黄 | | 2.5Y4/2 | 細砂混粘土外 | (炭化物含む, 斑鉄) |
| 13 | 初-ア | 褐 | 2.5Y4/3 | 細砂混粘土外 | (小・中礫・細砂アロパ含む, Fe沈着, 斑鉄) |
| 14 | 灰初-ア | | 5Y4/2 | 外 | (中・粗砂・細砂アロパ, 炭化物含む, 斑鉄) |
| 15 | 灰 | | 7.5Y4/1 | 微砂混粘土外 | (斑鉄) |
| 16 | 初-ア | 褐 | 2.5Y4/3 | 細砂混粘土外 | (細・中砂, 炭化物含む, 斑鉄) |
| 17 | 暗灰黄 | | 2.5Y5/2 | 細砂混粘土外 | (アロパ多く含む, Fe沈着, 斑鉄) |
| 18 | 暗灰黄 | | 2.5Y4/2 | 細砂混粘土外 | (アロパ状, 中・粗砂, 炭化物含む, 斑鉄) |
| 19 | 初-ア | 黒 | 5Y3/2 | 細砂混粘土外 | (アロパ状, 小・中礫多く含む, 斑鉄) |
| 20 | 暗灰黄 | | 2.5Y3/2 | 微砂混粘土外 | (中砂, 炭化物含む, 斑鉄) |
| 21 | 暗初-ア | | 2.5Y4/2 | 細砂混粘土外 | (炭化物含む, 斑鉄) |
| 22 | 灰初-ア | | 5Y4/2 | 細砂混粘土外 | (炭化物含む, 斑鉄) |
| 23 | 暗初-ア | 褐 | 2.5Y3/2 | 細砂混粘土外 | (斑鉄) |
| 24 | 灰初-ア | | 5Y4/2 | 細砂混粘土外 | (炭化物含む, 斑鉄) |

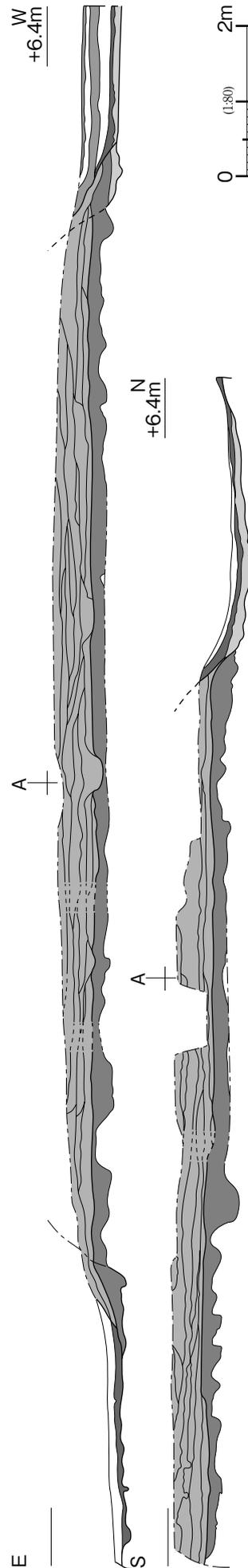
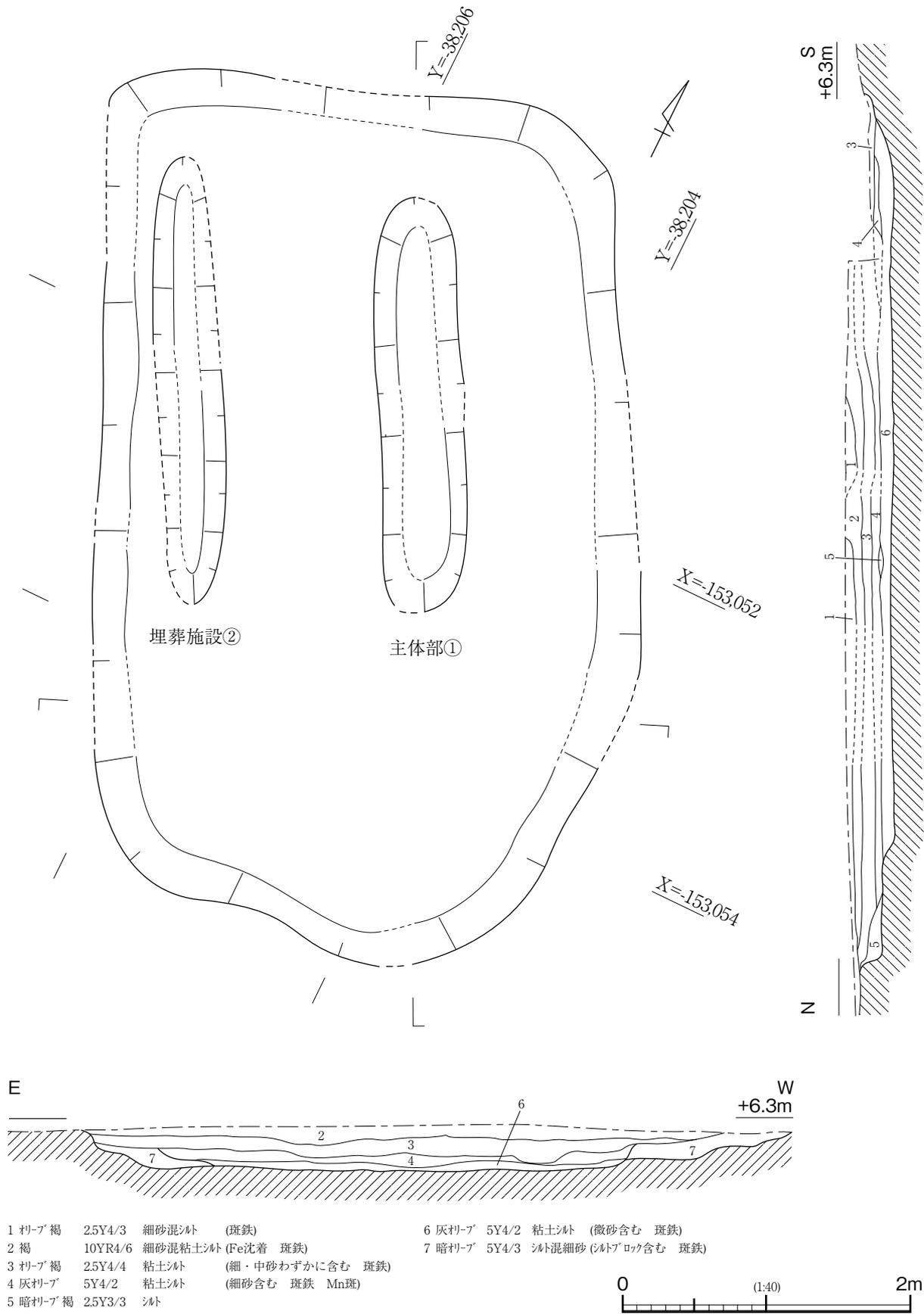


图 356 22号墳 断面



- | | | | | | | | |
|----------|---------|----------|-----------------|--------|-------|--------|----------------|
| 1 杓-ブ 褐 | 25Y4/3 | 細砂混シルト | (斑鉄) | 6 灰杓-ブ | 5Y4/2 | 粘土シルト | (微砂含む 斑鉄) |
| 2 褐 | 10YR4/6 | 細砂混粘土シルト | (Fe沈着 斑鉄) | 7 暗杓-ブ | 5Y4/3 | シルト混細砂 | (シルトブロック含む 斑鉄) |
| 3 杓-ブ 褐 | 25Y4/4 | 粘土シルト | (細・中砂わずかに含む 斑鉄) | | | | |
| 4 灰杓-ブ | 5Y4/2 | 粘土シルト | (細砂含む 斑鉄 Mn斑) | | | | |
| 5 暗杓-ブ 褐 | 25Y3/3 | シルト | | | | | |

図 357 22号墳 主体部①・埋葬施設② 平・断面

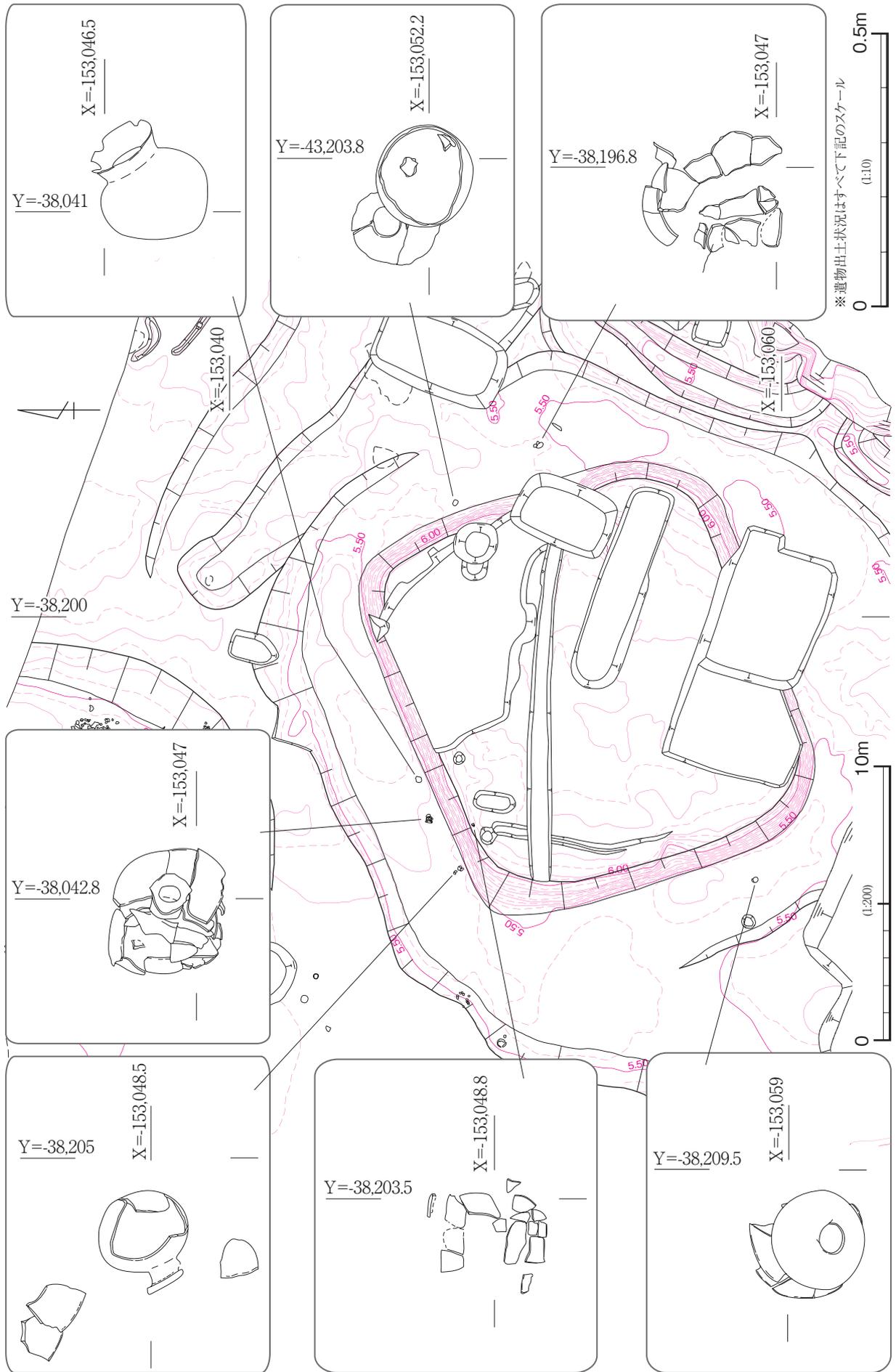


図 358 22号墳 遺物出土状況

であり、その上部に堆積する第4層によって周溝は埋没したことが明らかとなった。

22号墳の周溝は規模・形状共に特徴的であり、本墳墓群内では44号墳以外に同様の周溝は認められない。基底面における墳丘面積が約177㎡であるのに対し、周溝部分は331㎡を測る。南西周溝の底面では、墳丘裾から約3mの位置に段差を検出した。北側の周溝幅に近似することから、当初は同地点に周溝肩が存在したものと推測する。この場合の周溝面積は242㎡であり、掘削深度を40cmにすると、排土は約97㎡となる。墳丘高を検出した60cm以上にするためには100㎡以上の盛土が必要であり、70cmでは117㎡の土砂を必要とする。内側の周溝だけでは土砂が不足するため、南西方向に掘削範囲を拡大したものと考えたい。東側は墳墓が密集するため、物理的に掘削が不可能なことは理解できるが、南西部を選んだ理由についてはまったく不明のままである。また、他の墳墓のように周溝の掘削深度を下げなかった点については、44号墳と同様、周溝を広くすることでより大きく見せようという視覚的効果を狙ったものと考えられる。

埋葬施設としては、墳丘のほぼ中央、 $X = -153.052$ 、 $Y = -38.205$ 付近において、大型の土坑1基を検出した(図357)。土坑は隅丸長方形を呈し、幅3.5～3.8m、長さ最大約6.1m、深さ約30cmを測る。当初は、周縁の盛土を築くことで自然に発生した中央部の凹みと考えた。しかし、底面から2条の溝状遺構を検出し、墳丘下面にみる耕作痕と埋土が異なることから、上記の土坑を墓坑とする埋葬施設と推測する(図版117-6)。墓坑底面の溝は、東側を**主体部①**、西側を**埋葬施設②**と仮称する。①は全長約2.9m、幅約60cm、②は全長約3.15m、幅約45cmであり、共に深さ約10cmを測る。両溝は平行関係にあり、また墓坑主軸ともほぼ一致する。頭位は不明であるが、真北から約27.5°西に振る。東西に並ぶ棺床の可能性を考えるものの、棺材片や骨片等の物証はみつからなかった。この他に土器棺や土坑墓等の副次的な埋葬施設はみつかっていない。

遺物の大半は周溝内から出土し、1点のみ墳丘肩口からみつかった(図358、図版116)。周溝内の土器はいずれも墳丘際に位置し、個体のまま圧砕された状態で出土した。天地が逆であったり、横転したりする様子や、墳丘北西隅の肩口に土器が引っ掛かったような状態でみつかったことから、いずれも墳丘上から転落したものと考える。これらの土器はすべて第4層に覆われ、第5-1層上面から出土することから、第4層の氾濫が発生する直前に周溝へと転落したものと推測できる。

出土した土器は、二重口縁壺・直口壺・広口壺に限られ、点数もわずかである(図359、図版409～411)。1・3・10が北西周溝、6・9が墳丘の北西肩部、2・7・8が北東周溝、4が南東周溝、5・11・12が南西周溝から出土した土器である。二重口縁壺が満遍なく周溝からみつかった点は注目される。精製の二重口縁壺と直口壺は、一部不明なものもあるが、底部穿孔と赤色顔料の塗布を共通項として認められる。底部穿孔については、周縁に擦痕や、2のような直径2mm前後の錐痕が残っており、焼成後に加工されたことが明らかである(図版410・411)。10は粗いタタキの残る直口壺であり、僅かに平底の傾向がみられる。写真では口縁部に欠けがみられるものの、その部分の風化が著しいことからあえて打ち欠きとしなかった。胎土が他と異質であり、搬入品の可能性も考えられる。12は西側周溝付近から破片で出土した壺である。上部の破片がみつからず、破断面には人為的に打ち欠いた痕跡が認められる。現地調査では検出しなかったものの、墳墓の周辺に土器棺が存在した可能性を示唆するものとする。出土した遺物は、定型化した二重口縁壺と小型直口壺が主要なものとなっており、背景に確立された葬送儀礼を窺わせる。今後、墳墓の築造との関連性を検討する必要があるものの、時期的には布留式期最古段階に比定する。